

---

# **真・恋姫†無双～伝説を継ぐ物語と愚者～**

スペリオルス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真・恋姫十無双～伝説を継ぐ物と愚者～

### 【NNコード】

N5111X

### 【作者名】

スペリオルス

### 【あらすじ】

馬鹿が馬鹿とであつたせいで外史の一つが滅びる…？そこで偶然子供守つてなくなつた男をその世界の抑止力として送り込まれた！！送り込まれた青年は登場人物の彼女達が消えるのを防ぐために、馬鹿の魔の手から守るために奔走する…！

## 登場人物紹介・設定（前書き）

まずは登場人物の細かい（？）設定です  
至らぬところも多いでしょうが  
楽しんでください！！

## 登場人物紹介・設定

姓：珀 名：武 字：麒麟 真名：龍鳳

イメージCV：森田成一（幼年時代は松岡由貴）  
この物語の主人公。

とある事情により命を落とす。

本来は転生は出来ないらしいのだがとある馬鹿の性でその外史が滅びる事が発覚し、事情が事情なのと三国志関係の知識を持つていたため『恋姫』の世界に転生させられる。

性格は人当たりがよく敵を作りにくい。この世界に来る原因が原因なため阿呆というか頭がぶつ飛んでる奴が心底嫌い。

容姿は『BLEACH』の下睫がない志波海燕（分かりやすく言うと黒髪の黒崎一護）ただし髪型は藍染との最終決戦時のもの、身長は大体180cmぐらい（原作開始時）  
滅びる要因を倒すために能力を貰っている。

詳細は

- ・『NARUTO』の『写輪眼』（万華鏡に開眼済み、かつ失明無し、須佐能乎スサノオはイタチと同じ）
- ・『NARUTO』の全ての忍術&amp;全ての忍具の口寄せ可能
- ・『BLEACH』の海燕の斬魄刀『拔花ねじばな』と一護の斬魄刀『斬月せんげつ』（一護の方は卍解も可能）
- ・『ONE PIECE』の『霸王色・武装色・見聞色の霸氣』と

身体成長

・三国志の時代でも使える現代の知識と自身や軍隊を鍛えるのに効果的な鍛錬方法に戦うのに必要な兵法と戦闘方法、完全瞬間記憶能力（本ならば一度読めば内容を全部覚えられる）

また名前の由来は中国で神聖とされ、東西南北中央の守護神・青竜、白虎、朱雀、玄武、麒麟に習って命名された

北郷一刀  
ほくじょうかずと

もう1人の転生者。自身の欲望に忠実で可愛い女の子に眼がない。いわゆるチャラ男。前世では『恋姫』シリーズを全部プレイしていたためその流れでこの世界に転生する。その際にニコポ、ナデポといった能力を貰う。ただし主人公が転生したことで『恋姫』のメンバーには効かなくなっている

北郷一刀也  
ほくじょうかじや

本来北郷一刀になるはずだった青年。上記の馬鹿が『一刀に転生したい』と願ったためこうなった。性格は本来の一刀そのもの。ただし本編には登場しない。上記人物の回想だけでしか出番はないだろう

貂蝉  
貂蟬

于吉

左慈

外史の管理者達。

外史が滅びる要因を倒すために管理者勢は全員主人公の味方、といふか管理者にも教えずに滅びの原因を送り込んだためどうにかその原因を倒そうと画策しているも、詳細がまだ分からぬため目処が立っていない

登場人物紹介・設定（後書き）

10 / 17 — 部変更

♪ルルルーベ（前書き）

作：まずはお前がビリビリになつたかだ

龍：略仕方が『リリ』の方と一緒にじゃないか

作：俺がすきなんだ、龍とこう字が

龍：おい

作：細かいのもいいで書くんだよな～

龍：前話の意味ねえ！！

## ぶるるーぐ

S i d e　主人公

「　「　「　どうもすまなかつた」　」　」

「いや、いきなり土下座されても…顔上げてどうしてこうなつたのが簡潔で良いから説明してくれないか？」

「私は貂蝉よ～」

「わしは卑弥呼じや」

「于吉と申します」

「左慈だ」

「あ、いやどうしてこうなつたのかを説明して欲しいんだが…」

「うん、実はね～ん」

- ・別の地球で一人の男性が死亡
- ・その原因は神様
- ・それ自体を誤魔化す為に別の世界に転生させる  
　・『真・恋姫十夢想』と呼ばれる世界だがそれは実際の世界として存在している
- ・その人間は実はマイナスエネルギーの塊でそれが原因でその世界（外史）が滅びようとしている
- ・それを防ぐために強力なプラスエネルギーを持つ人間を探していた
- ・そのとき調査に出ていたものが死に掛けたのを助けたのが俺

・といふか変わりに死んだらしく、さらに好都合なことに強力なプラストエネルギーを持つていたためその世界に行つて欲しい

「といふことか？」

「やうなのよ～ん」

「引き受けてくれんかのう？」

「もちろんだとは言いませんよ」

「いひうりで出来る限りのフオローと能力の贈与をしてやる」

「氣前良いな…もしかして俺が死んだ原因の子があんたらと一緒に調査に出ていた奴とかいわないだろうな？」

「　　「　　「じつはそのとおりです」　　」

「まあしつかり認めたから文句は言わないが…とりあえずはそいつの能力と特徴を教えて欲しいんだが」

「いいわよん」

んでその転生者の特徴だが

- ・本来その世界で『天の御遣い』となる予定の男に成り代わる
- ・身体的特徴はなぜかメガネ付きのその男<sup>らしい</sup>
- ・能力として死の原因となつた神からニコポ、ナデポの能力を得た（らしい）

「何で（らしい）つてつくんだよ

「その神からの情報がまだ着てないからよん。今わかつてるのは尊として聞いたものよん」

「た、大変です~」

「む、ヒロではないか」

「そんなに慌てて…いつたこどりしたんですか?」

「そ、それが…」

「まさか俺達が新しく管理する外史に転生者を主人公（予定）として勝手に送り込んだ神が資格剥奪されて下界か外史に、しかもさつき行つたところに流れ込んだとか言つんじゃないだろうな?」

「あ、左慈さんの言つたとおりです!!」

「「「「「いやさ、マジふざけんなよ、いつたこどりじるといふ」」」

「」

「しかもその神様は外史には関わるか関わらないか分からな」「それで…それとこれが件の転生者の能力とかです」

「台ヒラから貰つた紙に書かれていたことはさつき尊として聞いたものそのまま…これってどうなんだろう?」

「まあこれで何とかなるわねん」

「うむ」

「彼を主人公、いえ最悪あたらな登場人物とすれば」

「奴の能力は無効化できるからな」

「あ、先ほどはありがとうございました」

「いえいえ…って何のんきに言つてんだお前…！謝罪はないのか…？俺を殺したことに対する謝罪はないのか…？」

「ア…あの…」めんなさい」

「…謝つたからまあいい…が、今後は気をつけようにな…正直二度とあつて欲しくないが」

「そこいら辺はダイジョブよ〜ん」

「それでお前さんにはお前たちの世界では『恋姫十夢想』と呼ばれているゲームの世界に行つてもらつ」

「名前事態は知つてゐる…でも俺原作知らないんだけど…知つてるといえば知つてゐるが二次創作小説を読んだだけだぞ…三国志自体は正史と演技、ほぼ網羅してるけど…」

「それなら余計に大丈夫ですね」

「その世界はいわゆるその一次創作小説に当たるからな」

「でもな…」

「何が不安なんですか？」

「本来はゲームだから敵に突っ込んでつてもそう簡単に死んだりしないけど、俺にとっては『現実』だからな…つかつにそんなこととか…最悪賊に襲われたらその性悪な転生者止める前に死ぬ」

「それも大丈夫よ」

「お前さんがそなならんよう力を与えることを許可されたからな」

「神様といつても件の用な低級から天照様や仏陀様のように超大物の方もいますからね」

「今回は特例といつ」と許していただいたんだ、本来は許されない転生をな」

「あ、やつぱりだめなんだ」

「転生は記憶をそのまま保持していることが多いですから…それでその世界の修正力が効かず滅茶苦茶になつて世界そのものが滅びてしまつた例もあつたそうなので禁止したんです」

「それに人間の一生は実は多少決まつててね、それを書類とかで管理してるのよ」

「つてことは今回は決まつている書類を変な風にしちまつてそいつが死亡」、それで処罰を恐れて禁止された転生を行い、ばれて剥奪と追放、んで俺はお前らの仲間を偶然助けて死んで、都合が良かつたから尻拭い…そいつあつたら速攻ぶつ殺して良いか？」

「悪いがそれは出来ん…そいつの新しく決められた寿命は一〇〇年だからな」

「無駄に長い…一体ドンだけ欲深なんだ…」

「ですがその世界にいるのは約3年ぐらいなんですよ」

「俺の記憶だと三国志いつら50年以上の気がするんだが…」

「やうなつてないのが『外史』、お前達で言う『平行世界』<sup>パラレルワールド</sup>だな」

「納得…で、本格的にさせようんだ?」

「その」は黄巾の乱の中盤ぐらごに現れるわん

「魏、呉、蜀もしくはほかの勢力のところに『天の御遣』として降り立つな」

「そして自らの欲望…『その世界の有名武将全員をはべらせる』といふ願いをかなえようとあるでしょ?」

「お前はそれを阻止しつつ、そいつを元の世界に帰すために乱世を収束させれば良いのや」

「まあ理解した…でも一次創作とかでの知識だけど蜀か呉に落ちたら最悪じゃないか?天然系が多いところとその血を入れようと積極的に迫ってくる連中のところだぞ」

「あ、それに関しても操作して良いと許可を貰いました」

「どうか完全に世界が壊れるのを防がなきやいけないんだから出るよな、そりゃ…まあこれで防ぎ方がはつきりしたな」

「そうね、最悪そいつが狙っている子を一人落としちゃえばその願いは叶わない」

「そして修正力によつて半強制的にもとの世界に戻されるからな」

「ではようし」「「「「そのまえにやることがあるだら?」「「「「「そうでしたね」

「では能力を授けるぞ、希望があつたらいつてくれ」

「」」なんとこりかな

- ・『NARUTO』の『写輪眼』（万華鏡に開眼済み、かつ失明無し、須佐能乎スサノオはイタチと同じ）
- ・『NARUTO』の全ての忍術&amp;全ての忍具の口寄せ可能
- ・『BLEACH』の海燕の斬魄刀『捩花ねじばな』と一護の斬魄刀『斬月せんげつ』（一護の方は元解も可能）
- ・『ONE PIECE』の『霸王色・武装色・見聞色の霸氣』と

身体成長

・三国志の時代でも使える現代の知識と自身や軍隊を鍛えるのに効果的な鍛錬方法に戦うのに必要な兵法と戦闘方法、完全瞬間記憶能力（本ならば一度読めば内容を全部覚えられる）

「

「」」の『万華鏡写輪眼』の能力は？」

「『天照』あまてらしと『月詠』つきよみ、後『斬月』は虚化なしで」

「まあ『須佐能乎』<sup>スサノオ</sup>があるからいらんわな」

「ほかにはないんですか?」

「まあ文字は同じ漢字だし転生つてことは子供から始まるんだ違う?だつたらそれでおいおい覚えていけるし」

「真面目に覚えてるんだな」

「ああ…あ、それで斬魄刀は適当な年齢になつたらうまく手元に渡るよつに、忍具の方は…」

「…」

「恐らく修正力で忍術は妖術の一種になつてゐるでしょうが…」

「だが万人向けになつとるかもしけん、そこは期待じゃな」

「最悪偶然を装つて閃く感じにしてあげますよ」

「助かる」

「最後に名前だな、お前ずっと『?』だつたからな」

「いや最後にメタ発言すんなよ」

「そつだな…中国だし…天の御遣いに対抗…決めた…」

「どんな名前ですか?」

「姓を珀、名を武、号を麒麟とする。」

「ん~、跟こわねん」

「だがまだ足りんや」

「真名がありませんからね」

「あ、やつか.. んじゃあ真名は龍鳳とするよ」

「由来は何なんだ?」

「珀は白虎、武は玄武、龍は青竜、鳳は朱雀、麒麟はそのままだけ  
どね」

「ほんとヤンク良こわねん」

「ヤツリじやな」

「エハニウムヒドすか?」

「中國の<sup>ナガ</sup>護獸達から取つたんですよ、惑ひの世界を守るとい  
う彼なりの意思表示でしそうね」

「ん~他にも何か混じつたよつだな」

「あ、あの「転生者」になつても世間でたのねん

「何なんだ?」

「三國志の別の外史の『BB戦士』三國伝」とこの設定が一部盛り込まれたよ」  
「

「これは……各国の代表者は皆の英傑の生まれ変わりといつ感じですね」

「これは大きな影響はないな……どうやら存在そのものが原因みたいだな」

「結構す」これともあるきがあるがな……てかその武器を渡すのかひつなるんだひつな

「やうやくはおこおこって感じですね」

「ではもうこいわねん

「やうじやな

「ですね

「ああ

「行って来る」

「『頑張つて』……」「

「おげんせで～！～！」

そして俺は光を潜り抜けて……

「おれがやつた……おれがやつた……」

赤ん坊となりました…てか意識が覚醒するの3歳ぐらいって指定しどきやよかつた後悔するのはまた後ほど

ふるわーぐ（後書き）

作：原作知らないってどうなんだろ？な、割とマジで

龍：いいんじゃないか？一部そんな人いるし

作：というかちょっと無理栗っぽいのが…

龍：人は勸善懲惡のが好きだから何とかなんだろ

作：そうでもないよ、俺アンチヒーロー物も好きだし

龍：なんで蜀ルートにしたんだよ

作：ああいう無垢な子ってなんかね

龍：納得…で、次回は？

作：一体何があった！？つてぐらい時間が飛ぶだけ言わせて貰おう！！

龍：ビーズの可変機乗りの似非侍があーーー！

## 第一話 今までとこれから（前書き）

作・今回から前書きがちょっと変わるぜ

龍・この作者のもつひとつの作品『魔法少女リリカルなのはSister iker』 青年と魔導師の交わり』の主人公、赤青龍士だ

鳳・んで俺の名前表記は『鳳』になつたのね…てかそつちみみたいに原作キャラを…ってそれだと收拾つかなくなるか

龍・それに真名表記じゃないとかなり複雑になるしな

作・同姓の人つて異常なほどいるからね

龍・そういうえばBB戦士三國伝も使うんだって？

鳳・無謀な気がする…

作・使つのは武器だけだから…曹操はちょっと難しいけど

龍・そこはお前の技量しだいだな

鳳・あまり期待できんがな

全・それでは本編をお楽しみくださいーーー！

## 第一話 今まだ「」れかひ

今現在俺は修行中です…中国の神聖なる山 泰山で

しかも師範は…

「せうせうわつと叫く動かんかーーー！」

「まだまだじや やーーー。」

「早くしないと死にますよ～」

「もつとせざりび動きやがれーーー！」

と、管理者の監視に加えて

「」Jの程度の風、なんともなからつ」…

「」J的な鉄、まったく硬くないだらつ、もつと早く碎かんか

「」Jの程度の熱で根を上げないでくださいね

「」J的な水に押されるでないぞ」

「ふむ…だいぶマシになつてきたが…まだまだだな」

四神の青龍様、白虎様、朱雀様、玄武様、そしてその方達を束ねる地位における麒麟様です

つてかたつた3歳ぐらこの子供になにやらせてんだりつと思つて  
ます

そしてどうしてこうなったかとこうと…あんまり思に出したくな  
いけどこの荒行から逃げるために思い出してみますね

（回想）

俺は洛陽の商床の息子として生まれた…

ほとんど覚えていないが父親も母親もかつては宮廷に仕えていた  
らしく、家には（自衛のためかもしれないが）一通りの武器と兵法  
書がそろっていた

1歳に満たないうちから動き回り、なおかつ自分達あまり読ま  
ない兵法書を嬉々として読んでいる子供…生前読んだ2次創作だと  
『神童だ!!』とか『流石俺（私）の息子だ!!』とかほめてるけ  
ど実際にそんなことはなかつた

むしろ両親には気味悪がられ、徐々に徐々に距離をとられていつ  
ているのが子供ながらに（実際は大人に近いが）分かつた…

そしてつい先日、俺が3歳になつていくばくか過ぎたある日…両  
親が長安に出店するといい、その視察に行くことになつた…避けら  
れてはいたがやはり家族、その旅で何とかできるかもしれないと思  
つていた俺だつたが…

## 現実ハ非情ダツタ

俺を眠り薬で眠らせた後、離縁するところを残し、両親は俺

の元から、いや自分達のところから俺を追い出した

そして目覚めた俺は一番恐れていたことが現実になつたことを知つた…しかし不思議と恨みはなかつた

離縁されたからそれまでの名前なんぞ使う気にならないし……ちなみにこれまでの名前は姓を『無』、名を『妙』、字を『息災』、真名は『大安』……商売魂たくましい感じだつた……

恐らくこんな微妙な名前だつた姓だろうな、恨み抱かなかつたのは…てか誰だつて嫌じやないか？『無』なんてなんかどつかの普通太守よりひどいめに

「どれだけそれに劣等感を持つてるんだ… 次元の壁を越えて突っ込  
まれたぞ

そして俺は子供だったがゆえに、しかも食料とかもたいしてどうかほとんどなかつた…が、運良く管理者達が助けに来てくれ、鍛え上げるとのことこうして泰山に来たのです

しかし泰山は神聖なる山…当然守護者がいると思つていたのです  
がまさか四神と麒麟様とは思いませんでしたよ

でも結構心が広い方達だった、かつ自分達が消滅すると聞き、俺  
がそれを防げる唯一の存在と聞くとまさかの武器とかを与えてくれてかつ一緒に鍛えてくれることになり、冒頭へと戻るしだい  
です

## 回想終了

また台<sup>ヒル</sup>から新たに情報がもたらされました

元々馬鹿神は部下へ書類仕事のほとんどを押し付けていたらしく、久しぶりにやつたらそれが起きたとのこと、そしてそれを完全に誤魔化しかつ自分への恨みを消すためにさまざまな工作をこの世界とこの世界につながる未来にしていたことが判明しました

一つは既に判明しているように『殺してしまった奴を北郷一刀として送る』でしたがそれ以外に結構出てきたのです

出てきたものをまとめると以下のようになりますね

・その恋姫の世界の女性陣は成長すると胸にふくらみがつく（それがそんな性癖だつたため）

- ・BB戦士三国伝の伝説の武器『龍帝剣』りゅうていけん や『虎錠刀』こじゆとう が存在する
- ・気が『ドラゴンボール』や『ダイの大冒険』の使い方である
- ・『NARUTO』におけるチャクラは内氣・自然エネルギーは外氣・これを五分五分にして体内で精錬することで仙人モードになれる
- ・奴も斬魄刀を持っている、名は不明
- ・虚化は不可能（これは俺にもありがたかった）

といったことだ

ちなみにこの情報整理の結果、俺の修行の量が大量になつたのは言つまでもない

## 第一話 今まだ「れかり」（後編）

作…こんなものかな

龍…短くないか？

鳳…いや、十分だと想つ…これ以上だとまた成長後になるから

作…そ、次回はさりに飛びます飛びます

龍・鳳・微妙なネタばれしてんじゃねえ…！

## 第一話 成長と出会い（前書き）

作：今回で幼少期編は終了です

龍：それでこの後は？

鳳：俺としては何人かともう面識と微妙で良いからフラグ立てておきたいな

龍：それが目的だもんな

作：まあ最低一人で良いんだけどな…今回原作キャラが出て来るんだがすごく意外な人物だ

龍：まあ俺のときも主人公出てこなかつたし…

鳳：蜀と言っているのにまさかの展開ですか？

作：あ、付け加えるが蜀とは言っているがほとんどオリジナル展開になるから

龍・鳳：撤回しろ、今すぐに…！

作：というわけで本編始まります…！

龍・鳳：無視すんな…！！

## 第一話 成長と出会いこと

はい、無妙息災改めまして一話前で決めた名前を名乗ることになりました

姓を『珀』、名を『武』、字を『麒麟』、真名を『龍鳳』です

姓は白虎様から、名は玄武様から、字は麒麟様から、真名は青竜様と朱雀様からとったと言いましたら、愛い奴、といわれていろいろ貰いました…が、よくよく考えてみると黄巾党だろうが董卓軍だらうがんだらうが一人で完全粉碎できそり…畠布も怖くない…！

ちなみに貰つたのは

青竜様 龍帝剣、真赤龍翔神刀、真青龍烈斬刀（この2本は併せる  
とさりに強力なものになるといわれた）

白虎様 虎錠刀一振り

朱雀様 炎骨刃、七星剣、天凰星凰剣、天凰威天剣

玄武様 破塵戟、方天武戟、靈龜甲盾

麒麟様 宝扇剣、戦馬・赤兔馬、漢全土の詳細な地図

これらを頂いたときの白虎様に向けた全員の視線がすさまじかつた、それでものすごく居心地悪そうにしていたとだけ言つておく

俺はまったく持つて不満がないんだけどね

「お前さんはこれでとりあえず修行は終わった」

「しかしそまだ慣れていないものがある」

「本当の戦闘だろ」

「よく分かっているじゃないですか」

「それで台下から情報が入っている」

「はい、泰山からかなり離れてますがそこに大勢の賊がいまして、その近くの畠を狙っているそうです」

「それの討伐か…人の死殺すことには慣れていないからいい結果が出せるとは思わないがな」

「むしろなれいで欲しいわん」

「慣れてただ殺すだけになつたらそれは人ではなくなる」とと同義  
じゃからな」

「その通りです」

「それじゃ行つて来い」

「近くまでは私が送つてあげます」

そうして俺は台下に送られてその賊の根城の近くに来た。ここで台下とは別れ俺は一人でそこに向かう。前に外気を取り込んで仙人モードを発動させて人数どこにいるのかを確認する

「ちつ… 賊どもまだやりやう今から西に行へよつだな… 赤兎馬、行け  
るか?」

俺が尋ねると当然だとばかりに頷く赤兎… ちなみにこの赤兎は三  
国伝に出でてきたのだから、この機械がほとんどないこの世界では本  
当に珍しいというか… 存在していることすらおかしいかもしれない  
… そして騎乗部分は触ると鉄ではなく外は革、中は綿となっていて  
とても座り心地はよさそうだった

が、こんなことを考えている場合ではない… なにせ俺達の到着が  
遅れて賊に襲われたなんて落ちになつたら師匠達からどんな御仕置  
が下されるか分かつたものではない

という感じで俺は赤兎をバイク形態にして猛スピードで走らせる  
殆ど赤兎に任せればいいため俺は仙人モードを維持しておく… こ  
れで賊徒どもの前に出ることが容易になる… さらに簡単にで良いか  
ら攻撃が即座に出来るような状態にする

そうして俺は何とか賊が邑に入る前に賊と接触することが出来た…

「てめえ… 何モンだ?」

「ただのガキなのによじようとしてんだ?」

「俺達をてめえ一人でとめるつもりか?」

「その通りだ」

「はつ……そんなりでかよ……無謀つて言葉、知つてるか？僕？」

今の俺の格好は『BLEACH』の檜佐木修平の姿に黒鉄製の手甲・足甲を両方とも肘・膝当りまでつけて（足の方は服の下に隠れている）、腰には斬魄刀を一本（内側が斬月で外側が捩花）さして

「お前達を倒す前に聞きたい…なぜ！」  
と叫ぶ。

『はあつ！？』

「税が高いからか？それならなぜまず最初にそこに税を納めるところに直訴しない？なぜ最初からあきらめる？悪錢身付かず、そんなことで得たとしても必ず失うぞ」

「馬鹿じやなねえの？んなもん決まつてんだろ？がーー。」

「俺達は自分達の欲望がみたせればそれでいいんだよー！」

「飯は奪う！－女は抱く！－当たり前の事だろうが！－」

『アーチー・ヒルズ』

「（やはり）こう類はこんな考えを持つたものばかりか…）そう  
かなら…死ねつ…！」

そういうと共に俺は捩花を引き抜いて赤兎を駆り、賊の間を駆け抜けしていく…その間に何度も首を狙つて刀を振り、絶命させていく

そのときの感触ははつきりと俺の腕に伝わってくる…気持ち悪い

「とにかく上ない…

それに賊は走り出すなんて思つてなかつたらしく、何人かはひき殺しただろう…俺は赤兎から降りてそのまま賊に向かつていき、剣術を氣術を併用して次々と命を奪つて行く…

頭を拳で砕き、刀で咽を、腹を、顔を割き、足で潰していく…

十分か、二十分か…時間の感覚すら分からなかつたが気が付いたら賊を殲滅していた…

それを見た俺は…吐いた…ものすごく気持ち悪くなり、感触を思い出し、吐き続け、少し落ち着き始めたところで赤兎が頬をなめてくれた…

それで少し落ち着いた俺は近くに賊の根城があることを思い出し、そこを急襲した…そこには殆ど人がいなかつたため先ほどより楽で、死臭に多少慣れただといえやはりきつかった…そして少しそこを探索したらやはりというか女性の姿も合つた…が、見るも無残な姿だつた…

体に精液が付いていないところは無く、目は虚ろで生きているのか死んでいないかも分からなかつたが…先ほどの賊の言葉からそこに入り呼吸しているか耳を傾けると…思つたとおり息をしていなかつた…だがここで見つけたのも何かの縁、埋葬されないよりは良いだろうと思い賊徒の骸を氣で完全に燃焼して消し去り、女性の体は極力きれいな布で包んで根城で賊が使っていただろう寝具（？）みたいなもののに積んで赤兎と一緒に運ぶことにした

その付近に川が流れていることを思い出し、そこで俺は返り血を、

彼女達の体の汚れを落としてその近くの畠に向かった

どうやらそこは先ほどの賊に以前襲われ、さらこの近くの権力者が無能かつ自身快楽至上主義者なかいまだに復興がままならない状態でもあつたようだ…そしてそこで俺は近くの大人に何かを頼み込んでいる少女を見つけ、近づいて話を聞くことにした

「お願いします…お母さんを助けるために手を貸してください…！」

「何でだよ…死に行くようなもんじゃねえか…！」

「ちゃんと策がありますから、お願いします…！」

見たところ少女は六歳前後、彼女の両親はよき人であつたのだろう…俺はその人達に近づいた

「どうしたんですか？」

「あなたは？」

「ん、ああ、この近くで賊が出てこると聞いてね、師匠に言われて討伐してきたといひだ」

「お前みたいな子」「その根城にも行つたんですか…？」

俺がそう言い、大人が否定しようとした直後、少女がものすごく食いついてきた…先ほどのことからどうやら彼女の母親は奴らに攫われ、そこから取り返すのを手伝つてもりあつとしていたといつとか

「坊主、その賊つてのはこの近くの洞窟を根城にしている連中か？」

「ええ、先ほど底に残っていた連中も全員始末しました…ただ首なんか持ち歩く趣味は無いので全部消しましてしましたけど」

「根城に行つたのなら、私に良く似た大人の人を見ませんでしたか！」？

「…………」

「ま、まさか……」

俺の沈黙に最悪の状況を想定したであろう少女は少しづつ後退して行く…大人の方もなんとなく察したようだ…

俺が赤兎に引つぱてる物の所に行くと少女も付いてくる…女性の人数は五人、その人たちの顔を一人一人ゆっくりと見せて行き…最後の一人を見せると…

「お…おか、あ、さん…」

少女の目からは涙が零れ落ち、その子の頬をぬらす…それ俺も大人も何も言つことは出来ない…特に俺はだ…もう少し討伐に出るのが早かつたら、根城のどこに一気に行ついたら、そんな思いが胸中を渦巻く…

「お母さん～～～～～あああああ～～～～」

少女の慟哭が小さな皿の入り口に響き渡る…

「Jのとき、俺は決意した…こんなことが…なくなる世界にすると  
…元々の目的とも多少は合致するとかそんなのは関係ない

俺自身の思いで、俺自身の力で、この大陸を平和へと導きた  
や、平和にしてみせようとした誓つた

何者でもない、ただ俺の 魂に！！！

## 第一話 成長と出会いこと（後書き）

龍：最後に出てきたのって誰だよ？

作・毒舌子

鳳：まさかの導入編で原ブレ！？

作・それとこの作品ですが、本文中ではローマ数字やカタカナは基本仕様しません

鳳：麒麟様のルビは？

作・ただのミスだ！！

龍・鳳・さつさと直せ！――！

作・そして原ブレとちつき鳳が言つたけど実際にあんまり変化はないよ

龍・そうなのか？

鳳：原作の性格のようになるのは変わんないんだね

作・そこは世界の修正力という名のじ都合主義さ（もつとも毒吐かれる男はこの世界では一人しかいないが）

鳳：んで、今後はどうなるんだ？

作・まず「」の後と数人との会合を経て黄巾の乱へと行く

龍・呂とか魏の面子が出てくるのか

鳳・いや案外オリジナルが大量に出てくるかもしかんぞ

作・そこはお楽しみに!――!

全・次回をお楽しみに!――!

## 第三話 別れと集う仲間達（前書き）

作・今回からオリキヤラが登場するんだぜい

鳳・フリーの武官文官いるからな

龍・魏・吳・蜀・その他陣営からか？

作・その分け方は『三国無双』だよ…一應最終所属とかから言つと  
魏から三人、吳から一人、蜀から一人つて感じかな

鳳・流石人材王国の魏…引き抜かれる数も多い

龍・史実や演技から恋姫の世界に選択されなかつた奴らから選ぶか  
…なんで姜維は孔明の後釜なのにはぶられたんだろう…嚴顔はいる  
のに

作・嚴顔と黃忠は蜀の老将コンビとして有名だからじゃない？

鳳・他にはぶられと言つと司馬懿に張?、徐庶、徐晃、凌統とかも  
いるな

龍・元々三国志全員を出そうと考へること事態が無謀だからな…曹  
家と劉家と孫家だけで150人超えるんだぜ

作・1世紀前後続く物語だからね～真面目に考えると頭痛くなるね

鳳・それだけ歴史の重みがあるということだ

龍・戦国時代も似たようなもんだけね

全・それでは本編をお楽しみくださいーー！

## 第三話 別れと集う仲間達

Side 龍鳳

前回から早六年、俺は今義勇軍を率いて各地を転戦している。

まず俺はある直後だが俺はある邑の人たちから感謝された

自分達を虎視眈々と狙っていた賊を殲滅した、それだけだったが感謝されるのは俺も嬉しかった。何せ人殺しで喜ばれたからだ……ああしなきやいけなかつたことだとも割り切つてはいるけどな

その後は母親を殺された女の子と一緒に洛陽まで旅をした。これは彼女の身寄りがもういなかつたこと、俺が母親を死んでしまつたとは言え助けてくれたことから一緒に行きたいといったからで、その邑の人たちも温かく送り出してくれた

そこで名前を聞いた時、顔には出なかつた（と思うが）俺は心底びっくりした。なにせ『王佐の才』と呼ばれる『荀文若』だったからだ……

そして俺は彼女の真名『桂花』けいふあを預かり、俺も真名を預け、俺は彼女から『兄上』と呼ばれるようになつた

その後旅の途中で賊に襲われている桃色の髪の子を助けたのだが、その子がなんと『劉備玄徳』と分かつたときももうびっくりしたね……

目的地が一緒だったこともあって仲良く進んで行き、洛陽に着いても目的が一緒だったこともあってその後真名を互いに交換、桂花

に続き『桃香』を預かつた

ちなみに目的は『盧植』と呼ばれる方のもとで勉学に励むことであり、俺は優秀だったのか一年半で『もはや教えることなし』とまで言われたが、他の子達に教えるのが楽しかったので結局三年ほど厄介になっていた：

無論それだけ長い時間一緒にいたので別れの際、桂花も桃香もすげく号泣された…が、俺がいざれ世が乱世になつたとき将として一旗あげるからそのときにまた会えると告げたら、「絶対に会いに行きます！！そして仲間にしてもらいます！！」と言われ、後ろにいた先生と公孫？（真名『白蓮』バイレンも交換している）には苦笑いされた

その後先生に紹介された荊州新野にある司馬徽 通称水鏡先生のところに赴いた…そこで後に有名になる諸葛亮孔明、鳳統士元、徐庶元直、司馬懿仲達とであった

歴史では司馬懿はここの中の出身ではないがこの世界ではこれが正常なのだろう…

ここでは半年ほどで学ぶことがなくなつてしまつたがやはり（次世代？とはいえ）稀代の軍師達との意見交換は面白かつたが、最初は俺が下だつたのに気がついたら逆転していたため、真名の交換もすることになり、孔明は『朱里』、士元は『離里』、元直は『明里』、仲達は『陽里』と呼ぶよくなつた

それから一年程してここを出て行くことを決定付けた理由は漢王朝に対する叛乱が徐々に大きくなつてきただ…桂花や先ほど名を上げた四人 彼女達も戦乱で親を亡くし、水鏡先生が面倒を見ていたとのこと のような子を一人でも多くなくす為に行くと

告げると全員が付いて行きたいと申し出ってきた

しかし水鏡先生から許可が出たのは明里と陽里のみだった。それもさうだとは思う、なにせ明里と陽里は年齢も俺に近いし、覚えていることも朱里と離里よりも多い、それに多少は武が出来るためだ。軍師とはいえど多少は自衛のための武が出来るのはいいと教えたが、幼いからだと誤魔化したが朱里も離里もあまり才能はなかつた（むしろ伯連並みにあつた明里と陽里に驚嘆したものだ）。が、気に関しては多少才能があつたため近年知られ始めていた氣を使つた術を教えることにした。なお明里と陽里はこれに関しては朱里と離里に劣つていたのを知り、ちょっと落ち込んでいたが、俺の説明を受けて納得してくれたようで安心した

とはいっても氣にも適正があり、朱里は『炎』と『土』、離里は『風』と『水』だった。ちなみに明里は『雷』、陽里は『炎』だった。また、適正があつても使いこなせなくては意味がないため、発動などを補助する道具として朱里には『扇』を、離里には『杖』を、明里には『剣』を、陽里には『手甲』をそれぞれ専用のものを作り上げた

ただし、命名したり渡したりするのを俺は水鏡先生に頼んだ、恥ずかしいからではなくその方がいいかもと思ったからだ、彼女達も俺からだと狂喜乱舞して俺からの忠告や使い方もろくすっぽ聞かない感じがしたからだ

無論、桂花や桃香にも得物は与えている。桂花には『風土氣札』といふものを、桃香には『龍帝劍』を…『風土氣札』は氣の適正である『風』と『土』の発動を補助する札で、どちらかと言えば防御用のだ、桂花は武の才能が全くなかつたからな。桃香の『龍帝劍』は言わずもがな、と言う奴だ

ただ彼女達には俺の手から渡している…でも俺から渡されたとき喜びすぎて使い方とかをちゃんと聞こうとしなかつたためO・H A・N A・S H Iをする羽目になつたのが今回のも関わっているのは察してくれ

### 閑話休題

そんなこんなで俺と明里と陽里はこの国を安寧にする為の旅に出た。明里と陽里の武器は出立する日に水鏡先生が手渡していた。明里のほうは『雷光』、陽里のほうは『炎破』と名づけられた

その後は近くの邑や村に町を賊から守り、その周辺で知名度を上げて兵を募りつつ、また知名度を上げていくという時間はかかるが堅実な方法をとつていった

中には一百人とかもあつたが明里・陽里の策に俺の武力で蹴散らして残党を兵達で潰す、という一人が強い軍にありがち（？）な方法をとつていった

おかげで今荊州内では州牧である劉表よりも人気があるためか、妨害も多くなつてしまつてしているのも否めないが…しかし評価を公平にしてくれる人も多く、名乗りの機会と思い参加していく武人も多い

その仲間を紹介しよう…

- ・一人目 姓を『張』、名を『?』、字を『雋乂』、真名を『やんやん優優』じゅうじゅう』  
と言い、武器は鉄鈎だ。
- ・一人目 姓を『徐』、名を『晃』、字を『公明』、真名を『じゅく清』きよ』  
と言い、武器は大斧だ。

- ・三人目 姓を『凌』、名を『統』、字を『公績』、真名を『双花そうか』  
と言い、武器は三節毬だ。
- ・四人目一姓を『姜』、名を『維』、字を『伯約』、真名を『彩燐さいりん』  
といい、武器は三尖槍だ。

お分かりだと思つが全員女性で彼女達は武官だ…ちなみに流石に文官は危険だから仕官してくることはない…どこか拠点が欲しいと思つてゐるのは俺だけではなく軍師一人も思つてゐる

そして俺は元々情報戦が主の現代から転生したため情報の精度と量を重視している…そのため自分達に忠誠を誓う隠密みたいなを探しているのだが…

「そんなの居る訳ないじゃないですか」

「だよな…」

「でも情報は大事ですよね」

「気がついたらこの叛乱が終わってたなんてこともありますからね」

「そうなるとこれままでやつてきたことが全部無駄…そんなの耐えられないよ～～

「わうだよね～主、どうぞ～」申し上げます～～「何?」

「例の中を纏つた一団を発見しました～～しかも今までと違つてかなり統率が取れます～～」

「もしかしたらこの集団の首領格もしへはそれに順ずる人の軍でし  
ゅね…かんじやいまひた」

「それなら今までより精巧な策を立てないといけませんね…わら  
ひもかんじやいまひた」

「どうします?」主

「彩燐、斥候を出せ。五人一組を五組だ。その後、戦闘準備だ。各  
員に武器と鎧の状態を点検させておけ」

「「「「「御意」」」」」

「それと明里、陽里、今回の連中を束ねている奴だが、恐らく連中  
と俺達の考えは似ている…適度に弱らせて捕まえてこの義勇軍に組  
み込みたい」

「わかりました」

「お任せ下さい」

さて、黄巾党が本格化してきたな…この国を平和にするために、  
頑張りますか!!

## 第三話 別れと集う仲間達（後書き）

作・まさかの台詞がたつたの15行

鳳・俺もたつた三回しかないし

龍・でも殆どお前の心象だつたじゃないか

作・長々と書くと飽きられるかなと簡潔にまとめましたよな

鳳・彼女達サイドでいつか書けよ

龍・つか書かなかつたら吹き飛ばすからな

作・あ、ちゃんと書くよ……番外編やるのも決めてるし

鳳・まずは桂花と桃香だよな？

龍・後今回出てきたオリジナルキャラの徐庶、司馬懿、徐晃、凌統、張?、姜維の紹介もちゃんと作れよ

作・分かつて、まずこの戦いの続きを書いて、その後紹介、んで番外編行つて原作突入かな

鳳・原作まで後4話か…

龍・そういうばどひやつて入ったのもあるのか？

作・それは紹介のところで、イメージは他のアニメとかから持つて

くる

鳳・キャラクター創造能力皆無だもんな

龍・俺の作り方も半分モンタージュだし

作・つるせー

鳳・そういうえば孫策とかはいつ出てくんの?

龍・曹操もな...

作・黄巾から反董卓の間にいろいろ動きがあるから、そのときにでも出てくる期待してくれ

龍・鳳・いやでも駄作者だからなあ.....

作・言いたいほつだな...泣くぞてめえら

## 第四話 結成！－珀武義勇軍－！（前書き）

作・今回戦闘描<sup>跡</sup>つまく書けてるかな？

鳳・それは最後まで読んでもらわないと分からんだろう

龍・頭の中ではつまく浮かんでも描<sup>跡</sup>することができないとか

作・龍、当つ……いわゆる説明しながら動作することは出来ないんだ

鳳・どういふことだ？

龍・右見るのと同時に左見るって事だ

作・両手で別々のもの書くとかできないからな

鳳・龍・えつ！？出来ないのか！？

作・お前らみたいな空想の存在と一緒にすんな！－！

鳳・龍・一番言つちやいけねえ！？と叫ひな、駄作者！－！

## 第四話 結成！－珀武義勇軍－！

Side 龍鳳

「全員、集まつたな…陽里、明里、状況は？」

「今黄巾軍は六里（一里=五四五、なのドリニミ）離れた位置に魚輪の陣で展開しています」

「状候が向ひの状候を確認したとも報告がありましたので戦端が開かれるのも時間の問題かと」

「一気に突っ込んで殲滅しちゃえば？」うちの方が数が多いんだし

「やうですね、苦しんでいる民を守り、勇気付けるための私達義勇軍です。あんなのに手間取つたと知られたら今までにつかんだ民の心は離れてしまつます」

「ちょっと、相手は今までのと違つて統率が取れてるのよ、簡単にはいかないわよ」

「やうですね、少数精銳の可能性もありますから、ここは慎重に行きませんと」

「でもそんなんちんたらじしてたら他のとこに逃げらわれるわよ」

「それはない、俺たちはこの周辺では有名だからな、逃げても追わると分かつてこむから恐らしくあそこには居るのだろつ」

「それで、策があるのでですが…」

「どんなのなんだ?」

「まず向こうに書状を送つて、話し合いたいと」

「「「「は」」」

「私達の推察だとあれば恐らく官軍崩れです、なのであそこまで統率が取れていいるのかと」

「なので向こうの大將にこちらがどんな理由で戦っているのかを説明します」

「なるほどな、それでその巾をしているほかの連中は賊だからそのままだと討伐される、しかしこちらにつけばかつての官位以上のものがもらえる可能性がある、そういう間に引き込める可能性はあるな」

「でもそれが失敗したらどうすんだよ…！龍鳳様が危険じゃないか…！」

「「「「いや、それはない（です）」」」

「なんでそんなことはつきり言えるんですか…？」

「「「「龍鳳様は一人で五万人は殺せるから」」」

「五万は無理だ」

「で、ですよ「一人だと出来ても三万位だな」…ゼンの天下無双ですか！」

「まあ官軍がそこを離れるのは何かしら理由があるから、そこを聞いてその場で説得する」

「「無計画にもほどがあります…」」

「無計画にもなるさ、軍と言つても補給隊か、諜報隊か、戦闘専門隊かとかでいろいろ変わるんだからな」

「では…」

「あいつらに文を送り、対話と言う手段をとる。その後の対応だが使者が怪我ないし死んで戻ってきた場合は即時殲滅、対話に応じてその場で切りかかってた場合も同様、対話に応じて決戦の場合は降伏するように動け、最高の場合は対話後降伏だな」

「ですが最後だと人心が離れませんか？」

「その場合は賊を改心させて受け入れる仁徳の軍という名が付く可能性もありますから…」

「まあ俺のことを知っている人たちからすればそう思つてもうえるだろうな…俺は文をしたためる、陽里、明里、双花、優優、清、彩燐、全員で相談して使者の選別を頼む、終わつたら呼ぶから」

「「「「「御意！」」」」

その後俺がしたためた文の内容は

『我々は貴官らと争う気はない。まず貴官らと話し合いたい。  
返答はこの文にしたためて使者に持たしてくれればよい』  
簡単に書くといつこう感じだ。

使者を出して四半刻（一刻＝一時間、つまり四半刻は三十分）も  
せずに返答が帰ってきた。その答えは『応じる』といつもの、俺は  
全軍を鶴翼に展開して、右翼に明里と優々、左翼に双花と陽里、中  
央は俺と清、彩燐にして一人を伴い両軍の中央まで来る

それに応じるように向いつの軍の大将と副将らしき人物がこち  
に近づいてくる。

俺は清と彩燐には武器を持たせているが俺自身は何も持っていない  
い、こちらから話し合いを持ちかけたのに武器持つてちや逆上して  
襲い掛かられる可能性が残つてゐるからな

「話し合ひに応じてもらえてありがたい、俺がこの義勇軍を率いて  
いる珀麒麟、後ろに居るのは姜維と徐晃といつ」

「俺がこの軍の大将の周倉、こつちは廖化だ」

俺は内心驚嘆していた、なにせ周倉も廖化も関羽の部下で忠誠心  
の高い勇将だつたからだ、だが同時に歓喜していた。この二人は戦  
力になることも相対していいる軍を見れば一目瞭然だしな

「俺達に何か聞きたいことでもあるのか？」

「ああ、どうしてそんなのをかぶつてるんだ？」

「これは天和ちゃん、知和ちゃん、人和ちゃんの追っかけである証

れ」

「誰だ？すまないが荊州の外の情報があまり耳に入つてなくてね、出来れば教えて欲しい」

「彼女達は本名を張角、張梁、張宝といつてな、知る人が少なくなつてきている旅芸人なんだ」

その情報を聞いた瞬間俺はここ最近の動きを理解した、恐らく彼女達の追っかけに彼女達が「大陸が欲しい」などといったんだろう、それを過大、もしくは都合よく理解した連中が暴走を始めた、と言ふところか

「お前達がいろいろなところを襲つているのは彼女達の願いだからか？」

俺は会えて核心に触れる、もしくは怒らせることを聞いて反応を見てみると

「そうだ、彼女達が『大陸が欲しい』って言つたからな…だが、俺たちは別だ」

「そうか、他の連中と同じように扱われるから、そういうのから自分の身を守るために、つまり自衛のために軍としての形になつていると語りつことか」

「ああ、てかあんたすげえな」

「陣とかを見れば分かる、それに斥候を出していることもわかつてた、だから俺は話し合いと言う甘い手段をとつたのさ」

「俺達にあんたの軍に加われってのか？」

「ああ、無論、それにあたつて追っかけを止めるとは言ひはしない  
ぞ」

「「...?」

「彼女達もこんな事態になるなんて思つても見なかつただろう、し  
かしもはや彼女達の力では、内側から止めることは出来なくなつて  
いる。ならば外側から武力を持つて暴走している奴を討つて止める  
しかもはや手段はない」

「「.....」

「お前達は違うだらうが他の連中は次々と村や町を襲う賊徒になつ  
てゐる。人間は一部がそうであれば全体がそうだと思つてしまふ。  
そしてその流れもはや止める出来ない、流れ始めた川は海  
に流れ着くまでとまることはない」

「「.....」

「俺はそれを止めたい、そのためには力が必要だ、そしてお前達は  
その力を持っている、頼む、彼らを、そしてお前達が追っかけてい  
る彼女達を救うために力を貸して欲しい」

そう言つて俺は周倉、廖化に頭を下げる、これが俺の見せられる  
精一杯の誠意だ

「俺達は降伏しても追っかけていいのか？」

「かまわない、ただ黄巾を着けるのは彼女達が歌つてゐる場にどぞめることと、いすれ彼女達を討てといふ勅命がきたとき、俺達が彼女達を保護するのに協力して貰う」と、それぐら<sup>それ</sup>いさ

「…わかった」

「大将！？」

「俺たちも官軍や町とかから嫌われて困つていたところだ、だつたらあんたらに協力したほうがよさそうだ」

「その判断をしてくれて感謝する。それと、あまり直接戦闘能力が全員低そうだが…」

「ああ、あいつらは官軍でも捨て駒として使われた連中なんだ」

「「「！」？」」

「たしか命がけで情報を持つてきたのに罵倒されたり、でこいつなつて連中だつたな…」

「こちらとしては渡りに船な話だ、実はそういうのが欲しいと常々思つていたところなんだ」

「やうなのかい？」

「ああ、詳しい話をしよう、彩燐、清、両翼に連絡して彼らを受け入れ準備、その後全員集合するよ！」

「「御意……」

「では行こうか、周倉、廖化」

「「ああ」」

その後は全員集合して周倉、廖化の今後を本人たちを交えて協議した結果、俺達の軍の隠密として使うことが決まった

彼らの役割は漢全土の情報収集だ。どこがどうなっているのか、というのを集めてきてもらう。俺たちは彼らが集めた情報から今後の方針などが決まる、さらにどんなに些細な情報でも構わないし、裏切らないと言つことを告げると降伏した彼ら全員が俺に臣下の礼をとつた

その後、彼らの活躍により黃巾党本隊、つまり張角たちの居場所が分かるのだが……そこまでたどり着くのは少し、先の話である

## 第四話 結成！！珀武義勇軍！！（後書き）

作：あるえ？

鳳：戦闘どころか話しえただけで終わってんじゃねえか！！

龍：まあ演技でもこりだつたし、別にいいんじゃない？

作：今後彼らはちょいちょい登場します、というか半分キーキャラになるかも

鳳：確かに出番はあるな、本隊殲滅の時とか後は…反董卓のときも活躍できるな

龍：その後も敵の力をそぐのこつかえるし、敵国がどういう状況か聞くのにも使えるな

作：ちなみに暗殺系では使いません、彼らの誇りを汚したくないので

鳳：次回はオリジナルキャラを全員紹介

龍：作者の頭せいで一部そのままだが気にしないでくれ

## オリジナルキャラクター設定

姓名：徐庶  
字：元直  
真名：明里<sup>めいり</sup>

イメージとしては『魔法少女リリカルなのはViVid』時のキャラ。CVは原作と同じ。

衣装も色合いが白・ピンクの部分が藍色に、黒の部分が白になっている。

立場は軍事向き軍師で戦場での作戦・指示が主な役目。性格は朱里・雛里の中間ぐらいだが、緊張すると噛んだり、「わわ」と言つたりする等の共通点がある。

得物は『雷光』と言う剣。これは龍鳳がつくり、水鏡先生が名前を与えたもの。この時代に一般的な直刀の両刃剣。刃の根元に虎を模した模様があり、その中に黄色い宝玉がある。これが明里の得意資質である『雷』の気変換を補助する。

朱里が『臥龍』、雛里が『鳳雛』と呼ばれたように『虎子』と呼ばれた。

姓名：司馬懿

字：仲達  
真名：陽里<sup>ようり</sup>

イメージとしては『魔法少女リリカルなのはViVid』時のルーテシア。CVは原作と同じ。

衣装のイメージは朱里の服の色合い反転版。

立場は陣を張っている時の守備隊長(?)及び拠点防衛時の作戦立案及び指揮の軍師。

性格は冷静沈着だが想定外の事態になると明里達同様噛んだり、「

ふわわ」と言つたりする。

得物は『炎破』と言つ手甲。これも龍鳳がつくり、水鏡先生が名前を与えたもの。この時代には無い黒鉄製の手甲。手の甲の部分に亀を模した模様があり、その中心に赤い宝玉がある。これが陽里の得意資質である『炎』の気変換を補助する。

朱里が『臥龍』、雛里が『鳳雛』と呼ばれたように『未武』と呼ばれた。

姓名：姜維

字：伯約

真名：彩燐さいりん

イメージは無双6の衣装のまま女体化で、性格とかも変わりなし。  
変更点はCVのみ。

得物は『昂龍顎門アカリュウガクセイ』。無双4のユニーク武器のままである。槍の名手・天水出身と言つことから珀武義勇軍の騎馬隊を率いている。

姓名：張？

字：雠乂やんやん

真名：優優やんやん

イメージは姜維と同様。

得物は『龍鱗絶骸爪りゆうりんせつがいそう』。こちらは無双6の武器です。

兵の統率がうまいので歩兵隊を率いることが多い。

姓名：徐晃

字：公明

真名：清しそう

イメージは姜維・張？と同様。

得物は『獸王牙斷』。こちらは無双6のDLC武器です。

常に冷静に戦況を見るので他の3人の後詰になることが多い。

姓名：凌統

字：公績

真名：双花そうばな

イメージは姜維・張？・徐晃と同様。

得物は『三節昆』。これは無双5の武器です。（武器名なかった  
o'rez）

徐晃と張？の中間ぐらいに位置するので槍隊、盾隊を指揮するこ  
とが多い。

姓名：周倉

字：なし

真名：陰いん

イメージは『NARUTO』のはたけカカシ（写輪眼移植前）。

CVも同様

得物は『短刀』。銘はないがいくら切っても刃こぼれがないらし  
く、かなりの業物。近づかなければ相手に致命傷を与えないもので  
かなりの使い手であることが分かる。

珀武義勇軍の諜報隊の隊長。張角達の追っかけを止めなくともよ  
く救つてもらえると言う事、正確な情報を集めて渡せば報酬がもら  
える、裏切りがないと言うことから軍門に下った。

彼らの隊は全員元官軍の諜報隊だつたためその能力は他のとこと  
比較すると遙かに高い

姓名：廖化

字：元儕

真名：影かげ

イメージは周倉同様『NARUTO』のうちはイタチ。CVも同様  
得物は『鋼糸』。慣れていない者が使うと逆に自らの身を痛めつ  
ける上級武器。なのでかなりの達人と言つことが分かる。

姓名：裴元紹はいげんじょう

字：なし

真名：竊そく

イメージは『BLEACH』の市丸ギン。CVも同様だが、口調  
は標準語

得物は『暗器』。クナイや棒手裏剣などを使う。急所に当たれば  
一撃相手を殺せるが扱いが難しいので熟練者向け。

総じて彼らは武器の扱いが得手。相手を一撃で仕留める手に長け  
ている。実力としては夏侯惇や関羽に勝るとも劣らない

## オリジナルキャラクター設定（後書き）

質問や感想待ってます！－！

## 幕間一 桂花の物語（前書き）

作・幕間、まずは桂花から

鳳・「」では戦闘ちゃんとあるよなー？

龍・どうだうな…

作・粉碎！玉碎！…大喝采！…なんて落ちはどうだ？

鳳・龍・ダメに決まつてんだろー！

## 幕間一 桂花の物語

Side 桂花

私は兄上 珀武麒麟、真名を龍鳳 の役に立てるような立派な軍師になるために日々勉強中です

まずはこうなった経緯から言いますね

兄上と初めて会つたのは私の出身の邑が賊に襲われて2週間もしました位でした…私はお母さんを賊に攫われてしまい、何とか助けてもらおうと知つた限りのことから策をひねりだして、大人の人たちに協力してもらおうと思いましたが取り付く島もありませんでした…

それでまた襲つてくると言つことが伝わつてきましたが一向に賊は来ませんでした…

その代わりに現れたのが兄上でした

兄上は機械からくのような馬に乗り、何かを引かせていました

賊は兄上がやつつけたこと、そしてその根城に居た人達も倒してそこに囚われてた人たちの事を聞きたくてこの邑にきたと言つことが分かりました、そして…

私の大好きなお母さんがもう帰らぬ人になつていてると言つことも

最初は兄上の事を物凄く憎く思いました…なぜお母さんをもつと

早く助けに来てくれなかつたのか、どうして一番最初に襲われる前に来てくれなかつたのか、どうして、どうして、どうして…

兄上も私がそう思つてゐるのを悟つたのか私に話しかけてくることはありませんでした。邑の長や大人の方達と話し合つて病を蔓延させないために殺された人達を燃やして骨だけにして埋葬することを提案し、長達もそれに賛同してました

なので遺体は一箇所に集められ、兄上が気による炎を作り出してこの時「火遁・豪火球の術!!」と叫んでた。兄上が連れてきてくれた人達、私のお母さん含めて皆燃やされました

皆厳肅とした空氣の中、突然兄上が歌いだしました…

その歌はとても悲しく、切なく…しかし死んでしまつた人達を慈しみ、次世での生がちゃんと謳歌できるようにも言つてゐる様な歌でした

後々それは『梁父吟』<sup>りょうふぎん</sup>、鎮魂歌だと言つことを教えてもらつた

その後兄上は邑の復興を精力的に手伝つてくれました。私よりも少しあ大きくないのに、大人以上の知識を持つていて、大人以上の力を持つてゐるのに、それを誇つたり、自慢したりしない…

それを見ていて私が兄上を恨む気持ちはどんどん薄れていつた。寧ろ恨んでいた自分を恥ずかしく思つた。特にあの日の事は忘れられない…

ある日の夜、私は寝付けなくて危険だと思ったが外をちょっと歩いてみるとしたら、兄上がどこかにむかつてゐるのを見た。何

しに行くのか興味を持った私はこつそり後をつけていった

兄上が向かつた場所は墓地、そこで見たのはこの間の賊で亡くなつた人達全員に花と杯を手向けて、一人一人に聞こえていりないに関わらず 謝罪の言葉を、涙と共にかけていた

それを見て私は分かつた、本当に悲しんでいるのは兄上なのだと、一番気に病んでいるのは兄上なのだと黙つことを……

それから私は積極的に兄上に話しかけるようになった。最初は驚かれたがすぐに打ち解けて、いろいろなことを話し合つて、そこから私は兄上と呼び始めた

そして一ヶ月位、ついに兄上が旅立つ時が来た…皆すゞく悲しそうな顔をしていた…だつて私達を救つていろいろ教えてくれたのだから…

すると長が私に何か差し出してきた…それは旅立ちの荷物…

実は兄上が私の境遇を聞き、こつそり長に頼んで連れて行きたいといつていたらしい…

もう私には身寄りがなく、また考へが大人びていたからちょっと孤立しがちだつたからすぐに行くことを決めた…でも邑の皆の顔、すこしにやにやしてたな…私、そんなに嬉しそうな顔をしてたかな?

それで兄上に連れられて私は洛陽へと向かつた。途中で賊に襲われかけた女人の人を兄上が腰に下げる刀で全員倒した後、自己紹介をしあい そこで劉備玄徳と知り、助けてもらつたお礼に真名を預かつたので以後『桃香』と呼ぶ、目的地が一緒だつたので共に向か

つた。

着くと兄上は私塾を探し始めた。なんでもそこは富廷に使える方が経営しているらしく、高度な学問が学べそつだからだそうだ…

私は何日もかかると思ったがその日のうちに見つかり、兄上が頼み込んで私達一人とも勉学を教えていただけることになった。そしてそこには来るまで一緒だった劉備もいたので割りとすぐにじめ、家とかもなかつたので下宿させてもらひ代わりに家事とかを手伝う事になつたけど…

そこでは文武両方教えてもらつた、ただ兄上は武のほうは実力が高かつたためすぐに終わり、もっぱら私達を盧植先生の変わりに鍛えてくださつた…私はあまり才能がないとはつきり言われてしまい、桃香はちょっと見所があつたのか良く面倒を見ていた

文のほうも兄上はたつた一年で先生に『教えることなし』とまで言われたが、何か納得がいかなかつたらしく、先生の変わりに私達に教えたりもしていた

それから半年ほどしたら兄上は先生に伴われて宮中に行くことになつた。何でも先生が兄上のことを言つたら皇子達の教師役に現皇帝、靈帝様から勅命で決まつたらしい

なので兄上と会える時間は減つたが兄上はちゃんと実力を伸ばすと褒めてくれるし、時々だが御褒美として一緒に町に出かけたりしてくれる。私も桃香もそれを知つてはいるから兄上がいないとはいえないよと頑張り、皆とも仲良くした

兄上はしばらく週に一~二回だつたがその回数はどんどん増えて

いや、一年ほどしたらほぼ毎日のように富中に言っていたほどだった

でも兄上自身はあんまりよく思つていなかつたらしく、この間は「十常侍本当に鬱陶しいな…俺を権力争いに巻き込みやがつて…何進の如郎も…俺を怒らせたことを後悔させてやる」とか言つてたから…あ、だから最近目に見えてあいつらの動き悪くなつてゐるのか、流石兄上です

それからさらに半年後、兄上は荊州新野の先生の知人である司馬徽先生の『水鏡女学院』に行くことになりました。

なんでも最近物騒になつてきたのと兄上のことを中心とした先生が司馬徽先生にしばらく預かつてもらえないか頼んだそうです

それが了承され、兄上が旅立つ前日、私は桃香と一緒に兄上に呼ばされました

「二人とも、すまないな、急に呼び出して」

「いえ」

「大丈夫です」

「そりが…早速だが本題に入る。実はお前達にこれを渡そうと思つてな」

そういうと兄上は金色の刃の部分に龍が彫つてある剣と、なにやら呪符をとりだしました

「この剣は桃香、君にだ。何度かお前との手合わせの時にこの剣を

使つたのは、覚えているな

「はい」「

「この剣はお前との時だけ、淡く光を放っていた。それから俺はこの剣はお前に使ってもらいたいと思っている、そう感じた。だから、この剣を、『龍帝剣』をお前に渡す」

そうして兄上が桃香に剣を渡すと、その剣は光って消えてしまった

「さ、消えちゃった……」

「だが恐らく、お前の元に渡つている。お前が『真の正義』に目覚めた時、あの剣は再びお前の前に現れるだろう……そしてお前に力を貸してくれるだろう」

「わかりました、ありがとうございます……！」

「次は桂花

「はい！……」

「武はあまりよくなかったが、氣の扱いがうまかった。だからこれを作つたんだ」

「これは……」

「気には種類があり人によつて適正が違うところのは教えたよな？」

「はい」「

「これは桂花の特性である『土』・『水』を使つ時に補助をしたり、  
氣を込めておけばすぐに発動できるものだ。攻撃用のも防御用のも  
あるし、何度も使えるから困らないはずだ」

「ありがとうございます」

「さて、俺は明日には洛陽を出立する。お前達も早く寝るんだ」

「そのこと聞いて私は悲しくなった……隣にいる桃香も同じような  
表情だわう……意を決したのも多分一緒に、なにせ

「じゃあ今日、一緒に寝てもいいですか！？」

同時に言ったことに私達は顔を見合させ、兄上は『仲がいいな  
と笑っていた

でもちゃんと一緒に寝てくださった。兄上は私達の頭をなでながら  
眠りに着かれ、私と桃香も兄上の体温を感じてぐっすりと眠った

その翌日、門のところには私と桃香と先生、それに公孫讚 真名  
を白蓮 さんが一緒に兄上の見送りに着ていた

「では先生、行きまーす」

「氣をつけるんだよ」

「兄上、おばんざいで」

「がら、だに、起き、づけでね」

「桃香、桂花泣くなよ……笑顔で見送りつつて言つてたじゃないか」

「「ひつでえ」「

「大丈夫、また必ず会えるわ……それまでに今よりもっと成長していくことを期待しているよ」

「「はい」「

「これから先、世は恐らく乱れる。その時俺は俺の正義と理想と勇気と魂を持つてそれを正そうと思つ。しかしそれは俺一人では無理だ、だから「絶対に会いに行きますーーそして仲間にしてもらいますーー」」 そうか、その時を楽しみにしているよ」

「「はいーー」「

「では先生、お世話になりました。桂花のことを頼みます」

「ええ

「じゃ、先生、みんな、またなーー」

そう言つて兄上は去り、その後私は勉学を桃香達と重ねて今は袁紹という人に仕えて兄上の言つていた國の力の源である民達を救うための策を何度もしているのだが

「派手じゃない、却下よ」

「どう感じですか……兄上ーーー早く名を上げてくださいーーー

## 幕間一 桂花の物語（後書き）

作・これは前話と大体同時期ですね

鳳・しかし劉備の出番なくなるんじゃないか？

龍・劉備は他の小説だとアンチされることが多いからな、その対策シーンが多くなるんだろうな

作・うん、甘ちゃんからだいぶ変わるよ、桂花のまつももひつひつと書きたかったけど時期の関係上つけようと省いた

鳳・男嫌いは？

龍・ここでなつそつだな

作・まあ幕間後の本編をお楽しみにって事で

## 幕間一 桃香の話（前書き）

作：俺頑張った！！

鳳：昨日は設定、今日は幕間一本か

龍：俺のほうも更新してくれええええ！！！

作：最近機嫌悪いのかPCがデータの入ったHDD読み込んでくれないんだ

鳳  
・うわ

龍：（隅りいの透かしの字を書いていじけている）

作・まあ何とか頑張るから、本編のほうもひらしへーー！

## 幕間一 桃香の話

S.i.d.e 桃香

私は姓を劉、名を備、字を玄徳、真名を桃香って言います  
ちょっと今まで洛陽に行つてたんですけど、その時の事をお話し  
ますね

到着前からひどい目にあつたんですね、賊に襲われちゃつて…  
必死に逃げたんだけど捕まっちゃうのも時間の問題になつた時、  
機械のよだな馬に乗つた一人の男の子が馬から下りて私を追つかけ  
てた賊を倒してくれたんです

その時に『雷遁・千鳥!!』とか『風遁・大玉螺旋丸!!』とか  
聞こえましたら賊が一気に吹っ飛んじゃつたりしてましたね…

助けてもらつたお礼を言つと野の子は「当然の事」と言つました…

どうこうとか聞くと「困つてゐる人を助けるのに理由は要らない」だそうで…す」驚きました。だつて最近では助けてもらつて  
恩赦と称して大量のお金を貰つていく人が多いですから

そしてさつきの馬が近くに来るとその馬から小さい女の子が「兄  
上、『ご無事ですか』と語つて男の子と私の近くまでやつてきました

そこで自己紹介を済ませて私が洛陽に行こうとするとき武さんと  
荀?ちゃんも同じ方向に足を向けました…実は同じところを田舎して

いたとわかつて私達は洛陽まで一緒に旅をしました。そこでも何度か助けてもらつたので、いい人達と分かつたから私の真名を預けると、不公平だから、と龍鳳と桂花という真名を預けてくれました

やっぱりいい人達だと思いました

着いたら別れて私はお母さんから言われた私塾に紹介状を持つて行きまして、そこで下宿させてもらいながら勉強させてもらつことになりました

そしてその日のうちにまた新しく門下生が出来たと盧植先生が連れてきたのは龍鳳さんと桂花ちゃんでした。ここまで目的が一緒だつたと知ると何か運命的なものを感じちゃいますね

龍鳳さんはすぐ物分りが良くて先生が教えてくれたことはそのままのうちに理解して自分のものにしちゃつてます…私は半分も理解できませんでしたから、すぐ羨ましかったです

どうして出来るのか聞いたまでは一度自分で本を読んで分からぬところを纏める 予習ということを教えてもらい、先生が教えてくれたことを忘れないように竹巻や本 자체に書き込む 復習という物を教えてもらつたら、どんどん理解できるようになりました

それから半年ぐらいしたある日、急にこんなことを聞かれたんですね

「桃香、この先もし乱世になつたら、君はどうしたい？」

「へ？」

「もしもの話だ。俺と会つた時のように賊が多くなつて、世が乱れ

たら君は笑ひしたい?」

「…人が笑えなくなるのはいやだから、皆が笑える世界を作りたい…」

「やうか…甘いな」

「何で…? 龍鳳さんだつてこやドショー!」

「確かにこやだが…笑うものがいれば泣くものがいると嘘つゝことだ」

「どうこいつ」とへ.

「嘘つて嘘つのは賊も含めてこゆんだろ?」

「当然だよ!…あの人達だつて生きてるんだもん!…」

「だがあいつらが笑えば他のたくさんの人々が泣くぞ、村や町に住むたくさんの人々が」

「…」

「嘘笑い会える世界は確かにいいや、すりへり理想や…でも、現実はそう簡単にはいかない」

「……」

「賊が笑えば弱い民が泣き、弱い民を笑わせれば賊が泣く、『嘘』つてのは無理だろ」

「……でもその人達は自分の欲望で動いてるんでしょう？」

「そういう奴が多いが中には太守とかがめちゃめちゃ税を搾り取るからその日々を暮らすためやむを得ず賊として暮らしている奴もいる、そいつらからすれば悪人は誰だらうな？」

「……正義って…」

「正義か……俺からすればそんなものはないな」

「…！」

「法が正義と言つ奴もいるが今その法のせいで苦しんでいる人が多い…お前にとつての正義は…なんだ？」

「……そんなの、分かんないよ…」

「今すぐ見つけるとは言わんさ…それにひとつお前の考えを聞いたかつただけだから…」

「私の考え方って間違つてますか？」

「間違つちやいないわ、ただ今の世の中、話し合いで済まずに戦いになることもある、あつたときのようにな。時としては力を振るう必要間ある、これを覚えておいてくれ」

それでこのときのお話は終わつたけど、お説教とかそういうのじやなくてまるで諭すようなものだつたな…もしかして私に何か望んでるのかな…なんて思つたりしました

ちなみに数年後、この考へだ当つていたのだが桃香は覚えてません、天然ですからり ソ作者

何か変な感じしたけど、とにかくそれからは盧植先生に学問を、龍鳳さんに武術を教わつていきながら、あの日龍鳳さんに言われたことについていろいろ考へて、時々先生や桂花ちゃん、同郷でここへの紹介状をくれた伯珪ちゃんに聞いたりした

それから一年ぐらいしたら、盧植先生に軍を率いて賊を討伐せよつて命令が来て、先生は龍鳳さんを連れて行こうとしたが龍鳳さんは私や桂花ちゃん、伯珪ちゃんも連れて行つた

そこで見たのは『本当の戦場』だった

先生や龍鳳さん指揮する兵士たちが賊を攻撃していく…賊のほうもやられてぱっかりじゃなく、反撃してきてこいつらの兵士さんの命を奪つていく…

物凄い気持ち悪いにおいがして私も伯珪ちゃんも桂花ちゃんも胃の中のものを吐き出す

その間に龍鳳さんは周りの兵士に私達を守るよう指示したのか私達の周囲には兵士さんしかいない、龍鳳さんは戦場のほうに馬を駆つて突つ込んでいく…

終わったその日のうちに洛陽に帰らず、近くの場所で野営する」とになり、私たち三人は一緒の天幕にいた

「今日の…どう思つた?」

「どうして？」

「どうしてあたし達をこんなところにあいつは連れてきたんだうな？」「

「私は軍師を自居してる、だから戦場と言つのはこいつのだつて多分教えておきたかったからだと思つわ。あんたは親の後ついで太守になるだらうからそれで戦場にいる、その時じや遅いだらうと思つてたぶん兄上は参加させたのよ」

「そういわれるとあたしや文若が呼ばれたのは分かるよ、でも桃香はどうしてなんだい？」

「どうしてですか？」

「ここの家の篭賣りだから…まあ姓聞けば分かるように恐らく漢王朝に連なる一族何だらうな、でもこんなところにたつ必要があるのかい？」

「それは「あるが」兄上…」

「麒麟、どうしてつもりだ？」

「桃香には前に聞いたが、お前達はもし乱世になつたらどうするつもりだ？」

「そんなの、その原因になつていい奴を倒すに決まつてゐじゃないか

「ではその後、太守とかになつていた場合、その賊を理由に他候か

ら攻められた場合は?」

「迎撃するに決まつてゐる……」

「桂花は?」

「私も伯珪さんと同じ考え方です」

「桃香は?」

「…………」

「桃香?」

「桃香さんは優しいですから私達みたいな考え方は出来ないんですね、多分賊の時点で話し合つて解決しようとするはずです」

「だが賊は聞く耳持たず」に襲つてくるぞ、今回の戦闘で降伏すれば命だけは助けてやると言つたのに襲い掛かってきた。無論、ただの無駄な努力さ……。まともな訓練をしたことないやつらが訓練を受けた正規兵に勝てるわけがない」

「わづですね……」

「俺達のは戦前の行動は慈悲つて奴だ、優しさなんでものじやない戦いにおいて優しさは甘さと殆ど一緒で……相手を傷つけたくないと言つ志は立派だがそんなのじゃ戦いには勝てん」

「言つたいことわかるけども……でも」

「桃香さんは必ず相手は自分の言つひとを聞いてくれると信じてあります」

「……」

「やうだな、でも今回のわかつただろ、話し合いか通じない相手がいると言つひとと、やうこいつ輩は力で制圧、もしくは殲滅するしかないと」

「うん……」

「まあ今日は慣れないものの連発で疲れただろ、少し休め……皆な」

「「はーこ(おひ)」」「

「……はー」

その後も私は私なりにいろいろ考えた……力は確かに必要と言つことは分かったけど、やっぱり、それにずっと頼るのはダメだとしか思えなかつた……

私はそう決意して、龍鳳さんのところに向かつた

「桃香です、少しいいですか?」

「ああ、少し待つてくれ

その時龍鳳さんは何かしてたみたいだけど私には見られたくないのか、何かを片付ける音がした

「すまないな、入ってくれ

「お邪魔します」

龍鳳さんがお茶を入れてくれて、一息ついたところで

「こんな時間にどうしたんだ？」

「私は……ちょっと前に龍鳳さんに聞かれた時からずっと考えてました」

「……」

「それで、この間の戦を見て時には力が必要だと云ひことも知りました」

「それで？」

「私は…………力は相手によつては使い分けるべきものじゃないかと思いました」

「理由は？」

「賊のように……自分の欲望のままに暴れる人達には暴力のよつた力を、そうしなくては生きられない人達には制圧する力を、と云ひの風にです」

「まあ、悪くはない、だが「はい、私の理想との矛盾も理解しました」… そうか」

「私や龍鳳さんは民が、農民が田畠を耕して出来た食物や、職人さんが作つた服や竹管のおかげでこうして暮らせていて、そんな人たちの笑顔を守りたい、それが私の戦う理由です」

「他人を傷つけてもか？」

「その傷つけた人以上の人に笑顔にして見せます！！」

「ほう…そこまで言うか…桃香」

「はい」

「俺の思い描く世界も似たようなものだ…一度と理不尽な暴力に泣かされるものがいない世界、それが俺の望む世界さ」

「確かに、似てますね」

「最初の理想だと俺とお前ではいざと言つ時戦う意思があるかないかと言う明確な差があつたが、今はない」

「そうですね…」

「桃香」

「はい…」

「互いに、頑張ろつな」

「はい…」

「ああそれと」

「何ですか?」

「上に立つものが低い武では説得力が欠ける可能性もある、だから明日からもっと武術のほうはしげくからな、覚悟しておけよ」

「えええええつ……！」

「それと……いつまで聞き耳たてでんだ? 伯珪、桂花

「あつむやー、ばれてたのか」

「だから止めましょ! と直こましたのに……兄上、すいません

「伯珪、お前も桃花と同じくじいじいへから、覚悟しておけよ」

「あたしだけかよ!! 妹だからって巣廻すんなよ……」

「お前は謝らず反省の色も見せなかつたが、桂花は見せた。後桂花は妹じゃない、字で書くなら義妹だ」

「えええええ……！」

「兄上と私の顔は似てないじゃないですか」

「父親似と母親似かと思つたんだよ……」

「どうか夜ひづれごめん、他の奴に迷惑だつが」

「…………もしかして兄上と男女の関係になりたいんですか？」

「「なあつーーー。」」

その瞬間私と伯珪ちゃんの顔は真っ赤になつた。龍鳳さんも顔を真っ赤にしてこる

「あ～…やぶさかじやないナビ…もう数年後で良いか？流石に今すぐは……」

龍鳳さんはちよつと思考が変な方向にこいつちやつてしまつたね、でもすぐに直つて私も伯珪ちゃんも桂花ちゃんも自分の部屋に戻りました。最後に

「兄上は渡しませんよ」

といわれてまた顔を赤くしあやつたけどね

それからはずつと鍛えてもらつて、途中で途中にこいつちやつたけど、それでも鍛えるのはやめなかつた。伯珪ちゃんとはその最中に龍鳳さんと桂花ちゃんと一緒に真名を交換したよ

だつて私のことも意識してくれてるつことはわかつたから…好きな人の側に居たつて思つてるのは桂花ちゃんだけじゃないから…

龍鳳さんはそれからしばらくしていなくなつちやつたけど、私は自分を高めるのをやめなかつた、私の理想のために、龍鳳さんの側に居るために…

私も龍鳳さんが居なくなつて三年ほどしたら故郷に戻つてお母さ

んの仕事、筵売りを手伝いに戻ったけど、それでもちゃんと鍛錬は  
続けました

そして最近は賊が本当に多くなってきました…

作物が実らず、病もはやつてゐるのに役人達は自分の事ばかりで民  
たちのことを気にかけもしない…私はお母さんの仕事を手伝つてさ  
らに分かつことがある…それは…私も民の一員だということだ

守る人も、守られる人も、傷つける人も、傷つく人も皆同じ民…

だから私は守る人になりたい、今を生きる人を傷つけてでも…私  
の子供が、そんな思いをしなくて済むように…

それから最近、管轄つて言つ占い師さんの予言があちこちでうわ  
さになつてる

内容は『一筋の流星と共に一人の男が現れる。そのもの、大陸の  
争いを鎮める天の御遣いなり』っていうものなんだけど、ちょっと  
胡散臭いというか

正直に言つとそんなのに頼らず、自分たちの力だけでやるべきだ  
と私は思う

だってこの国は私たちの国なんだから…!

## 幕間二 桃香の話（後書き）

作：なんか長さが桂花よりも遙かに長い

鳳：てかこの作品中最長の長さじゃないか？

龍：ここで分かったのは龍鳳と桂花と桃香と白蓮は互いに思いあつているってところか

作：そして劉備はちよつと強かになりました

鳳：てか俺の考え方つて…

龍：この時代には珍しい感じだよな

作：二十一世紀とかの知識がありますからね、妊娠や出産の適年齢を知ってるからああいう態度だったんですね

龍：納得

鳳：この時代つてリアル14歳の母連発なんだよな

作：産めよ増やせよ、それにいつ死ぬか分からなかつたからね～

鳳：そうだな

龍：いつ死ぬかわかんないのはいつの時代も一緒だとは思つがな

作：それを言ひちゃダメだよ

鳳：次回から原作開始か

龍：…「つち展開速いから羨ましいな」

作：いや、マジすまん

## 第五話 大掛かりな戦と...あるえ？（前書き）

作…今回からまた章が変わります

鳳…黄巾討伐編か

龍…誰が出て来るんだ？

作…とりあえず董卓軍、曹操軍、孫策軍とは会わせてから、本隊討伐にいく

鳳…孫堅はやつぱり…

龍…案外な落ちにいくかもしないから静観しそうぜ

作…そこのところは期待していて欲しいな

鳳…まあ期待してやるか、アリの心臓分位は

龍…ノミより大きいな

作…ちっちゃえ事に変わりねえよちくせう…

## 第五話 大掛かりな戦とあるえ？

Side 龍鳳

今俺は：

「風遁・螺旋手裏剣！！！」

「ギャアアアアツ！－！－！」

「…………ふつ！－！」

「ピヤアアアアアツ！－！－！」

「火炎連拳！－！」

「ぐふう！－！」

偶然、官軍と思しき連中が三万の黄巾党と戦っているという情報を得たので数は少ないが援軍として駆けつけたのだ。

ちなみに官軍は約二万。俺たちの四千五百が加わってもまだ数の差が大きいため、明里、彩燐、双花、優優の四人に三千を伏兵として伏せさせ、残りの俺、陽里、清の三人と千五百で一番戦闘が激しいところに突撃して、俺と陽里、そしてそこで暴れてた奴の攻撃で少々数を

「これで一万ぐらい減ったのです！－！」

「そんなにか? といつかあいつら距離とつてないか?」

「広く認知されても使い手が極少数の『変気』を使って、しかも百人近くを一発で吹っ飛ばしたのを見たら距離とりましゅよ… 噛んじゃった」

「…………強い?」

「強いと思ひや、とにかくこいつらをどうこかじよいつ」

「ん」

「では「赤髪」、お前さんは中央、そこの緑髪と清はその補佐、陽里、お前は半数率いて左側、俺は残ってる右側を「…ねねの台詞をとるなです!!」

「いへ」

「了解ですよ」

「分かりました」

「…いぐぞーー!」

まあその後は躊躇に近かつたな、何せ赤髪の子は一振りで十人近く吹っ飛ばすし、清もその半数は一撃でやる。陽里の方も数が少なく、人が本能的に恐れることの多い『炎』をがんがんぶつ放すから逃げても仕留められ、俺は全身に雷をまとつて方天武戦ほうてんぶざんの突きでなぎ払つていいく… 何人吹っ飛んでるのか全く気にしなかつたが、後から兵に「出番がなかつた」といわれた… 恐らく賊の左翼の連中は全

員俺一人でふつ飛ばしたんだろう…

そして撤退しても伏せさせておいた俺の仲間が次々と襲い掛かる…しかも明里が俺と同じような状態になつて、だ…ちょっと賊に同情したのは内緒だ…

まあそんなこんなで三万いた賊は全滅、こっちの被害はなぜか人と頭をぶつけたのが数人と、矢傷を負つたのが居る位だ…後宮軍のほうは知らん、興味もないからな

んで、全員の状態を聞いてよそそうなので引き払おうとしたら、わざわざの子達がこっちに向かってきた

「ちよつと待つのです!!」

「どうした?」

「あなたがこの軍の大将ですか?」

「ああ…俺の名は姓を珀、名を武、字を麒麟といつ

「恋は…呂布…奉先」

「ねねは陳宮公大と言つのです」

「で、何用かな?」

「一緒に…来る」

「今回の討伐で助けてもらつたから私達が仕えている君主に会つて

欲しいのです……」

「構わないが…全員連れてつていいのか?」

「大丈夫」

「そのくらい余裕なのです……」

「そうか、なら同行させてもらおう」

そうして俺たちは進発し、洛陽に来た

「呂布と陳宮が仕えてるのってやつぱり何進大將軍か?」

「違う」

「会えば分かるのです、もう早馬を出して知らせてあるので入るのにも問題はないのです」

「ありがたい」

そうして俺達は宮中近くの城と思しきところにきた…ここから先是将だけと言われ、兵達は向こうの案内の人頼んで調練場の一角に待機させてもらい、俺、明里、陽里、優優、清、双花、彩燐の七人は玉座の間へ呂布、陳宮の案内で向かい、その主と今対面している

「お初にお目にかかります。私は珀武麒麟と申します」

「初めまして、私は董卓仲穎と申します」

「僕は賈駆文和よ」

「'つけは張遼文遠や」

「華雄といつ」

「徐庶元直といつましゅ！…わわわ、噛んじやいまひた」

「司馬懿仲達といいまひゅ！…ふわわ、わらひも噛んじやいまひた」

「張？儻又です」

「徐晃公明といいます」

「凌統公績と申します」

「姜維伯約です、私は董卓様達のことを知っていましたが」

「天水出身なのですか？」

「はい」

「そうですか…それとれ…呂布さんと陳宮さんを助けていただいて  
ありがとうございます」

「いや、俺達の助けは要らなかつたかもしけないな…一人で十人も  
打つ飛ばす將軍がいたんだからな」

「当然なのです！…恋殿こそ天下無双なのです！…！」

「（フルフル）（俺を指して）……強い」

「な、何ですと………」

「ほんまかいな？」

「（ハク）」

「セウは見えないが」

「…………（力を抑えてそつ見せてるだけだよ）」「…………

「なら手合わせしてみればいいんじゃない？」

「…………」「…………」

「…………（無謀だと思つた……）」「…………」

「俺は構わないが……相手は誰だ？」

「…………呂布殿です（ひづか）（私だ）…………」

「…………何だ（や）と（です）」「…………」

「…………れ……呂布はもう実力を知つてるみたいだか「別に構わないぜ」「えつ？」

「全員まとめてでもいい、部隊での調練の時にやつてるから……六対一で」

「いやー?」

「…………やつてます、そして私達は片膝つかせるべきか一撃『えた』ことないですか」「…………」

「なんですかー?」

「ああ、一回俺以外対隊全員つてやつたけどそれでも一撃ももらわず、肩で息もせず、全員強力な一撃を叩き込んでやつたな……心理的外傷にもなつてゐるが、そこまで震えてるし」

「…………あ…………」

「…………（がたがたぶるぶる）…………」

「い、一体何を……」

「月<sup>つき</sup>、気にしないであげよつ……それに手合せ見ればいいでしょう

「やうだな」

「ならば調練場にいくのです……それで、その鼻つ柱をへし折つてやるのですー!ー」

「逆にへし折られると思つなか

そんなこんな言い合いながら調練場に……そこには俺達の隊員もいたが、事情を聞くと離れて他のところに被害（？）というか巻き添えにならないよう遠くに避難し、それから呂布、張遼、華雄の三人

が各自の武器を持つてあらわれる

「すいぶん調子のいい見たいやな」

「貴様のような奴が戦場では最初に死ぬぞ」

「あの……龍り……珀麒麟様の事洛陽にいるのに聞いたことないのですか？」

「え？」

「珀麒麟様は数年前まで洛陽にて盧植さんのお下で武臣として勤めていたのですが……」

「詠ちゃん、聞いたことある？」

「聞いたことないよ、そもそももう盧植さんは故郷の幽州に帰っちゃってるし……うう、何進大將軍とかじゃないと分からないよ……」

「そろそろ始めるべきでは？」

「や、そうね……では……始め……」

その声とともに二人同時に突っ込んでくる……いつのときは連携を取つて波状に攻撃していくべきだろ？……特に先頭で突っ込んできている華雄……いつ猪か？いや、猪よりむごいな、アレは意外と動きがいいから……如何しようつかな……

「死ねえええええ……」

おい… こいつにはちょっとO・SHI・O・KIが必要みたいだな… 手合せだつて言つただろ?.. 殺したら君主たる董卓だけじゃなく他の武将にも迷惑かかるだろうし、第一悪評がすごいぞ、実力を測る手合せで仕官してきた武将を屠る将がいるってね

「まあ死ぬ気はないし自分の実力を過大評価をしている気もないが…お前さんは負けん」

「ほゞナええ！」

俺は上段から振り下ろしてきた大斧（後から聞いたが金剛爆斧と  
いうらしい）を手甲で軽くいなし柄の上に飛び乗ると

華「！」？

華雄が驚き、元々あつた隙がさらに大きくなる…無論その隙を逃がすのは三流以下、俺は顔面に膝蹴りを叩き込み、背後に回りこんで後頭部と肺に同時に一撃を叩き込み、さらに置き土産として蹴りも呉れてやり、見学者勢の近くの壁と仲良しこよしにしてやった

これを見て呂布と張遼は連携して攻めて来る。張遼が連續で攻撃して注意を引き、死角から呂布が攻撃してくるが俺は張遼の武器（これも後から聞いたが飛龍偃月刀というらしい）の柄をつかんで刃の部分を呂布の武器（こいつも後から聞いたが方天画戟）といいうらしい）と克ち合わせる

「！」

もちろんぶつける前に俺は手を離しているから、衝撃は全部張遼だけにいき、そのせいだろう張遼は距離を取り、呂布もまたやられ

ては適わないのか同様に距離をとり、その隙に俺は張遼に接近する

「うかがい！」

「戦場で負けは命を失うことと同義、確実に勝利を拾えるほうからいくに決まってるさ」

「舐めんなや！..」

だが手に力が入らない状態では満足に戦えるはずもなく、俺は張遼が防御した瞬間踏み込み武器を蹴り飛ばしそのまま蹴りで顎をかち上げ、追撃の蹴りも叩き込んで華雄同様見学者勢近くの壁と仲良しこよにしてやった

俺が警戒していることも呂布は本能的に気がついていたのだろう、華雄のときも張遼のときも攻撃をしてこなかった…そしてそれは正解だ。攻撃してたら俺は華雄や張遼をしていたからな

「呂布、一対一だ……しつかり遣り合おうぜ」

「（ハク）」

俺は左腰の刀を抜き、その力を解放する

「叫べ！..斬月！..」

同時に俺の周りの気が爆発して粉塵を巻き起こす…そして俺の姿が見えなくなつたと思うと同時に俺は呂布に切りかかる

「うー..」

呂布も反応するが若干遅い、力が乗り切らず吹っ飛ぶが体制までは崩せなかつた

「それ…」

「聞いたことあるだろ？、氣を送り込むと形が変わる刀があるの」と

「（ハク）」

「全部で何本あるのかは知らんが、そのうちの一本、名を『斬月』といつ」

「強い？」

「ああ、だがまだ強くなるぜ」

そう言つて俺は全身に雷を纏わせる…人の動きは全て電気信号で行つてゐるから、こゝすることで行動速度が速まり、さらに筋力も活性化するので速度の力も同時に上げられる

無論欠点もある。早すぎるため速度に田が追いつくことが出来ないところに振り回され、相手が強いとあつやられてしまつのだ

まあ俺の場合『輪眼』のおかげでそれはすぐに解決できたが…

とにかく、これで呂布と俺の状態の差はない…と思おつ。しかし油断は禁物だ…って

「つまつとも…」

ちょっとと考え事してたら呂布ががんがん攻めてくる…一見理に適つていないうような動きだがその実隙がほとんどない…が、これは修練からではなく本能的なものから来る連携、つまりは勘だ

「理と野生、相<sub>レ</sub>反するこの二つのどちらが優れているかで武将の動きは決まつてくる

俺らだと俺と双花以外は前者、双花は後者だ。俺？俺は…

「ふつ！…！」

両方だ…！

その証拠に俺は呂布の攻撃をかわすだけでなくもつ反撃を加えている。呂布のほうも捌いてはいるが徐々に徐々にその動きは精細さを欠き始めている

俺は多少空腹でも動けるが呂布はそうではないのだろう…先ほど大きく聞こえたしな…

まあ可哀想だし、一気に決めますか

俺は一旦距離をとり、斬月を突きの形に構える…呂布もそれを感じ取ったのかそれに抵抗するよつた構えを取るが…

「無駄ですな」

「どういひ」とですか

「ただの突きでしょ」

「確かに……ですが、あれは見切れない突きなんです」

「どうこいつ」とよ

「見ていれば分かりますよ」

そう、あいつらの言ひとおりこれは回避不能の突き……名を

「雷突」

その瞬間、俺は既に呂布を得物ごと突き飛ばし、気絶させた

見ている奴も対峙していた奴も分からぬだろうな……人の視認速度以上で動くんだから……無論俺の体もただではすまない。なにせ亞音速に近い速度で動くのだからな、気をめぐらせて強化していくから傷ついたりはしないが疲労感が半端ない……ただの突きに、黄巾連中相手に使つてゐるにどごめときやよかつたな

まあこれで俺の実力も示せたし、俺の仲間の実力は大将である俺が一番良く知つてるからな……ちよう路銀も尽きかけてたから客将か何かで雇つてもらえると万々歳なんだがね

## 第五話 大掛かりな戦い…ある？（後書き）

作・まずは董卓陣営と会合、そして戦闘

鳳・まさかマジで畠布に勝つとは

龍・いや、畠布は半分手負いのようなもんだからな

作・そう、畠布はお腹一杯ではあります。だからこのときの実力はだいたい55～60出でていたらしいほうですね

鳳・雷突は正確にはどういうのなんだ？

龍・そうだな…教えてくれよ

作・アレは正真正銘唯の『突き』です。ただ雷で両手足の筋力を極限まで高めるだけでなく、地面と足の間に電磁誘導を起こし、磁石の「極同士」反発しあうというその力も利用します。ただし、その部分がうまくいかないと逆に威力が減衰します

鳳・逆方向に働いた場合は、といつことだな

龍・摩擦で電気ためてとかじゃないと無理だな

作・やうに唯の地面では起きない、こには石だったからできた、といふ風にします

鳳・実際にはどうなんだ？

龍：たしか電気をまとう石もあればそういう石もあるからな……この城のが偶然そつだつたといふことにしておくか

作：そういうことです。さて、ここで感想のお返事とこましましうか

鳳：パンチさん、紅さん、ありがとうございます……！

龍：確かに弓将はいないな……

作：どうにかして黄忠をさつさと引き込まないと……太史慈は出してまいけど孫作とガチで張り合つた豪将だからな……弓よりもそれ以外のが合ひつんだよ

鳳：確かに……弓で有名なのは？

龍：今挙がつた黄忠の他に夏侯淵、後は弓腰姫といわれた孫小香かな作：ちなみに孫小香というのは後人が勝手につけたもので、本来はありません。また劉備の嫁になりましたが、実際夫婦仲は最悪だったそうですね

鳳：まあ親子……この時代だと孫ぐらじまで行くんじゃないかな？

龍：むしろ仲睦まじいと想像した連中はすくないな

作：俺もそう思つよ……さて、次回も董卓軍、その次は孫家、最後に曹操と絡ませようと思つてます。

鳳：ガチ百合とは早めに会いたかったな

龍・仕方がないだろ、作者の頭は悪いんだから

作・そういうことませめて聞こえないよつて言おつね

## 第六話 信頼と獲得と……なんかひどい（前書き）

作・今日は董卓陣営の続き

鳳・『反董卓連合』への布石か

龍・どうなんのかな？

作・蜀 を宣言してるけど、まあいい展開にはなるよ

鳳・なくなることはないんだな

龍・なくしたら弱小勢力で曹魏が孫吳に食われるからな

作・ぶっちゃけ曹魏はともかく孫吳とは仲良くする事決めてる

鳳・ではどうぞ… タイトル詐欺にならないよな？

龍・流石に大丈夫だろ？

## 第六話 信頼と獲得と……なんかひどい

S.i.d.e 龍鳳

俺達『珀武義勇軍』が董卓軍の密将となつて既に半年ほど経過したやつて、この事と言えば洛陽の警衛に兵の調練、それに書類の処理ぐらうだ

この軍にいるは史実でも真面目陣だつたから皆書類とかもきちんと処理している…それを見ていて賣駆が『恋も霞もねねも華雄も見習つて欲しいわ』とぼやいていた…確かにちゃんとやらないあいつらも悪いが強硬手段をとらないお前と董卓も悪いこと思つが…

それとここまであつた大きな事件といえばやつぱりアレかな…

『呂布武器破壊事件』

これは密将になつて三ヶ月位して俺と呂布が手合わせしていた時にあきたんだ…

俺達武人にとって武器は魂だ…だから手入れは欠かさない、俺は毎日寝る前にやる徹底振り、他の連中も最低でも一~二日一回は行つている、兵達も皆同じだ…というか兵達は鎧の調整まで行つてゐるから俺達よりも真面目かも知れん

ちょっと話がそれたな、その武器の手入れを呂布は自身ではなく陳宮の奴が鍛冶屋に頼んで行つていたのだが、最近は呂布が俺との試合をしまくり、しかもそれで呂布の面倒（？）にかまけていたか

らおひそかになつついに…

鳳『豪雷突！…』

呂『ふつー。』

俺の『斬月』の豪雷突（雷突から速度を落とし力を上げたもの）と穂先で激突させた瞬間、限界が来ていた呂布の方天画戟は粉々に壊れてしまつたのだ…

これには俺は物凄く驚愕したが…その後のほうは更にひどかつた…呂布は激しく落ち込んでいた…賈駆に聞くとアレは呂布の母親代わりであり、流行病で亡くなられた丁原殿から送られた大切な得物…という事…

そしてなぜ壊れたのか、原因が俺にあるかもしれないから調べたら手入れ不足ということが分かり、そのことを呂布に伝えようと思ったのだが俺とは会いたくないようだ…まあ張本人なんだからそうだよな…なので張遼に教えてあげて欲しい伝えたら俺は腕を掴まれて呂布の部屋に連れて行かれ、部屋の外で待っていたら張遼が説明している声が聞こえ、しばらくしたら張遼が俺を部屋に入れた

俺は待つている間に自分の持っている武器の中で呂布が使用できる得物を渡すということを決めた

そこで呂布は…ちょっとやつれていた…俺はまず素直に謝罪した…が、呂布も自分で手入れしなかつたことを後悔していたと分かった…元々丁原殿からちゃんとやりなさいといわれていたが自分が怠つたのが原因と…

だが壊したのは俺のだし、ということで俺の持っている武器の一つ、『破塵戟』を渡した。そしたらその場にいた二人とは真名を交換した

なお陳宮だが呂布の武器のことを放つておいたりしたということが大きな問題になり、賈駆達から謹慎が言い渡されていた

といつてもその翌日に事のあらましを説明したら董卓、賈駆とも真名を交換する事になった。ちなみに他の奴らは既に交換していたとの事…

そのことを疑問に思つて聞いたり『偶然』で済ませた…

その後は何もなかつたな…まあ呂布の手に慣らすために俺と試合をしていた時に呂布が俺を片膝つかせ、それ以降華雄も霞もよりいっそう鍛錬に励むようになつたぐらいか…

華雄は一撃で俺にやられたのが悔しかつたらしく、毎日のように挑んできて壁に吹つ飛ばされるというのを半月ほど続けたら俺を師事し始め、俺も伸び代のある勇将を鍛えるのであつさりと了承し、それを伝え聞いた霞も入り、先ほどの事件後は呂布も入った

そして今は…

「本当に終わらないな…」

「そうね…」

「へう～」

詠、円の一人と書類整理中だ……ちなみにやつてこるのは俺が民から陳情と警邏の問題改善、詠と円は太守としての仕事だけの筈だったのだが……

「あ、また霞の奴酒代を経費で落とすつてしまつやがる……認められつかこんなもん」

「これは……恋の家族の餌代？給料から出せつて書類にあいつひ……」

「お、終わいらなこよ～」

「龍鳳さん、これうちの隊のです……つて何ですか？」これ

「書類」

未処理より処理してあるほうが多いが、俺と詠の前にはそれ以外のようなものがある、明里もそれを疑問に思ったのか一枚手に見てみると

「なるほど、そういうのですか」

「分かつてもうえで何よつて

「やつぱり減給とかにしたほうが良くないか？延々とやつ続けるが

「でも、霞さんがなんばつてくれるのです……」

「「甘い」」

「へつ？」

「月、お前の優しさはすゞしい、だがそれがあいつ等を甘やかしてこるとこづ」とにぎづくべきだ

「…」

月大好きっ子の詠も何も言わない……やつぱりこの書類の量だと文句の一つも言いたくなるんだろう

「俺も上に立つものだから気持ちは分かる、だがな、時にはびしつと言つてやらない時もあるんだ……相手の事を思つんだつたら特にな……厳しさがあつてこそ、本当の優しさだと俺は思う」

「……」

「そうですね。時に叱責することも大事です。月さんが皆さんの事を大切に思つているのは皆知つてます。だから皆さん分かつてくれますよ」

「そうだよ……迷うくらいなら、覚悟を決めて、勢いだけでもいいから決めればいいんだよ」

「それにお前は一人じゃない、ここにいる皆が仲間だからさ

「…そうですね……皆わん、ありがとづ」やれこめす

「いひつて事よ」

「やうやう

「友達ですか?」

「それじゃお恋さんと靈さんと華雄さんとねねさんを呼んで来て下  
れ、それと龍鳳さん」

「何だ?」

「これまで壊した訓練場の修理費、これから給金から問答無用で引  
きあすから、壊さなこよひにしてくださいね」

「は?」

「へへへ… 「詠ちゃん」何?円」

「詠ちゃんはこれまで龍鳳さん蹴つたりして壊したもの請求をす  
るから」

「（あれ、もしかして…）」「

この後円に呼び出された全員が同じような直撃をされた… それと  
同時に俺と詠は言わなければ良かつたんじやと本気で後悔したね…

これが今日まであった事、そして今日は俺が洛陽にいる事がつい  
に劉弁様、劉協様にバレ、ここに来るとこつお達しがあって今城内  
は上へ下への大騒ぎとなつている

「あなた交友があつたのなら何で言わないとよーー。」

「交友とこつても一年半ぐらい教鞭をとつてただけだぞ、私塾の先

生伝で……まあ覚えてるとは思わなかつたし

「どうこういとよへ」

「弁様の後ろ盾と、協様に取り入る口としている連中」

「……言いたい」とは分かつたわ……とにかく、あなたが出迎えて頂戴

「分かつてゐる……」

そんなこんなで俺が両皇太子妃を出迎え、玉座へどー案内した……  
なお護衛は「龍鳳があるから大丈夫じゃ！」といつ弁様の一言で  
いなくなつた……確かに強さを見たいといわれて護衛官全員のした事  
あるけどせ、あつたり引くのもどうよ

「では、食事会を始めます」

月の一言で始まつた皇太子妃を含めた食事会。これは俺の隊がいつもこのように食べているといったら月がうらやましがり、詠が将軍達だけならという条件で許可したものだ。交流を深めるという意味ではこれ以上のものはないため皆喜んで参加している

最も一部は酒酒酒だが……それと今回は弁様、協様が来ているためまずは自己紹介（俺以外）をした後開始となつた

このときは丸机で大皿に料理を盛り、そこから各自料理を取つて食べるといつもの、席順は玉座の方を十一時、始点として時計回りに『弁様、月、詠、彩燐、陽里、明里、恋、霞、双花、清、優優、華雄、協様、俺』

だ……ちなみに話題はもっぱら最近の洛陽及び全国の情勢だったのだ

が…

「アリヤの龍の話を聞きたいの」

「此度はどのよつた事を話していただけますか?」

「話?何ですか?」

「龍はいろいろな話を知つておるのじやー。」

「なんでも未来からこの世を救つたために来たと言つておつたしの」

「…」

「弁様、協様、それは公言しない約束のはずでしたか?」

「アリヤのお主は真名を交換したものは知つておるとこつておつ

「アリヤじや、お主はまだ話してなかつたのとは知つておるところではないか…実際に盧植もしつておつたしの」

「ですが彼らにはまだ話してなかつたのですよ…今日この時に話すと決めてこましたので」

「やうなのか…すまん」としたの

「…え…」

「では話してくださりますか?」

「ええ…ただ、話している間、質問は受け付けません。話し終えた  
らで」

「「「「「はい（うそ）（ええで）（口ク）（ああ）（なので  
す）」」」」」」

「」の後俺の事と知つていてる事のほとんどを話した…

「」の世界を壊そつとするために「」の世界の住人として送り込まれ  
た事、

そのための力として剣等を受け取った事、

本来の歴史とそれによつて「」の後起「」である「」と、

それによる特定の人物の死と暗躍、

話し終えると既に知つてている俺の隊の将、弁様、協様以外は顔が  
青ざめていた…特に詠がひどい…

「嘘はないんやな」

「ならお前らの出身地と親の名前言つてやるうが?」

「僕らもそれで最初疑いましたけど本当の事だとすぐに証明されま  
したよ」

「それにしても…正史でしたか?それで私の孫が…別人と分かつて  
いてもやりきれないですね」

「お主等は良いではないか…信じていた者にこのままでは殺されかねん我等より」

「やうですね…それに…董卓殿も」

「しかしお前は真名を交換したものに言つのだらう…それだと私に弁様、協様は除外されるのではないか?」

「弁様、協様の真名は知つてゐる、ただ公の場では呼ばないだけだ…何進と宦官に目をつけられたくないのでな…華雄、お前に教えたのはお前の事情を知つてゐるからだ」

「…?」

「すみません、華雄をさ」

「董卓様…」

「ですから、私から真名をあなたに受けたいと思ひます」

「…?」

「これからは真名として『幸<sup>ゆき</sup>』を名乗つてください」

「董七「円ですか」」

「随さんも、よろしくですね」

「はこ(ああ)(もひひせ)(せ)( )」

「では我等もなのうづかの」

「ですね、姉上」

『は?』

「しかし皇太子妃様達の真名は…」

「信頼できるのはここにあるもの達じや、龍よ」

「まあ我等一人、別の感情もあるがの」

協様のは全員にしつかりと聞こえた…無論俺は理由とかも全て知つており、身分とかを盾に逃げようとしたが美少女の涙目上目使いという見事な決め技の前に陥落したのだ…どこでおぼえたのか聞いた侍女達に聞いたそうな…以来俺が侍女とか小姓のようなのを側に置かないのはそれが理由だつたりする

そしてそれを聞いた一部が若干、いやかなりおろおろしていたが…

「弁様、協様」

明里が口を開いた…どことなく嫌な予感もするがここは任せせる感じにするしかない

「龍鳳さんの事を好きなのは御一方だけではありません。私を始めとする珀武義勇軍の全員は勿論、私と同じく水鏡女学院の諸葛孔明、鳳士元、盧植塾門下の劉玄徳、公孫伯珪、荀文若が好意を抱いてます…異性として」

「そうであるうな……何せ盧植が宮廷を辞し故郷の幽州に帰ったのも  
門下が理由と聞いておるから」

「それに董卓、お主も龍の事を好いておひつ

協様、それは…

「な……どうして分かつたんですか!…?」

「当つだつたよ……女性ってすゞこな

「恋も……好き」

「恋殿おおー!…?」

「つむは……微妙やな

「私もだ」

「僕は…」

とひょつと混沌としたが結局のところ俺の田指すものはまず漢王朝のもとで行つと言つたら一度落ち着き、俺の事を好いていないね、まだはつきりと分からぬ靈、幸が退出した後真名の交換をした

弁様は『梅芳』<sup>ふあいほう</sup>、協様は『桜蓮』<sup>ふとうれん</sup>といつ真名だ

これで今回の食事会は解散…の前に今後の『黄巾党』と『反董卓連合』に対する対策を考えたが…宦官の残党などに恐らしく、後者は十中八九邪魔されるであろうから外から救うという事、それで俺に

前者の時点では領土を「」「え、救いややすくあるとしか結論は出なかつた…

それから半年、何度も密将として戦い続け、面倒どころも少しずつだが撤いたら簡単な官位をもらい、それを受けて出立といつといつ

「世話をなつた」

「いえ」

「でもまさかあの郡の太守になるなんてね」

「適度に撒いたおかげで。世渡り世渡り」

「では気をつけてくださいこ」

「ああ…またな」

「はい」

「ちやんと来なさい…」

「分かつてゐるよ」

そうして俺達は新たな土地へと出立した…そこへ前によつて  
と悶着があるのだが、そんなこと俺が知るはずもなかつた

## 第六話 信頼と獲得と…なんかひどい（後書き）

作：孫吳が先つて言つてたけど変更して曹魏を先にします

鳳：まあ道のり的には良いんじゃないか？

龍：にしてもこれまでたつたフラグってどんなん？

作：こんな感じです

成立 桂花、桃香、月、恋、白蓮、朱里、雛里、オリジナル勢  
半立 詠、霞、幸  
八部立 音音音

鳳：反董卓で半立は成立入りするのか？

龍：しかし原作キャラは全部で50人位いるからな…

作：次回は曹魏で、一人成立させるのは確定、運が良いともう一人半立に出来る

鳳：誰だろうな？

龍：想像は結構易いと思うが…

作：ではまた次回！！

桃・質問・意見・感想等を待つてます！！今回から交代で私達が担当します！！よろしくね！！

## 第七話 強烈な闘争と懸念こと…（前書き）

作・今回うまくかけたかな?

鳳・龍・いや、全く

作・ちやんと書いたよ…

鳳・いっぺん書いたのを凡ミスで消した奴がどの口利いてんだ?

龍・俺のほう全く更新しないのに…

作・申し訳ありませんでした、それと基本視点は龍鳳です今回から  
そういうのは消します

## 第七話 強さと弱さと思ふと…

俺達は治める事になつた荊州南郡へと向かつてゐる途中、とある村が賊に襲われ、数日後再び襲われる可能性ありとの報を聞きその村へ急行した

そして俺の名前は運良く良い感じに有名になつていたらしく、あつさりとその村に入る事が出来た…その村には義勇軍があり、今その将である彼女達とも面会しているところだ

「俺がこの軍の大將、珀麒麟だ」

「軍師の司馬中達です」

「同じく徐元直です」

「張雋乂といいます」

「徐公明です」

「凌公績よ」

「姜伯約です」

「私は義勇軍の将の一人、樂文謙といいます」

「沙和は子文則つていつの～」

「つむは李曼成ゆつんや、よろしくな」

「沙和、真桜！！」

「気にしなくて良い、それより、近隣の郡とかに援護要請はしたのか？」

「はい、それで、陳留郡の曹操殿が、既に將一人に先遣隊千人、そして自身が本隊を率いて来られるそうです」

「そうか…先遣隊到着まで後どのくらいだ？」

「早いと今日中には着くそうです。本隊は今しばらく掛かるようですが…」

「そうか…陽里、明里、お前達の予測だと後何日で賊は襲撃していくる？」

「早いと一、二日ですね…遅くとも三日には来るかと」

「はい、ですので残りの時間で本隊到着まで持ちこたえられるよう門前の防御を強くしておく必要があります」

「門の状態は？」

「悪いとしか言ひようがありません…なのでその周りに柵を作つていたのですが…」

「材料も足らないと…」

「はい…」

「優優、清、双花、彩燐、すぐに兵千率いて近くの森に行つて各隊二、三本木切つて來い」

「御意」

「残り一千のうち半は負傷者達の救護、残りはこの村の状態の確認に行かせろ」

「『おーい！』」

「いいのですか！？」

「助けを求める手を振り払うほど俺は外道じゃない……それで、賊は普段どのように攻撃していくの?」

「いつも北門を重点的に攻めてきますね…それと同時に他の門全ても…なのでそこが一番不安です」

「 そ う か 、 遅 く 時 は ど う 動 い て い る ？」

「北から東の通りへと動いていきます」

「そ、うか… 翳そく！」

ମୁଦ୍ରଣ

二〇一九年

「聞いていたな」

「調べてきます、全て」

「頼む…危険だから気をつけてくれ」

「御意」

そうして鷹はいなくなる…樂進たちはびっくりしてゐるな…まあ驚かなかつたら精神強いつて感じじやないんだけどな

「これで打てるでは打つただろつ…後は、君達の実力把握とこいつか」

「…へ?」「…」

「実力を知らないとつまく連携できんだろつ、ほら、行くぞ」

んなことがあつて俺達は村のちよつと拓けた所にきた

「一人ずつ見る、まずは「私からお願ひしてもいいですか」樂進か、いいぜ」

「よろしくお願ひします」

俺も樂進も構える…合図は…

「それじゃ、いくの〜」

「始め…」

で、始まつた…明里がいるのはその実力も考慮した策を作るためだ  
樂進が俺に打ち込んでくるが俺はそれを余裕を持ってかわす…し  
かも必要最小限の動きでだ…時折捕らえかけるも上手く誘導しては  
ずさせろ…

「なるほど…」

俺は一度空振らせてそのまま距離をとる…やつすると樂進のほう  
もいつたん落ち着く

「なぜ腰の得物を抜かないのですか？」

「実力を見るんだ、こいつを使うと見るまもなく終わっちまつ…ま  
あ大体分かつたから終わりでいいんだが」

「…どうですか、私の実力は」

「今の時点では俺の隊の兵より少し強いって所だな…だが延びる余  
地が十一分にあるから上手く鍛えれば化けるな」

「そうですか…」

「まあそう落ち込むな…俺の隊の調練は死ぬか死なんかギリギリの  
ところまで追い込むからな…数が少ない分質で補うしかないからな」

「はあ…」

「おし、次は…」

そんな感じで于禁、李典の一人とも手合わせしたが」の一人は樂進より劣っていた……よくもつてたな、この村

「悪くはないが良くもないな、お前ら」

「「「……」「」」

「樂進はまだいいが于禁、李典の一人は気持ちだけが先走ってるな、変に実力以上のことをしようとしてる……いうこう状況ならいいが疲れきったところではやるのは誰の血殺と一緒にだ」

「手厳しいですね」

「あんな、俺は死なせに来たんじゃねえんだ……それに言つてやらんとたぶん自覚せんぞ」

「毎日ちやんと訓練してるの……」

「どんなのだよ」

「素振りしてるだけですけどなの……」

「樂進は?」

「型を確認しているぐらうです、賊がいつ襲つてくるか分かりませんし」

「李典」

「え~と……「ちは肉体労働より頭脳労働派なんで……」

「龍鳳さん、落ち着いてください… 彼女達に悪気はないんですから  
…」

「無い分性質が悪い… 子供の発想だぞ…」

「では珀武殿はどのよつな訓練を?」

「走り込みを最低十里、その後腕立てや腹筋、背筋を百回やつた後、  
素振りを百回、その後無手の型の確認する。それでこれと平行して  
氣を体中に満遍なくまわせる様にするのもやつしているな」

「…」

「なおこれは龍鳳さんだけじゃなく他の部隊は最低限これを個人  
ですることを推奨します、それに食事とかは基本的に全員で一  
緒です。連帯感が生まれますから」

「人を守りたいんだつたらまずは自分の身を楽に守れるようになら  
んとな… そうでなければ守りたいものも守れなくなる」

「……そのような事があったのですか?」

「一度だけな、そのときの無念は忘れんよ…だからこそ強くあらん  
とするのね」

「でヒ「申し上げます!…」

「どうした?」

「曹操軍の先遣隊が到着されました」

「分かつた、会いに行く。樂進、李典、于禁、お前達も来い、よく知つているからな…明里も」

「はい」

「分かりました」

「はいなの~」

「了解やで」

そして村の中心のほとりに居ると青髪の女性と小さく女の子が居た

「お前達がこの村にいる義勇軍の将か?..」

「はい、私は樂進と言います」

「于禁なの~」

「ひねねみやわ」

「あなたは?」

「俺は荊州南郡の太守、珀武だ」

「かの有名な雷將軍か…そのことは聞いていたがなぜこのようなど  
じり?..」

「任命されて任地に行く途中にここで大規模な賊がいるって聞いて  
な、その討伐にきたら彼女達と会つたというしだいさてかやつぱ  
り有名なんだな…」

「ああ、雷をまとい、賊を蹴散らす…名のほつは始めて聞いたが」

「うんうん、雷將軍・珀麒麟って言つのはよく聞くけどね」

「俺の字が麒麟だからな…名乗る時は姓と字の方が格好いい気がしてな」

「確かに格好いいと思います！…」

「お主は？」

「あ、珀武軍軍師の徐庶です」

「そうか、私は先遣隊の隊長の夏候淵だ」

「僕は許緒だよ」

「お前達の軍は全部で何人だ？」

「兵六千人、将四人、軍師一人に龍鳳さんです」

「そちらは？」

「将は私と季衣、それと兵が千人だ」

「わわわ、と言う事は私達が主力でしゅね…噛んじゃいまひた」

「せうなるな」

「本隊はこいつの到着予定だ?」

「早いと二日後だな」

「わわわ、もしかすると間に合わないかもしねえんね…またかんじやいまひた」

「家の将が兵率いて丸太持つてくるだろ?から、それ使って何とか防衛するしかないな」

「あの、投石器はびつじょうか?」

「なんだ、それは?」

「字の」とく、「石を投げるもの?…ただ急造物しか無理だろ?から五発放てればいいほうだろ?な」

「石なんか投げても意味無いんじやない?」

「石とこつても道端に転がつていいようなものではなく小さくても人の頭と同じぐらいの大きさのを投げるんです、しかも賊は密集しているでしょ?から効果は大きいです」

「なるほどな…確かによそそうだ」

「んじや、明里はあこづらが戻ってきたらその指示頼むわ、それと「龍鳳さん」「陽里か、どうした?」

「君は？」

「珀武軍軍師、司馬懿です。既さん戻つてきました、それと、これが今この村の状態です」

俺は陽里に渡された竹管を読む… 現在戦えるのは百人ほど、門は開きっぱなしといつてもいい状態、武器はほほなし、か… それと斬つて木は全部で十一本… よし

「陽里、半分はすぐに加工して門を守る柵にしり、やり方はわかっているだらう?」

「はい…」

「残りは二つちに持つてくれ、簡易の投石器を作り、防衛に使

う

「わかりました、明里ちゃん、一緒に来て

「うん」

とりあえずこれで準備のほうはいいか、簡易だから投石器もそう複雑ではないしな

「で、投石器を作るのは?」

「俺がやる、攻城戦とかに使用するものじゃないし、使い捨てのよ

うなものだからな」

「そんなに簡単に出来るものなの？」

「長い丸太の中心に短い丸太くつつけりやいいだけだからな」

「それだけで石が投げられるよつくなるのか？」

「ああ、各門一合<sup>ひ</sup>ずつ、まずは北門用から作る」

「お待かへただよこ、北門は一番賊が多く来るのですよ、そんなとこ  
るのを…」

「北門の守りは俺が着くからな、だからそれでいいんだよ」

「流石! 万の賊をなき払つたといわれる『雷将軍』だな」

「ああ、ができる事は限られてるし、へたすりや死ぬ事もある…  
だからそくならないようにいろいろ考えるのさ」

「なるほどな…」

「構わない」

「んじゃ、いつちょ頑張りますか」

「とにかく作り、その後全員で配置を決めて作戦を立て、本番…  
そんな流れで良いか?」

それで投石器を作つていたら李典が「協力するで~」といつて参  
加したが正直助かったな…想定していたものより良い投石器が出来  
たから楽に成る…先遣隊の兵達は投げる岩を探しててくれた…後

で夏候淵殿には礼を言つておかんとな…

また平行して樂進、于禁、李典の三人を鍛えた… 樂進は飲み込みが早いから鍛えてて楽だ… 于禁、李典、お前達はもうちつと真面目にやれ… ことある」とに洛陽の事聞いてくんna… 欲望全開で

そんなこんなで賊がもつすぐ来る確認でき、全員配置に付いた

振り分けは

- ・北門 僕と樂進と彩燐率いる騎馬隊（伏兵・千人）
- ・南門 于禁と明里に双花
- ・東門 夏候淵殿と優優、清
- ・西門 許緒殿と李典

そして各門に僕の隊の兵千人ずつ、残りは村の中だ… 夏候淵殿達が率いてきた兵は各門近くに一百五十人ずついる

これで負けるか… ないな。何せこのような状態で恋、幸、霞、詠指揮する四方からの攻めを凌ぎきつて逆襲してやつたからな… あれ、攻めも守りも万能？僕の隊

鍛えた甲斐があつたぜ… と、そろそろ来るな… んじや、始めますか… !

## 第七話 強さと弱さと思ふと…（後書き）

作：最近遊戯王物も書こうと思つてゐるんだ

鳳：やめる、龍士以上に更新が遅くなる

龍：せめて俺のほう完結させてからにしてくれ

作：『ギャグマンガ日和』みたいな感じでか？

鳳：「ソードマスター大和」か、結構有名だよな、あれ

龍：流石にそれはやめてくれ、後生だから

作：冗談だ…しかし一話の予定だつたのに…

鳳：予定は往々にしてずれたりするもんさ…次回は戦闘と霸王との  
会合か…

龍：まあ頑張れ

## 第八話 百合百合霸王様…超逃げてえ（前書き）

作・前半は戦闘メイン！－の予定

鳳・ちゃんと楽進活躍させろよ

龍・基本主人公無双だからな…

作・樂進はちゃんと戦いますよ…主人公の援護で

鳳・龍・まともにやりあえる奴つているの？

作・呂布

鳳・龍・確かに

## 第八話 百合百合霸王様…超逃げてえ

戦闘が開始して大体半刻、まずは投石器の射程内に入つた賊に対してもう一石を送つてやる…」これには若干ビビリつつも退くことなく突進してきたため、今度は矢を雨霰の様に降り注ぎ、平行して門の柵の前にいた俺と楽進が突っ込み、

「おらあ…！」

「ふつ…！」

賊どもをがんがん吹つ飛ばしてゐる…

岩と矢で結構人数が減らせてゐるため、そう苦にはならない…兵達に剣、槍、弓、どれも最低限使える様にしておいて正解だつたな…

龍鳳の『最低限』は民から見て玄人と同じですりく作者

またなんか飛んできた…しかし人数はあまり減つてないよつに感じる…

「なかなかへらねえな…おらおらおらあ…！」

「全くです…援護もなくなりましたね」

「まあ量には限界があるからな…まだいけるか、楽進」

「はい…」

「俺も少し本氣を出そつ… 水天逆巻け… 摳花あ…！」

「『…』」

「驚くのはいいが戦場で止まるのは自殺行為だぜ…！『波闘撃』！」  
んだからな…しかし…

「驚くのはいいが戦場で止まるのは自殺行為だぜ…！『波闘撃』！」

『ギャアアアアア…！』

捩花は基本的に片手でぶん回してその勢いで相手をたたつ切つたり、潰したりが主だ。それに『流水系』だからそのときに水も溢れ出す…その威力は人一人をあつさりと押しつぶすほどだ…なので

「樂進、お前はもうちょい離れたところにいる奴らに…ここは俺が…！」

「は、はい…！」

そうして俺の捩花と樂進の攻撃…つてありや氣弾か？仲間にしたいな…んん、とにかく、攻勢に回った俺達の攻撃の前に賊は次々と蹴散らされ、さらに伏兵としてとか騎馬隊に敵の根城を探らせておいた根城を強襲し帰ってきた彩燐の騎馬隊に止めを刺された…うん、

見事

俺達は手に入れたものと共に村に戻ると本隊が到着し、他の門の戦闘も終わっている事が分かり、俺は彩燐と陽里、明里に賊の拠点から取つてきた物資を村の人々に配るよう指示し、双花と清を伴つて

曹操軍本隊のところへ向かつて、夏候淵殿と出会つた

「夏候淵殿」

「珀武殿か、何用ですか」

「曹操殿にお会いしたくてな…取り次いでもらえるか?」

「もともとそのつもりで探していたので…」

「分かつた、双花、清、行くぞ」

「御意」

そうしてしばらくなげくと樂進、于禁、李典と共に夏候淵殿の色違  
いの服着た黒髪の女性と金髪ツインテドリルの女性が居た…恐らく  
金髪のほうが曹操だらうな…

「華琳様、珀部殿が来られました」

「やう、分かつたわ、あなた達もここにこなさー

「はい(なの)」「」

「始めてまして、雷將軍・珀麒麟」

「ああ、始めてまして、霸王・曹操孟徳殿」

「」

俺と曹操が互いに霸氣を体から出すと、樂進達は驚いているな…  
双花と清は平然としてるが

「あら、私の霸氣と同じくらいのを持つなんて…すばりこわね」

「お褒めに預かり光榮だね、でもこれで一つわかつただろう」

「ええ、なら倒すまでよ」

「結構、まあこの程度の連中に俺の仲間は誰一人として負けんがな  
「そのよつね、私とあなたの霸氣を受けても平然としていたのだから  
「敵にあんたみたいなのが居たらといつ前提で訓練した事もあるからな、」のへり出來てもらわないと困る」

「ひ

「そう… 一ついいかしら

「これからのは乱世、俺はこの霸と仲間と民を思ひ徳を併せ持ち、恐  
れぬ勇と忘れぬ初の魂を持つてその乱世を平定するつもりだ…お前  
は?」

「あら、物分りのいい…私が目指すのは霸道、それだけよ

「孤独で血塗られた道をあえて選択するか

「ええ、それが私の道よ」

「そつか、また会おう、曹操…出来れば味方同士がいいがな

「それは天のみぞ知る、よ…でも、秋蘭からの報告ではそのほうがよれやうね、兵の鍛度が違すぎるわ」

「華琳様、このよつた奴の軍にわが軍は負けません…！」

「貴官は？」

「我名は夏候惇…！華琳様の霸道の妨げとなるものを切り裂く大剣だ…！」

「ほつ…確かに強い部類に入るが…うちの軍師にも負けそつだな」

「何だと…！」

「姉者、本当だ…楽進たち三人相手に一人で圧倒していた」

「…」

「実戦経験も多いからな、あいつらは…まあ負けるといつても条件次第じゃあんたが勝つ」

「勝負は時の運という事か？」

「そつこいつた…あんまり頼りたくないがな」

「そこは同意するわ…それと」

「何だ？」

「そこ」の二人、あなたの軍に入りたいそつよ

「そつか、ならばありがたくいただいていくとしよう」

「遠慮とこす言葉は無い様ね…まあいいわ」

「ああ、それとこちらも流石にこれ以上はいられないでのな、申し訳ないがもう行かせてもらひう」

「ええ、ではまた会いましょ」

「ああ、出来れば戦場以外でな…ありえないだろうが」

それで俺は清、双花、樂進、李典、于禁を伴つて自軍の所に向かうと、既に全員出立準備は完了していた

「まず全員に紹介しておく、今日から加わる新しい仲間、樂進、于禁、李典だ。それぞれ自己紹介を」

「私は姓を楽、名を進、字を文謙、真名を沙和といいます、今日からよろしくお願ひします」

「沙和は姓を于、名を禁、字を樂進、真名を沙和つて言つの～。よろしくお願ひするの～」

「うちは姓を李、名を典、真名は真桜や。よろしくうな～」

その後俺達全員が真名を教え、そこから配属を決めていく

「凪は双花、沙和は優優、真桜は清の元で副官をしてもらひう

「 「 「 はい（なの～）」 」 」

「 では進發する。目的地は荊州南軍……」

『 はつ……』

歩を進め始める俺達… 凪たちは馬が無いから徒步になる… 多分来なかつたほうが良かつたとか思いだすだろうな、特に沙和と真桜は… 行軍も半分調練になつてるからな…

「 荊州南郡には一体どうなつているんだろうな… とにかく實際に行つて見なければ分からんか」

既に情報は陰、影、翳の三人の部下から逐次報告が入つていて  
土壤状態から民達の状態、さらにはかつて太守がどのように治めていたのかまで分かつていて…

前太守はまともであつたが病没、今はその奥さんが何とかしてい  
る状態らし…

大丈夫なのかな、俺…

そんなこんな考えたり兵達の訓練もしたりしながら四日後、無事  
南郡に着く事が出来た

凪達は歩兵同様時々走らされたりしていた… 凪は一日目から平氣  
そうだったが沙和と真桜はしんどそうだったな… といつても昨日当  
りになつたら凪と同じぐらいで走れるようになつていたな… お、

迎えが来た

「始めてまして、私がこれまでこの南都を代わりに治めていた黄忠漢升です」

「遅れすぎまない、俺が新太守の珀武麒麟だ」

「お噂は常々聞いております。こちらです」

黄忠に案内されて俺達は入っていく…その中にいくつか殺氣を感じる…黄忠からも感じるが何か憂いのようなものも感じるな…大方俺を嫌つている連中だろつ…黄忠は人質か何かで仕方なくといったところか…よし

「翳」

「はい」

「どうなっている

「主の軍を吸収しようと劉表あたりが仕掛けしてきたのでしょうか…某も注意しなければばれるとこひでした」

「あ奴は?」

「人質です…某でも一人だと命を犠牲にせねば助けられぬほど兵士達が厳重に囲っています」

「分かつた、刺客は全員俺にしか集中していない…凪と双花と古参の兵十人、大丈夫か?」

「十分です」

「頼んだぞ」

「御意」

騒がいなくなる…今騒と会話していく事に気づいているのは俺の軍以外だと黄忠ぐらいだろう…実際にちょっと殺気が薄れている…ちなみに気づかないのではなく気づかせていないのだ…うちの隠密の連中は気配消すのに長けてるからな…ちなみに俺が気づけるのは気を感じるからだ

刺客が一箇所に集まりだした…匕首やら決めたようだが手はずが悪い…実行者は流れ者のようなだな…糾弾されて自分に被害が出ないよつこか…阿呆が

暗殺のまづが確実だつてのに気づいてないのかね~まあ俺としてはめんじく無いからいいんだけどね

するところなり大量の兵士達がでてきて黄忠」と俺達を取り囲む…ざつと一万ぐらじか

「何者だ! !

「なに、ただあんた達には死んでもらいたいだけだよ

「話が違つじやない! !」

「あなたは邪魔だから一緒にやれっていわれてんのさ

「そんな…」

「くくくくくく…俺達は一万人、これだけの数に勝てるかな?」

「ああ」

「ば、馬鹿じやねえのか!! 兵法の基本も知らねえのかよ!!」

「有象無象が一万二万集まるうと俺達は負けん」

「ふざけんじやねえ!! 手前ら!! やつちまいな!!」

「全軍抜刀!! 迎撃せよ!!」

『オオー!!』

俺達に敵が襲い掛かつてくるが全員次々と打ち倒していく…沙和も真桜も活躍しているな、それじゃあ俺はっと

「どうした? この状況に声も出ないのか?」

「ば、馬鹿な…」

「雷將軍の部下なんだ…一万を一人で打ち破る奴についてきてもらうためには一人で五十人は殺せるようになつてもらわんとな」

単純に計算すると五十倍を打ち破れるようになりたいといつてい るようなものだ… 実際は十倍がいいとこだらうがこういふときは誇 張したほうがいい

「！」、黄忠！奴を討ち取れ！！あ、あいつがどうなつてもいいのか！！」

- 1 -

黄忠が無言で矢を向け、  
俺に放つも、全て俺は掻みとる…まだか  
仄、双花、翳…

「ええい…役立たずめが…もう言い…あの餓鬼を連れて「あの餓鬼とはこの子のことですか?」…」

「...」

一  
通  
し  
そ

申し訳ありません 着いても妨害かす」ア

「一とほいつても廻の嬢ちゃんが氣弾で片つ端から片つ飛ばしてくれたからだいぶ楽だつた」

さて、これで俺達が争う理由はなくなりたな。

兵士達の間で其終れ三たまひですしね」

1

「ん、怪我した奴はいるが重傷つて感じじやないし……死者は零か……うれしいねえ」

そう言つて微笑む…すると正面から俺の顔を見ていた三人は顔を赤くしてそらす…戦場でなにしてんだか…

「隊長…逃げちゃうの…！」

「…逃さん…！」

俺は露天装を発動して瞬時距離をつめ、捕獲し、もと居た場所に戻る…黄忠だけか、驚いてるのね…子供はどうやら死絶しているようだしな

「セイ、どうする？」

「やつですね…」「ああ…！」どうしました？」

「双花、知つているのか？」

「うん、こいつ、黄祖だよ…たしか孫黙の母、孫文台を腰にはめて殺した奴だよ」

「いい事を聞いた…黄忠、こいつは孫黙との取引材料にする、構わないか？」

「本音を言えば私自身の手で殺してやりたいところですが…孫黙とは今後のことを考えると友好的な関係は作つても敵対するのは危険ですから、もう少しです」

「すまないな、それと匪、早く渡してやれ」

「あ、す、すみません…！」

「いいですよ… ありがとうございます」

「いえ、お礼なら隊長…」

「実際に助けだしたのはあたしらなんだから素直に受け取るつよー  
双花の言つとおりだな。謙虚なのはいいがそれも過めると嫌味に  
しかならんからな」

「あ…はー」

「さて、お前はこれからどうするつもりだ?」

「よろしければ…末席に加えていただけませんか?」

「末席ではなく、副官になつてもうえないだろ?」

「…よろしいのですか?」

「お前が俺の命を狙つた理由はあれでもよく分かつた、それに俺達  
は土地を治めた経験はない…だから指南役が欲しいの?…無論受け  
るか否かはお前に一任する」

「わかりました…受けさせていただきます。我真名は紫苑、お受け  
取りください」

「我真名は龍鳳、紫苑よ、お前がこれから先望むものは何だ?」

「我子、璃々と笑つて過ぐせる世です」

「分かつた、もし俺がそれを成すに値しない人物と分かつたら裏切つても構わん、だが、値す人物である限り、全命をとして答えるもらうぞ」

「はっ！…」

そうして俺達は南郡を治める事となり、紫苑という新しい仲間も得た…さて、まずは洛陽と同等とは言わんがそれに近いものにせんとな…これから忙しくなるが、楽しみだ！！

## 第八話 百合百合霸王様…超逃げてえ（後書き）

作・終わった～！！

鳳・しかし今回で黄忠も仲間に加わるとは…

龍・まあ蜀で黄忠がいなくならないわけ無いしな

作・しかも弓の名手…兵の鍛度がまた上がるぞ

鳳・親衛隊だけか？

龍・いや、こいつの性格だと…

作・目標としては兵一人＝原作の関羽クラスにしたい

鳳・龍・兵達一人一人が一騎当千！？千人率いていけば小さい軍勢は瞬殺されるな…

作・それと凪、沙和、真桜もどんどん強くしてくし、次回はまた新しい仲間入れたいな～

鳳・龍・ちゃんと紹介してやれよ

作・分かつてるよ…また次回…！

鳳・龍・お楽しみに…！

桂：誤字脱字、感想や意見とかいろいろ待つててあげるわ…正直男  
からは遠慮したいけどね

## 第九話 仇と小猿に（前書き）

作・結構きつい感想がきました…

鳳・くれるのはいいし乱文と書いてくれるのもいいですがこういつのつてちょくちょく見るぞ

龍・さりげなく他人を巻き込むな…感想書く時は自分がもらって嬉しく感じるものを書いてもらえるとありがたいです

作・誤字脱字に意見・感想とは書いたが批判が欲しいとは言ってないし

鳳・荒らしと言つ奴か？

龍・そこまでじゃないよ…

作・形式は変えません、素人ですし…恋姫は登場人物が総勢五十人を超えるので…

鳳・てか面白いの見つけるとまず Wikipedia チェックしてるからな

龍・漫画も読んでるらしい

作・感想一つでホンとテンション変わるわ～

## 第九話 仇と小猿に

今俺は双花を護衛として黄祖を孫県に引き渡しにきている

なんでも双花の父親は孫堅に仕えていたものの、自分は幼く、仇ともいえる人物が入り、そいつに常に突つかかって不協和音を生み出しかねないからこつちに来たと聞いている

陽里、明里は内政を整えるために残した…ちなみに翳に命じて既に書簡を届けて、返事ももらっている。まあ「はい」というのは期待していたが「早く連れてきてね、出ないとあなたも殺しちゃうかも」と書かれているのを見たときは双花と一緒に顔を引きつらせたな

内政の様子は良好だ。元々紫苑も紫苑の旦那さんも善政を行っていたのが大きく、またまだ存命のころに俺のことを聞いていて「うちに来てくれないかな~」とぼやいていたらしい…

その紫苑さんは俺達には大きな助けとなつていて。なにせ土地を治めた事がない俺達は暗中模索もいいところだからな…紫苑がやり方を端的にかつ分かりやすく説明してくれなかつたらまだ黄祖を連れて行くことはあらかここまで余裕も生まれなかつただろう

そして俺がまず取り入れたのは町の警備を行う警備隊の設立と町民の意見を直に聞ける日安箱の設置だ。警備隊は軍に入りたいが試験に合格できなかつた者達で構成されている。ここで経験をつみ、各部隊の分隊長貴下の部隊長の推薦があれば軍に入れるという条件もついているため、反対するものは運良いいなかつた。

日安箱は江戸時代、米将軍と呼ばれた徳川吉宗の真似だ…年号的

には先取りといったほうがいいかもしないが……それは各地区的警備隊の詰め所と城の門近くにある。警備隊のほうはまだ難しいが城の方は既に機能している……文字書けるのを増やすために警備隊でも文字を覚えさせたりしているが……いかんせん時間がかかるな……気長に待つしかないか

「む、思い出していたら孫策殿がいる城に着いて玉座の間にいる……さて、謁見といぐか

「始めてまして孫策殿、俺の名は姓を珀、名を武、字を麒麟といい、雷將軍とも呼ばれている」

「ええ、私が孫伯符をよ。黄祖を連れてきてくれて礼を言つわ」

「周公瑾だ……雷將軍の噂はここまで届いている。私としても黄祖を連れてきてくれるとは……少し驚いている」

「まあ、ただでもうえるとは思つていらないんだが」

「ええ……でも「安心してくれ、小猿の仲間は俺の影に食われた」それならいいわ

「まあ、こつちの要求は黄祖の身柄を引き渡す代わりに手を組んでくれないか、だ」

「……」

「商人は将来性のある武将に投資する、それと同じ事だ。小猿は虎には勝てん、猿同士なら分からんが、間に霸王がいる……まず無理だな」

「そうね……眞琳もいいと思うでしょ」

「ああ、しかし、そひひに良い事は殆ど無いぞ」

「やうかな……俺はいざれいい」とあると黙つてゐる

「あら、あなたも勘がいいの？」

「多少な……孫策殿には絶対に適わないだらうが……」

「あら、嬉しいこと言つてくれるじゃない……それとそつちの子は似た人を見たことがあるんだけど」

「かつて孫堅様に仕えていた凌操が子、凌統です」

「凌操の……どうしてひきに来てくれなかつたの？」

「甘興霸……」

「……」

「仕えたかったです……母からは常々孫堅の縁は家族の縁と言われてまし……しかし孫策軍に彼女が入つたという事は彼女も家族、家族を殺してしまいかねませんので……」

「そう……私達も黄祖を恨んでるからその気持ちは分からなくも無いわ……」

「しかしどうしてもう考へた……いや、考へれるよくなつた？凌操

殿はそこまで思慮深くは無かつたと黙つが……

「はい、母の仇を討つために訓練している途中に龍鳳……珀武様にお会いして、諭されたのです」

「なんて?」

「復讐もいにが親が本当に望んでいた事を忘れるな、ヒ

「……ナウフ……」

「はい、ですがやはり勝手ですが、この辺の気分は悪くなり、それが軍への悪影響になると思いましたので、この軍にはござりませんでした……」

「いいわ、あなたがそんな風に考えておるのひ」

「しかし珀武殿はず、」

「お褒めに預かり光榮だね」

「じゃああなたと手を組む、秘密裏の同盟とこいつ形でね」

「ああ、あなた方が一人で立てるようになつたら、から正規に使者を派遣するよ」

「ええ、まだ時期じゃないから時間はかかるけど……楽しみにしててね」

「ああ……有意義な時間だった」

「ではまた会おう」

「ああ、双、いくわ」

「はい……」

そして孫策達のところから私の足で袁術のところに向かい、近くに赴任してきましたので仲良くしましょ、といった感じの事を献上品と一緒に言つておいた

献上品は当然蜂蜜、しかも俺が洛陽にいたころに作つた純度の高い奴で大層お気に入りだつたそで…俺が元を造つたと聞くとしつかりと食いついてきた

条件として孫策たちをもう少し優遇してやる事を条件としてやつたら周りの諫める声を無視して承諾した…幸運だつたぜ

まあ優遇と言つても月に一度か一度家族で会わせてやつて欲しいと言つものだ。変わりに蜂蜜を遅くとも半年後から月一で届けることを約束した。半年後としたのは条件的にその位にならないと無理な事と有難みを教えてやろうとこうことぐらいかな…

それともし俺達のしか買わないのなら持つてくる量を予定では普通の壺二つだが三つにすると言つたらこれは側近の張勲すら同意した…よっぽど気に入つてんだな…てか貴重な感じだから三つだと多分袁術が毎月消費する量の蜂蜜と同額飛ぶぞ…

まあ消費量だけで見てんだろうな…こいつは足元見てやるが…それと俺の考えはそばにいる双花には筒抜けのようで苦笑していた…

そして見ていただけだと袁術はただの子供だが、ちゃんと恩を売れば返してもくれるから、こっちとしては孫策に倒された後、もし生きていたら保護してやってもいいな、とまで考えたところで謁見を終了させ、今度はもつと大人になつた袁術様とお会いしたいです、とつい微笑んで言つてしまつたが運良く浅い意味で取られたようだ。

もつともちよつと頬染めていたのは氣のせいだと思う、てか思いたい…これで善政するようになつたら孫策達が不利になるじやねえか…もうちょっと考えて行動しや良かつたよ畜生…

それで帰つてきた俺達の元にあつたのは大量の書簡と民からの陳情に加え…

「長安へ？」

「はい、両皇太子妃が将来どちらが帝位についてもちゃんと統治できるか見ると書簡が多めですが…」

「実際は勢力争いから守るために董卓さん達の策ですが…」

「それを期と見た十常侍が手の者を送り込んで変な風に教育しようとしています」

といづれくも悪くも良い情報とは言えないな…ただ靈帝様も俺の事は覚えていらっしゃるだろうが…長安は位置的に微妙だ…もし何かあつたら、すぐに駆けつけられると言つわけではないから…そこまでが俺が離れていた間にあつた事の報告だ…終わり俺は居室に戻り…

「一応警戒はしておくか……陰……」

「……………まあ、旦那」

「長安へ行つて裏から両皇太子妃を守つて欲しい」

「分かりやした、ですが……」

「月達の方は影に頼む……翳は伝令役とする。そして他国他軍の細作  
つぶしも平行して行つてくれ」

「もううん……」

「ああ、これに関しては特別報酬も付ける……だが俺の話を覚えてい  
るな」

「大体一、三年掛かるんすよね……その分」

「ああ、上乗せする、全員分な」

「分かりやした。大船に乗つた氣でいてください」

「頼りにしてくる」

「陰がいなくなり、俺は仕事の処理をしていくが……結構少ないな……  
本当に俺じゃなければならない仕事しかない……それ以外は恐らく全  
員で処理しているんだろうな……と思つたら

「……………オオオオ！」

「何事だ！？」

「はつ……ビハヤリ！ 楽進副隊長達の部屋のまつで爆発があったようです！…」

「少し様子を見てくる… 着いてきてくれ

「了解しました」

兵を伴って嵐たちのところに急行したら怒髪天をつく状態としかいえない嵐と完全に延びている沙和と真桜の姿があり…

「一体何があつたんだ？」

「あ、隊長… 実は」

嵐の話では沙和も真桜も仕事をためており、今日までに片付けておかなければならぬのがあつたにも関わらずつい先ほども町に行こうと つまりサボりか していたため嵐の堪忍袋の尾が切れたから、が真相のようだ… 僕は兵に他の者に心配する必要は無い事を伝えるように言い、沙和達を強制的に復活させて話を聞くと…

「沙和、真桜、お前ら明日までに嵐の分も片付ける、出来なかつたら明後日から城から戦以外で出るのを禁止する。それと来月の給金一割五分減だ。嵐、お前の気持ちも分かるが部屋を破壊するな… 来月の給金一割減だ、いいな」

「分かりました」

「了解なの〜」

「分かつたで…」

「覇気をこじませたので流石に反抗する気は無こよつだ…元々させない為に放ったんだからな…慣れられん方法も多少考えるか…仕事終えたら

「では俺も政務に戻る。何か分からん事があつたらこい、近くには陽里も明里もいるからそこでも良い。あいつらは優秀だしな」

「分かりました」

「そう言つて俺も戻つて政務を再開したが…やはりあいつら量減らしてるな、もう終わつたから、ちよつと行つてみるか

「陽里、明里」

「龍鳳さん」

「どうしたんですか?」

「いや、意外と仕事が少なかつたからこい」でせば処理しているのかと思つたんだが…」

「私達じゃなくて紫苑さんですよ」

「本当か? なうひよつと行つてみるか

「でもそれでも龍鳳さんとあまり量変わらないんですよ」

「やつなのか？ならその理由もあわせて聞いてくるか

とこくわけで俺は紫苑のいる部屋へと移動するとまだ仕事をして  
いる紫苑がいた

「紫苑、まだ仕事中か？」

「ああ、御館様ですか。何用ですか？」

「俺の仕事の量が少ないからどうしてなのか聞きたくてな」

「あら、そんなことですか…実は私の事情を知った文官たちが頑張  
つてくれてまして、そのままだつたのですよ」

「なるほどな…夕方ぐらには終わってるのか？」

「ええ、全員」

「やつか…給金とかは？」

「元の通りで満足していました…」

「せうか、ならもうつちよこ国庫を潤わせる方法を考えたほうが良い  
な」

「確かにそうですね…今ある兵糧を売り買いするだけじゃまだ足り  
ないですからね」

「ああ、それから「お母さん」お？」

「璃々、まだお仕事終わって無いからもしあつと待つてて

「え~」

「なら俺が面倒を見てよつか?」

「良いのですか?」

「紫苑のおかげで仕事量が減ってるんだ…この位しても罰は当たらんぞ」

「そうですか…ではお願ひします」

「分かった。璃々ちゃん、ビニ行こうか?」

「町に行きた~い!~」

「なら行くか

「気をつけてくださいね~」

璃々ちゃんを連れて町へと来た俺…紫苑の頃も善政で俺の時もそ  
うだが、俺の組織した警備隊により犯罪がさらに減少したのでどん  
どん商人とかが流れてくる。それに農具のほうも真桜のおかげで原  
案しかなかつたものが試作品として作ったのに完成品と遜色が無か  
つたためすぐに農民に渡したりした

他にもここの料理で再現できるものを極力再現すると町の料理人  
達が飛びついてきて、既に幾つか町に並んでいる

また最近は城壁の防御力も上げようか考えているがどうせじばらくしたら離れる気がしたから大体の砦とかと同じぐらいの防御力にするにとどめた

そんなこんなしているうちに年月は過ぎ去つていき…遂に朝廷と言つか十常侍も何進も重い腰を上げ、黄巾党の討伐命令を出したのだ…これから始まるな…乱世が…

俺の手の届く範囲が俺の国…だから必ず守つてみせる…そう城壁の上で町を見ながら決意した

## 第九話 仇と小猿に（後書き）

作：孫策達の出番少なかつたかな？

鳳：まだ良いんじゃね？

龍：前回のガチ百合霸王様より俺は孫策のほうが好きだな

作：董蓋もだそうか迷つたけど…袁術の下にいるんだから無理だろうと思ひ周瑜だけにしました

鳳：周瑜の病はどうするんだ？

龍：よくあるように華佗だらつ

作：そっちについてももう大丈夫。ただ袁術は露骨だつたかなーと  
ちょっと後悔

鳳：まあ子供だから大丈夫だらう、と俺は開き直つてゐる

龍：璃々ちゃんにもなつかれたな…

作：紫苑とも仲良くなつたし…次回から黄巾討伐編に入ります

鳳：ちなみに紫苑、凪、沙和、真桜にも俺の秘密は教えてあるぜ

龍：そういうえば本文中に無かつたな…でかここで言つのもどうよ

作：現在で知つてゐるのは珀武軍（十人）、董宅軍（六人）、劉弁、

劉協、桃香、桂花、白蓮、朱里に離里、後は盧植水鏡両先生だけか

：全部で二十五人

鳳：全部で五十人以上…ちなみにこの中でフラグたつてる人数は？

龍：えーと…多分十六人かな…

作：沙和、真桜、紫苑はまだ立てて無いからね、半分しか

鳳・龍：いやそれでも早いって

朱：はわわ、誤字脱字報告に感想、意見待つてましゅ！！…咬んじやつた…後批判は極力やめてくださいね…また咬んじゃつた

## 第十話 黄天の終焉…かな？（前書き）

作・タイトルのつけ方がどう考えても一定じゃない事に気づいた

鳳・いまさら漢バリバリだな

龍・これはアニメ沿いじゃないと無いからな

作・アニメ沿いか…作ろうつかな？

鳳・龍・無理だろ

作・乙女大乱は全話見たぞ！！

鳳・龍・最初から全部見ろよ

作・リリなののぼりはまたとまるかも

鳳・龍・お前本当に良い加減にしろよ…！

## 第十話 黄天の終焉…かな？

黄巾本隊討伐の勅命後、俺達は本隊がいるところに向かってまっすぐに進んだ。何せ居場所わかつてゐるからね。途中で妨害もあつたが全て山賊まがいの連中であつたため即座に叩き潰した

「しかし多いですね…何の恨みがあるんでしょうか？」

「自分達の食い扶持が無くなるという事位分かる頭があつたという事だ、械那」

話しかけてきたのは黄月英、真名は械那だ。見つけてきたのは真桜、町に出て機械の部品とかを探してたら偶然会い、意氣投合し、更に械那が俺の事を知つて仕えたいと言う事で今こうしている…。のだが唯一の欠点がある…それは

「早く着いて使いたいですよ…新しく作った衛車…！」

この実験好き（？）なところだ…人に変な影響のある薬とかはまだ作つていないが俺の過去（第六話参照）を知つて作ろうとしているところがある…まずは農耕具や連弩に火薬壺、虎戦車、木牛流馬といったのが完成してからと言つてているのだが…

「それに連弩も火薬壺も虎戦車も…！木牛流馬はこの様子だとかなり良さそうですしね」

ほぼ完成の域に至つてゐる…仲間に入れて半年でここまで…このままだとこの時代より先にあるものとかガンガン作りそうだ…一応俺が消えるとかそういうことはないが流石に不安だ…

「贅沢を言えば木牛流馬一台で兵士一人分の一日の食料を運べるようにならん」後荷車ももう少し改良して欲しいな

「良いんですね～！～（キラキラ）」

「いや～嬉しいな～」

「言つまでもなくする氣だつたか…まあ俺としても糧食の心配が小さくなるのは良いことだから良いか

「といつても衛車以外は使う予定は無いぞ、あつても火薬壺ぐらいだ」

「ええ～～

「何でや～

「裏工作はしてあるからな：何人か裏切つてこっち側に来るだろつ…最善の状態だと衛車すら必要なくなると言つ状況になるな」

「そんなん～～～

「他勢力にばれんようバラバラにして持つてきた意味もなくなるやん

「そうしたのは敵にばれないかどうか確認するためのものだ…糧食隊に混ぜたのもそのためだ」

「せっかく戦場でも組み立てたり出来るかと思つたのに～～～

「せやで～隊長～」

「仕方があるまい…賊とはいえ元は民…俺が守りたい存在なのだ…彼らのうち土地さえあればやり直そつとする者達にはそういう所を用意してやれば良いんだしな」

「龍鳳さん、もうすぐ集合場所につきます」

「そうか…陽里、械那の指揮の下天幕と防柵を組み立てておけ。明里、彩燐、お前達は俺と一緒に軍議に出るぞ」

『御意』

今回連れてきたのは既に出てきた明里、陽里、彩燐、真桜、械那に加え凪と優優の俺を含めた八人。清、双花、沙和、紫苑の四人は残つてもらつた。残つてもらつた理由は紫苑は璃々、清と沙和と双花は練兵だ…今回はこれまでずつと率いてきた兵六千に入つてすぐ徴兵した五千を加えた一万一千が俺達の全兵力だが、持つてきた糧食の量は一萬の兵士が半月は過ごしていける…加えて十人単位で訓練代わりに狩りを行わせ、兔や野草を探らせてるが…凪が行つた時に熊を獲つてきて全員の度肝を抜いた事もあつたな…

「いい加減現実逃避しないで軍議の状況を見てくだしゃい…！」  
「かんじやつた」

「いや、これ見て真面目にやろうとしている奴らが凄いよ

軍議が行われている天幕に近づいたら大急ぎで帰りたくなる高笑  
いが聞こえてきたため現実逃避をしたのに…

「なあ明里、彩燐、俺の給金から特別手当出すから変わりに一人だけ行つてきてくれないか？」

「いやですよ！…あんなの居る所に行けつて！…ある意味最悪の拷問じゃないですか！…」

「主君が行かなくしてどうするんだしゅか！…」

「あれって袁家の馬鹿だろ？何進の女郎も余り会いたくないしな…仕方ない…無理やりだまら」 「龍鳳さん！…」 桃香！…「

「お久しひりです！…」

「（）の事を聞いて？」

「はい、それと…」

「桂花…」

「……」

「（小声で）一体どうしたんだ？」

「（小声で）何か男性に対して嫌な事があつたみたいですね…龍鳳さんはそんなことないと思っててもどこかやりきれなく、嫌われるのもいやと嘆つ状況感じです」

「（小声で）そうか…桂花」

「（ビクッ――）」

「何があつたか俺は知らないし、聞くつもりもない……だが、俺はお前がこうなつた原因になつた事をするつもりはない……それだけは信じてくれ……そして、もう一度お前の笑顔を見たい」

「あの……実は……」

桂花がポツリポツリと語りだす……話しあるか否かといつてころで桃香、明里、彩燐の三人が桂花を抱きしめる……

「ひどい事思い出せりやつて、『めんね』

「絶対大丈夫です、龍鳳さんはそんなことしません」

「はい、そんなことする人でしたらもういいいる人は皆そんな事されますよ」

「……桂花、これからはどうするんだ？」

「私は兄上の下で働いて良いのですか？」

「俺の方は太守になつてから何時来てくれるのかと待つてたんだが」

「私は～？」

「お前の事だからこの期に合流する気だつたんだろう？」

「ありや、ばれてた」

「わちの軍の軍勢は？」

「大体六千人かな？」

「でしたら後で率いて私達のところに来てください、手配します」

「ありがと～」

「で、いい加減行きませんか？」

「ちつ…忘れてくれれば良かつたものを」

「さつきからあそ」で曹操さんが睨んでるんですよ

そうして見ると確かに「王立ちしつづけを見てるが…

「桃香、そつちの軍の将と軍師は？」

「えつとね、関羽と張飛、趙雲さんが将で、軍師は孔明ちゃんと鳳  
統ちゃんだよ」

「分かつた、桂花はここまで一緒に来ただけか？」

「うそ」

「なり桂花、」のとを桃香の軍に伝えてくれるか？」

「はい、大丈夫です」

「なら軍議に行くか…やつたくない事もつこでにやつてな

そうじじよひやく俺達は軍議に向かつ……その時に平行して俺は『  
霸氣』を後ろに居る明里、桃香、彩燐以外を威圧するよつて撒き散  
らす……その瞬間……木々が揺れ、天幕も揺れ動く

俺はそのまま天幕へと歩き出す……この量はちょっと多いらしく流  
石の曹操殿も少し汗が浮かんでいる……

「あなた……それだけの霸氣出せたのね」

「早く行かねばならぬのだわ……正直今すぐ帰りたい。黙らせるた  
めに霸氣出したのに全く答えちゃいないのだからな」

「馬鹿だから効かないのがもね」

「……桃香、俺の武器持つてくれ。彩燐、明里、俺が切りかかるう  
としたらとりあえず止めてくれ」

『（とりあえずなんだ……）』

そうして俺達が天幕に入ると既に諸侯は勢ぞろいしていた

「遅いぞ、雷將軍」

ちなみに霸氣は効果が無いという事で既にやめている……そして俺  
に話しかけてきたのは今回の総大将である何進大將軍だ……他には袁  
紹、袁術、孫策、曹操、董卓（といつても参加しているのは呂布）  
に公孫瓚の全七軍、総兵力は約十万……とは言つても俺の軍だけでど  
うにかかるんだけどな

「申し訳ありません、準備を万全にしていたら遅れました」

「まあ良い……その分、働いてくれるのじゃね？」「

「お詫びとあれば、我軍が先鋒を務めましょつか？」

場の空気が一変する…といつても袁家だけが驚いており、他のところでは「やつぱつ」とこう感じだが…

「つむ、では頼むわ」「

「御意、それと」

「何じや？」「

「敵軍の降兵、及び捕虜や慰み者として捕まっていたであろう女性が居た場合、我々だけで取り扱つてもよろしいですか？」「

つまりは降兵、捕虜（居ないだらうが）、女性、どれも全部俺の軍で保護して後の身振りも決めさせろ、そう言外に言つたところとを分かつてこるのはやはり馬鹿ども以外か…何進も気づいてなさそうだし

「構わん、妾はそういう面倒くさいことは嫌いじゃ。主が先鋒、そしてそこで捕らえたり保護した者たちをおぬしが自由に処断すると良い」「

「ありがとう」「ん」「どうした？恋？」「

「円と詠から

「え～と、何々……何進將軍」

「何じや～？」

「呂布將軍は一いにいる間我が軍と共に行動させて欲しいことの」と  
です

「構わん、好きにせい」

「分かりました。では準備があるので失礼します。明里、彩燐、桃  
香、恋、行ぐぞ」

「分かりました。では準備があるので失礼します。明里、彩燐、桃  
香、恋、行ぐぞ」  
そつして俺達は一礼して天幕から去つていく……しかし恋のときの  
は見ものだったな……全員が口をあんぐりと空けてたんだからな…  
んで戻ってきた俺達の陣地の方からなにやら言い争つてこらぬよ  
な声が聞こえてくる…

「IJの軍に降るとこいつのか……」

「だから最初からほほほの軍のよつなものだつたのよ……桃香は最  
初からIJの軍に加わるつもりだつたのだから……」

「なんでなのだ～納得いかないのだ～……」

「はわわ……愛紗ちゃんも鈴々ちゃんも落ち着いてくだしゃい……  
かんじやこまひた」

「しかしあやつらの気持ちは分からんでもない……」

「そうですが珀武軍、大将は雷將軍・珀麒麟さん、知らぬ人も居ない大きな軍なんですよ」

「そんなことは分かっている……」

「じゃあ何が不満なのよ……」

「何も知らない奴の軍で戦いたくなんかないのだ……」

「どうやら争いの原因は俺らしい……仕方ない

「お前達、俺が珀麒麟だ」

「「龍鳳さん……」」

「「「……？」」

「お前達はお前達の主君の決定に逆らうのか？」

「「……」」

「沈黙は肯定と取るぞ。それと理由は俺が新たな主君として窺わしいのか？それとも……」

「違う……私は桃香様を王としたいのだ……」

「ほう……確かに桃香は上に立つ力がある……だが当の本人がそうなりたがつてないんだぞ」

「やつだよ～、愛紗ちゃん

「桃香様！？しかし…」

「それに言つたよね、私は最初から人に仕える氣だつて」

「ですが…しかし」

「お兄ちゃんが珀麒麟なのだ？」

「ああ」

「強いのですか？」

「龍…強い…恋も…勝つたことない」

『…』

飛将軍・呂奉先が勝つた事無いといつのは流石に驚いてるな…まあ仙人モードと「輪眼併用しないともはや勝つ」とはできんだろ？…

「ならば、試させてもらひてもよろしいかな？」

「構わない…なんなら君達全員でかかつてくると良い…出陣前だが、君達が戦闘に参加できなくとも大きく支障は無いだろうしな」

「…」

そうして俺は黒髪、赤髪、青髪の子と戦う事になつたが…俺は気づいていなかつた…この先の危険を…そして…『真の敵』の正体を

⋮

## 第十話 黄天の終焉…かな？（後書き）

作・黄巾討伐、まずは序章？

鳳・どういう感じで着てるんだ？

龍・まさか呂布は一人じゃないよな？

作・呂布は一人で三万討つたと言われてるし、龍鳳が来るという情報から詠が一人で良いと決めたんだ

鳳・いや、マジで一人かい

龍・ちなみに呂布の現在の強さは？

作・えっとね、全体でいうとこんな感じ、武官だけで、今まで出てきてる人だけな

龍鳳>恋>>>彩燐、優優、双花、清、霞、幸>桃香、紫苑、凪、沙和、真桜、孫策>白連、闘羽、張飛、趙雲、夏候惇、夏候淵、曹操

鳳・桃香つよ！…史実だと義弟達より弱かつたのに…！

龍・お前が原因だろ？…ちなみにその事実を知ってるのは？

作・龍鳳と朱里、離里の二人、気づいてるのは恋

鳳・てか恋と俺の二人組みに今出て来たの全員で挑んで勝てるのか？

龍・勝てない勝てない、阿吽の呼吸で動くつて聞いてるし

作・恋と龍鳳の組で恐らく十万の敵は壊滅できます

鳳・龍・一人当たり五万！？てか強すぎ！！

作・次回は戦闘とまだ準備段階です

鳳・裏工作の結果まだもんな

龍・楽しみにしてくれ

朱・誤字脱字報告に意見・感想とか待つてましゅーつーかんじや  
いまひた…それと自分がもらつて嫌な気持ちになるものは書かない  
でくだしゃいーーづーまたかんじやいまひた…

## 第十一話 黃巾終焉 つてまだかよー！

「さて、三人とも準備は良いか?」

「無論だ！！」

「いつでもいいのだー！」

「ふつ……」

俺が仕えるべき主にたるかどうか腕試しすると言つことになつた俺と関羽、張飛、趙雲の三人。しかし実力は氣で多少分かるのだが……桃香と同じぐらいか少し下つてところか……

「桃香と一緒に戦場に出て敵を殺した事はあるのか?」

「桃香様は我らが旗、戦場に出ても敵を倒したことはありません」

「桃香お姉ちゃんは弱そだからいつも皆で守つているのだー！」

疑問に思つてチラリと桃香のほうを見ると首をゆつくり横に振つていた……どうやら関羽達と会つてからは出ても最前線には行つてないか……まあ外見上強そうには見えないからな、朱里も離里もちょっと呆れてんぞ……あ、趙雲も見えない位置に居るから溜息ついてら……分かつてないのは関羽と張飛か……つて義妹一人かよ

「趙雲はどう思つている」

「正直に言つてよろしくので？」

「 もうひとつ… 恐らく武面で桃香の実力を正確に測つておるのを君だけだ」

「 では… 恐らく桃香様と全力で戦つたら負けるでしょうね」

「 「 なに」（えつ）……」

「 そして鍛えられたのは雷将軍殿… しかも桃香様だけでなく朱里、難里、それに荀？殿もですね」

「 そこまで氣づかれていたとはな… だがそつだと知つてなぜ告げなかつた？」

「 そのまゝが面白やうでしたのでな」

「 （仲間個性的すぎだら）… だが俺が桃香より並つてこると想つつか？」

「 正直に申しますと、全く勝てる氣がしませぬ」

「 やうか」

「 私からも質問してよろしいですか？」

「 俺の理想は理不尽に虚げられるものの居ない世界… 夢物語と思わ  
れても構わないし、矛盾にも気がついている…しかし、それが理想  
なのだ… その世に近づけるために武が必要ならば俺は振るつ

「 やうですか…」

すると趙雲は構えをとぎ、桃香たちの下へ向かつ

「星、やじつしたのだ」

「なに、桃香様の理想と殆ど変わらぬし、桃香様が雷将軍に仕える、  
ならば後は戦場で見ればよこと思つただけだ」

「（多少現実家か…いいな）わかつた、関羽、張飛、お前達はどう  
する?」

「決まつてしまひつー。」

「お前をどうひめして逆に降伏せしやるのだーー!」

「…………お前の星の言つたこと聞いてたか?」

「「嘘に決まつてしまひつー（るのだ）——」「

むつむつむ

「では……行へやー。」

「始め……。」

「「つあおおつー。」

「「つこせああああつー。」

「甘い」

振りかぶつて大上段で来るが俺は半身引いて地面に交差して叩きつけた二人の武器の交点の部分を右足で押される

「どうした、もう終わりか？」

「くつ……」

「ぬ～～」

「ああ、すまん、その状態では無理だつたな……そらーーー！」

俺は左足で下から蹴り上げると持ち上げようとしていた力も加わったため大きく隙ができる、それを見逃すわけも無く……

「ふん……はあつーー！」

「がつーーー！」

「いやーーー！」

関羽は腹に、張飛には右肩に蹴りを叩き込む……威力は抑えたと思うんだが……

「見事に気絶してんな～」

「愛紗ちゃんはしょうがないよ、鳩尾に入つてたもん」

「はわわ……相変わらず凄いです～」

「あわわ……鈴々ちゃん、大丈夫ですか～」

「まさか……一撃とは

「あなたはどう思った?」

「あの二人…弱い」

「龍鳳さん、呂布さんを一撃で氣絶させたこともありますから

「それは真か!?」

「( ノク )」

「とはいっても全力でしたから……呂布さんも相当お強いですね

「多分あなたたち三人に桃香加えてギリギリってところかしさ」

「それでも勝つのは恋だろうな……勝てる要素が見当たらん

「やうなの?兄上」

「呂布は前にあつたとき以上の強さだ……桃香も強くなってるが元々が違いますから……俺と会つ前だったら四対一なら勝てたってところだな」

「あ、愛紗ちゃんと鈴々ちゃん戻がついたよ～」

「結構早いな

「あれから氣での医療術も学んだんだよ～」

「そいつは心強いな、俺は攻撃しか出来ない…出来ん事は無いが戦場での自分への応急処置ぐらいだ」

「えへへ～」

「ここで話すのもなんだな、俺達の天幕に来てくれってか、一緒に行こうぞ」

そうして俺達の本陣の天幕内では既に他の将達全員がそろっていた

「でははじめようか…まずは軍議で決まった事だが先鋒は俺達、捕らえたり保護した連中は好きにして良いとの許可ももらつたから、例の作戦通りいける。向こうからは？」

「はい、向こうの兵糧を管理しているもの達を騙して切り詰めさせてるそうで、かなりあるやうです」

「ではそれは乗り込んだら彩燐と優優、お前達の部隊で全部確保しろ」

「「御意」」

「そして門番のほうは残念ながら…ですが中にいる兵のうち半分はこちらにつきました、判別するために我が軍の親衛隊がつけている赤布を右か左の一の腕につけるよう指示も出しました」

「分かつた、なら」ここにいる全員から名前で伝達、腕に赤布のある奴には攻撃禁止、とな。それと械那、真桜、すぐに衛車の準備を。他のは追つて通達する」

「「御意や（やつた～）……」

「それと新しく仲間になつた劉備玄徳、関羽雲長、張飛翼徳、趙雲子龍、諸葛亮孔明、鳳統士元、荀文若だ」

「劉備玄徳です、真名は桃香なので、わう呼んでください」

「趙子龍だ。私の真名は星だ。これからよろしく頼む」

「諸葛孔明です。離里ちゃん、陽里ちゃん、明里ちゃんとは同じ私塾の出身で、真名は朱里です。これからよろしくお願ひしましゅ……つう～かんじやつた」

「鳳士元です。朱里ちゃんと同じく陽里ちゃん、明里ちゃんとは同じ私塾でした。真名は離里です。私もこれからよろしくお願ひしましゅ……つう～かんじやつた」

「荀文若よ。桃香とは同じ私塾出身よ。真名は桂花。よろしく」

「ほひ、愛紗ひかりさんも鈴々ひかりさんも血口紹介しなよ

「「…………」

「まあ時間が無いから構わん。」これから配置を発表する。まず前線で城門をぶち壊し、後方援護の部隊は械那・真桜率いる工作隊及び屈率いる歩兵部隊

「 「 「 「御意」 」 」

「その後敵の及び兵糧を確保するのは先ほどの言つた様彩燐、優優、そして捕虜及び降兵は桃香と星、離里で頼む」

「 「 「 「御意」 」 」

「そしてこの作戦の肝の部隊は俺が率いる、共に来るのは関羽と張飛、それと俺の親衛隊だ」

『――』

「この采配には驚いただろうな……なにせ俺に忠誠といふが真名を預けて無い奴を共にするんだからな

「これには理由がある……が、それはこれが全て終わつた後だ。まずはこれを裏で操つてる奴を見つけ出し、倒す。それと本陣は筆頭は明里と恋、その補佐を朱里と陽里、桂花

「 「 「 「御意（ご）」 」 」

「いいか、これが終われば一応乱は終わる。元々やつらの中で外道行為をしてているのはそれを隠れ蓑にしようとしている連中、もしそういう奴らを見かけでも赤布をしている限り殺すな……いいな」

「つまりそれっぽかつたら一度手間をかける、こういう事ですね

「とはいっても彼らがそのような輩に声はかけないでしょ……」

「優優の言つとおりだな、とにかく、配置は以上、後は大將軍の攻撃命令を待つだけにしておけ、良いなー！」

『御意』

そうして全員が天幕から去つていい、俺も親衛隊に告げると兵から孫策と曹操が来たと報告を聞き、天幕に案内するよつて俺も天幕に戻ると、すぐに兵が一人を伴つて現れた

「う」苦労、下がつて良いぞ…で、明日の先鋒に加えろとか下れ、だつたら帰つて母親の乳でも飲んでろ、邪魔だ」

「あら、いきなり邪険に扱つわね」

「ほんとね」

「おおっぴりな偵察に出す物は何も無い」

「やつ…ま、要求はわつとあなたが言つたものじゃないわ」

「同盟か？正直に言え、俺の軍の強さの秘密が知りたいと」

「ヤ二二までばれてたのね」

「もつと言つてやうか？」

「あら、もしかして全部氣づいてるの？私達の目的

「氣づかんのは袁家の馬鹿…といつても袁術のほうは何か考えてたが…まああんまり氣にするような事じゃないな。白れ…じゃねえ、

公孫讚は田和見つてとひかね

「ナヒよ。あなたのところは軍だけじゃなく治安もこゝ、洛陽や長安と比べても遜色ないつて報告に拳がつてるもの」

「まあ、不可侵程度なら結んでもやるが」

「それ以上は望まない」とことね

「当然だ。俺から破る時は開戦の一週間前にはその午を届けろ、それで良いか?」

「ヒツモトの条件で良いわ。一週間前に破と宣戦布告をするわ

「ヒツモト

「わうか、なまつ良いだらう。入り口まで送りやがれ

「あら、そこまでしてくれるので…」

「俺はお前らをかつてゐ…しかし、俺の軍は賊崩れもこゝ…お前達に恨みを持っている奴が殺そつとする可能性もあるだらうからその護衛だ」

「あひ、雷将軍自らが護衛なんて、うれしい事もあるのね~

「あ、俺に襲い掛かる馬鹿は居なこからな…前は居たけどあひめさせたし

「へえ…」

その後は簡単な雑談をしながら俺の陣の門前に来ると

「そういえばあなた、『天の御遣い』のうわさは知ってるかしら」

「ああ、冀州…袁の最馬鹿が保護した餓鬼のことだろ、報告には聞いてるがする前と後で変わったことといつたらその馬鹿がいたく気に入つて第一の側近にしたことと、自分の婚約者にしたつて事ぐらいだろ？？」

「ええ、それで袁術は大荒れよ」

「お前も大変だなあ…何か変わったことでも？」

「ええ、実は最近そいつが討伐に出ると冬でもないのに氷が出来たり、いきなり炎が出たりするって言うのよ」

「私も聞いたわ…何でも刀から氷の龍を出したり、炎を出したりするって」

「へえ…面白い情報を聞いたな…情報量代わりにあとで治安対策の政策を同じものだが渡すよ。もし他にもあつたら教えてくれ…今まで放つて置いてたからな」

「無警戒つて…まあそれもそうよね…邪魔したわね」

「それじゃね～」

「ああ…」

ようやく来たか……刀のほうも分かつた、氷輪丸と流刃若火か……負けはしないだろうが今のままだと良いとこ引き分けだろう……もつと鍛えないとな……それとお礼の品、早く用意しとくか

俺が例の品を両軍に送り届けた後、大將軍から攻撃決行は明朝との連絡を聞き、全員に通達……ああ、楽しみだ

第十一話 黄巾終焉 つてまだかよー！（後書き）

雑・誤字脱字報告に意見。感想とかいろいろ待てましゅー……「う、かんじやった

## 第十一話 黄巾党、壊滅かのじよ（前書き）

作・今回からタイトルはアニメ風にしてみたよーー！

鳳・これならまだ楽そつだな

龍・といふか劉備の配置おかしくない？

作・（前話を読んで）確かにちょっと変えるか

鳳・龍・えらいあつさりだな、おい

作・OVA2結構面白かったし、三国伝要素も入れたいからね

鳳・龍・じゃあ最初からそう書けよーー！

## 第十一話 黄巾党、壊滅するの」と

明朝…俺達の軍は既に展開を終りし、後は命令を待つばかりとなつた…

あの後編成を見直し、軍師陣と相談した結果桃香は俺、関羽、張飛と一緒にくることになり、そこには恋を入れた…まあ張三兄弟の相手をひかむにしちゃうほど良い…と思つたので特に反対する事は無い…

「で、まだなのか?」

「完全に旦が昇つちやつたらあまつよくな」

「まああいつらは鶏の鳴き声の変わりに衛車の激突音で旦え覚ます  
だろうがな」

「…………」

ん?桃香の顔が青ざめてる…あ、そつか。私塾時代起きたのが遅いと俺が容赦なく鍋鳴らしとか食らわせてたからか

・鍋鳴らし、それは字の如く鍋の底をお玉等で叩いて鳴らす事…威力は絶大でくらつた者は一刻ほど物事が聞きづらくなる シヤ作者

ちなみにここの連中の内、食らつた事無いのは関羽、張飛、星、凪の四人…後は留守番してる紫苑と璃々ぐらいか…他の連中は何だからんで最低一回は食らつてゐし、回数重ねることに俺も容赦しなくなつてくから必然的になくなるんだよな…お

「伝令！…何進將軍から攻撃命令が出ました」

「よひやくか…攻撃開始の銅鑼を鳴らせ！…攻撃開始だ…！」

『御意！…』

銅鑼が鳴り、その後すぐに械那、真桜特製衛車が敵砦の門を攻撃し

ガオオオンッ…！

物凄い音が響いた…この威力は予想しておらず、本人達も驚いているのだろう、動きが止まって…いや、俯いて肩が震えている…ありや恐らく

「やつたわ！…想像以上の威力よ…！」

「せやせや…これもっと改良してどんな門でも一撃で壊せるようになしたいわ…！」

…戦場でする会話じゃない…それ以前に兵達は音の衝撃から未だに立ち直っていない…前衛の工兵陣を除いて…しかも一撃でもはや門は半壊し、門としての機能は無い…そこに

バツ「オオオン…！」

…発射がぶち込まれ門が『壊れる』…文字通りに、見事に、残っているのは蝶番の周りだけ、それ以外の部分は無い…って廻達まだ呆けてるじゃないか…！

「前衛…中軍…攻撃再開…！…賊どもが呆けている隙に攻め入れ

「…早く制圧するのだ…！」

俺の指示で呆然とした状態だったのにすぐに動き出し、俺達もそれに連なつて皆に入り、張三兄弟を探していると、明らかにおかい三人組が居た…こいつらか

「お前達が張三兄弟か？」

「その通りだ」

「手配書そのままの容姿だな（こいつらが裏工作したんだが）」

実際は張三『姉妹』なのだが彼女達を保護するために陰、影、翳の三人に言つてこいつらをそそのかし、三『兄弟』にして彼女達を保護しやすくしたのだ…そこ、あくどいとか言つなよ、約束を守るためになんだ…彼女達はいろいろ使えるしな、主に金策とか金策とか金策とか、後徴兵

「お前達は何者だ…！」

「雷将軍・珀麒麟」

「その部下、劉玄徳…！」

「その義妹、関雲長…！」

「同じく、張翼徳なのだ…！」

「う、雷将軍…？？」

「飛将軍と共に五万の軍勢を蹴散らしたって言つたのー?」

「五万じやない、七万だ」

「…………え、つ……つ……」

実際は六万五千で、こちらも二万ほど率いてたのだが…俺と恋が先頭で突っ込み、撓乱して混乱したところを兵達が明里、音々音の指揮の下倒したって言つのが真相だが…見ていた者達からすればあいつ風に感じるんだろうな…

「わあ、どうす…むひ…桃香、関羽、張飛、二郎は任せせるわ

「しまつた!…」

「あつ…」

俺が周りに他に誰か居ないか探すと何人かが桃髪の女性、左側で髪を止めた女性、眼鏡をかけた女性をどこかに連れて行こうとしているのが見えた

「龍鳳さん、あの子達を!…」

「分かつていい!…」

「行かせん!…」

「邪魔はさせません!…行くよ、愛紗ちゃん、鈴々ちゃん!…」

「はー!…」

「ねつなのだ……」

桃香の言つ事は聞く、か…俺と桂花の関係と似てるな

桂花は龍鳳が信用かつ信頼している人の言つ事は聞きますが、それ以外の人の言つ事は聞かずに毒舌を放ちまくります（男女関係なし） b y 作者

判断基準は龍鳳が真名で呼んでるか否かです b y 作者

横目で戦闘に入ったのを確認して俺は三人の女性の下へと向かった

Side Change

桃香

龍鳳さんにあそこに向む女性達を助けてもういためにも、私達が張三兄弟を抑え、うつぶ、仕留めなきや…！

「愛紗ちゃんは右側、鈴々ちゃんは左側の人をお願い…！」

「はつ…しかし、大丈夫ですか？」

「桃香お姉ちゃん、あんまり強そづじやないのだ」

「人を見かけで判断しちゃだめ、いつもそう言つてるじゃない

「…………分かりました」

「危なくなつたらいつでも言つのだ…！」

「愛紗お姉ちゃんと鈴々ちゃんもね…！」

そう言つと私は張三兄弟の真ん中、恐らく張角さんだらう、に靖せ  
王伝家いおうでんかを構えて向かつていく

切落、左斬上、胴と三連撃を出すなど防がれる…普通にせつちや  
うとやつぱりまだだめか…なら…！

私は氣を体に充満させて、体の細部に行渡らせ、そこから攻撃を  
再び繰り出していく

ここの状態では一撃一撃の威力は先ほどの倍にはなつてゐるから、  
相手の人の顔はゆがんでいくけど…

「なめるなあ…！」

「うう…でも…！」

相手の人はもう一つ武器を出してくる…じつやら二刀流だつたみ  
たいだね、こいつにとき戦場に出ても有名じやないと嬉しいな

「龍帝剣…！」

「…」

「二刀流なのはあなただけじやない…！」

「へ…」

「遅い…」

動搖した事で動きが鈍る……そこを狙つて斬撃を加えていく……そして相手は二刀流の利点を上手く生かせていない……隙が大きくなつた……今だ！！

「星龍斬！！」

「なつ……」

星の軌道で靖王伝家と龍帝剣を重ねて動かし、相手を切り裂き、首を切り落とす……

「　　兄者……」

「愛紗ちゃん、鈴々ちゃん、今だよ……」

「はああ……」

「つづやつや～～～～！」

「敵将張角・張宝・張梁、劉玄徳と」

「関雲長」

「張翼徳が討ち取つたのだ～～～！」

「勝ち闇を上げて～～！」

『おおおお～～～』

「そしてもう戦つても無意味です～～！大人しく降参してください～！」

！」

私がそういうと戦意が喪失したのか皆次々と武器を手放していく  
…これで終わり…かな

Side Change

Side 龍鳳

俺は本物の張三姉妹を無事保護していた

元々陰達に彼女達の側近のよつた事をしていた波才、馬元義、張  
曼成の三人をそそのかせて張三兄弟の名を名乗らせ、本人達はただ  
仲間などを集めるための道具にさせる、それなら文句はつけられな  
いだろうからというものだ…ただ彼女達は今後本名が名乗れなくな  
ってしまうが…

戦闘らしい戦闘も無かつたな、偶然俺（が率いた部隊）と戦つた  
事のある奴が護衛（？）だったの俺の顔を見ると一、三人いたが  
蜘蛛の子を散らす如く物凄い速度で全員逃げていった…

そして俺が雷将軍である事、陰達に頼まれて保護しに来た事を告  
げると簡単にについてくれた…なんでも少し前に陰から手紙で俺  
が保護してくれる事を伝えておいてくれたようだ…手間が省けたし、  
追加給金の額ちゃんと考えないとな

それで今はその三人を連れて天幕に居るんだが…事情を知つてい  
る奴らはともかく、桃香と桂花の視線が痛く顔が怖い…そして星、  
その笑顔は『何かたくさんでます』と宣言しているようなものだか  
らやめたほうが良いぞ

「兄上、彼女達は誰なんですか」

「あいつらに良いように利用されてた子達だ。保護する事にした」

「どうしてですか？」

「そのことでしたら」

「私達から説明します」

明里、陽里が

- ・彼女達は旅芸人で歌で聞いた人を魅了する事ができた
- ・それに目をつけた今回の首謀者が彼女達を拉致
- ・さらに彼女達の名を奪い自らの隠れ蓑にしようとした
- ・だけどそれは真実を知る者達を下したため俺の知るところとなつた
- ・そのため彼らと協力して助けて保護する事となつた
- ・といった事を説明すると、桃香達の顔も元に戻っていく

「そういうことだったんだ」

「兄上らしいですね」

「まあな……で、君達はこれからどうする……ああ、もつ名は名乗れない、張角、張宝、張梁は世間的に既に死んでいるからね」

「じゃあもう真名しか名乗れないの？」

「ではその名を言つてください」

「天和です」

「ちーは地和だよ

「人和です」

「君達は旅芸人だったが、今回の乱で活動しても政府から危険視され、下手に活動するとつかまる可能性がある」

「何で！？」

「君達を使って仲間を集めていた事は既に周知の事実となっているのだ、ゆえ、『もしかしたら』というので官軍が動く可能性は高い」

「そんなー、ちー達はただ楽しく歌つてただけなのにー」

「…すまん、皆。俺と彼女達だけを残して外に出てもうえるか」

「…わかりました、でも危険な事はしないでくださいね」

「善処するさ」

そうして全員が出て行つたところで俺は彼女達に知つていてこれを全て告げた：

- ・君達が大陸が欲しいと言つたことを拡大解釈して追っかけが蜂起したこと
- ・そして賊まがいのが増えてもそれをとめよつともしなかつた事
- ・更に無視して自分達の欲望のままに活動し続けた事

それら全てを…

「全部…知つてたんですね」

「元々周倉の奴との約束でも会つたしな」

「知つてゐんですか！？」

「俺の部下で、主に情報収集をやらせてる、後は今回みたいな搅乱だな」

『アラビア文書』

君達を確実に守るような事だな」

「彼らに私達の名を奪わせたのは私達を守るため、という事ですね」

「そうだ、運良く君達は官軍のほうには名しか知られていない。そ  
こを逆手に取ったわけさ」

「十九」

「で、君達に提案がある」

何々一?

「これから暫くの間 大体一年ぐらいか 歌う」とは出来ないが俺の庇護下で安全無事にすごし、しかも歌えるようになつたら援助される道か、この後すぐ自分達だけでやり直すか、どっちを選ぶ?」

「そんなのやり直「姉さん待つて」なに人和」

「…前者のほうは絶対なんですね？」

「付き人というか護衛もかねて影、廖化をつける、他にも条件は無いわけじゃないが、そこは最低限保障する」

「ならあなたの庇護下に入るほうを私は選びたいです」

「ちょっと人和……なに考へてるのよ……」

「そーだよ……今すぐやり直さうよ……」

「さつき言われたでしよう……私達は警戒されてるの……今すぐやつたら捕まるかもしれないのよ……でもこの人の庇護下に入ればそうならなくなるし、雷將軍って呼ばれてるんだから、他の人たちも下手に手出しさしてこない……」

「でもでもこの人が裏切つたら……？」

「裏切るぐらいなら周倉たちを仲間にしない、賊として処理した」

「ほら」

「姉さんはどうなの!? 今すぐやり直したいよね……」  
「…………」

「まあ、今すぐ決めるといったわけじゃない、それに明日が明後日には洛陽に向かう。帰り道の途中にあるんでな。そこまでに君たち三人で話し合つて決めてくれ……誰か……」

「終わりましたか?」

「一応わな、彼女達を天幕に」

「はい」

凪に連れられ去っていく…個人的には前者を選んで欲しいが…後者を選んだら洛陽においていく…人和の奴は賢いから良いが上二人はダメダメだな…

さて、この選択が吉と出るか凶と出るか…それは天のみぞ知るか

## 第十一話 黄巾党、壊滅するの!?（後書き）

作・黄巾編一 応終了！！

鳳・本編は終了か、この後はどうなるんだ

龍・複数人で劉備や荀?の時みたいなのをやるんじゃないかな?

作・面子は優優、清、双花、彩燐、明里、陽里、紫苑&amp;璃  
々と白軍だけで七つ、そして董卓軍は恋と月、他に梅芳、桜蓮、後  
は朱里に雛里に白連…最低でも十四

鳳・絞つたほうが良いな…殿下達は抜こつ

龍・再登場するまで一番長いからな

作・でも十一…ちょっと短めで四人ずつで行けば良いか

鳳・桃香達は入れないんだな

龍・もう少しつってるから除外されたんだろうな

作・時間があればちゃんと書きますよ

星・誤字脱字報告に意見・感想など待っておるが。ふむ、やはりメ  
ンマホー

## 第十二話 龍鳳、新たな地位を得るのJET（記書き）

作・台本書きつてやつぱだめなのかな

鳳・誰が喋つてゐるのか分かり易いと言えば分かり易いが…

龍・まあ見栄えはあんまり良くないね

作・批判は一回…全部直すか

鳳・台詞量少ない会も多かつたから手早くいけるんじゃないかな?

龍・まあがんばれ

## 第十二話 龍鳳、新たな地位を得るの」と

「珀麒麟、貴殿を擁州州牧に任命する」

黄巾討伐して早二週間、全員連れて俺達は南軍に戻ってきた

張角達を討ち取ったのが大きく影響し、なおかつ靈帝が俺の事を梅芳、桜蓮の教師で心を虜にしている事も知っているのだろう。…じやなきや本人たちが居るところに赴任しろとか言つてこないはずだ…多分…大丈夫だよな？

ちなみに朝廷からの使者は言つだけ言つて印を置くとさつさと帰つていった

また天和達だが洛陽までの道中で桃香達が会いに行き、事情を聞いた後説得したため、俺達に付いてくる事になつた。…決定したのは洛陽に着いて俺の人気というか通り名を聞き、恋が飛將軍というのを子つて決めたようだ…

それと関羽と張飛もあの戦いで俺の事を分かつてくれたのか俺に真名を預けてくれた。

そして今は俺の配下の将、軍師を全員集めて事の次第を説明と俺自身のことを説明し終えたところだ

「まさか…」

「私も聞いたときびつくりしたけど事実だよ、愛紗ちゃん」

「はい、ですが、これだけの案件を見聞きすると逆にそりだと考えるほうが納得いくんです」

「そして主、擁州の州牧になつたのですよね、これからはどうするのですか？」

「まずは引継ぎと引越しの準備、これは紫苑を中心にやつてくれるのか？」

「大丈夫です、ですが一つ問題が…」

「何だ？」

「この治安になれた後、民達が別の人との治安になれるのかという不安が…」

「それも俺は感じていたから…彩燐」

「はっ」

「この後書状を持つて洛陽に行つてくれ。月達の助力をえて俺達が擁州に南郡の民達を連れて行く許可を取りに来てくれ」

「分かりました、お任せください」

「しかし、糧食のほうは大丈夫なのですか？」

「それに関しては問題ありません。前回の戦で奪つたのと元々集めていたものもあわせてもし全員付いてくるとしても一週間は持ちます」

「それに隊で持ち回りで行軍中に狩を行わせたりもしますから何とか持つはずです」

「しかし不安は尽きぬな……よし、ここに次に来る奴が最低限過ごせる分だけ残し、後は持ち運ぶぞ、金とかは全部糧食の購入に使え、それなら余裕も出来るはずだ」

「御意」

「軍部は優優、清、双花、警邏は凪と沙和、兵器系は械那と真桜、糧食は桂花、明里、陽里、政務は朱里、雛里、桃香、俺、愛紗と鈴々、星は紫苑と共に軍部、警邏、政務の手が足りてないとこの手伝いか今まで率いていた軍をまとめておいてくれ」

「では解散、全員、頼むぞ」

結果としては準備から出立まで一月かかつた。準備開始して二週間目の半ばで彩燐が許可をもらつて帰つてきて、そのお礼の使者を立たせると同時に民達に高札を掲げて告知したら八割強から九割弱が付いてくる事になり、その護衛のための配置などに時間がかかつたのだ

それから付くまでは何も問題は無かつた…わけも無く、途中で将の実力を見せあう兼心労発散のための簡単な大会を開いたのだが…

今まで俺の鍛錬を受けていた連中の強さが半端なかつた…四日に

一回という配分で行つたのだが、準決勝の時点で残っているのは基本的に彩燐、優優、双花、清で、時折凪と紫苑が誰かと変わった具合、沙和、真桜、械那はどちらかと言つと指揮型で自ら戦場に赴いても敵陣に切り込むことは少ないし、愛紗、鈴々、星の三人は入つたばかりだから…でも凄く悔しそうにしていたためちゃんと手ほどきと鍛え方を教えた

手取り足取り教える必要もあつたため密着したら愛紗はかなり顔を真っ赤にいしていたが…その時を偶然見た桃香、桂花、凪の顔が半端無く怖かつた…

加えて星はそれでからかつたり弄つたりとしてきたから、逆に誘惑するようにしてやつたら凄く困惑していたな…自分でやるのは良いがやられるのには免疫が無いみたいだな

到着までは大体一週間半だったが、大きな問題は無かつたな…うん、なかつた。

出発して一日目に行つた大会の後愛紗に修行をつけた後桂花、桃香、朱里、離里、明里、陽里、優優、清、双花、彩燐、凪、紫苑が俺の眠つている天幕にこつそり忍び込んできた事なんて無いつたらない

「と、おもつても無かつた事になりませんよ、主」

「心読むな、星…璃々ちゃんいなかつたら毎日だつたんだぞ…」

そう、紫苑のいないところで璃々ちゃんを上手く買収（といつてもこの時代で作れるお菓子をあげただけだが）して一緒に寝たから襲われるのだけは避けられた…といつても翌朝璃々ちゃんをはさん

だ反対側に眠つていたが、まあそれぐらいなら別に良かつたのだが……

「早く璃々ちゃん見たいな子が欲しいね、なんて言われた時はかなり動搖したけどな」

「まあ頑張つてぐだされ、としか言えませぬな」

「とは言つても今すぐは少し待つて欲しいかな、まだ暫く戦は続くからな……だから子をなすのはそれが落ち着いてからだ」

「子をなす事自体はやぶさかではない、と?」

「無論だ……俺はこの時代に生きる人間だ……天の御遣いとやらとは違つてな、だからこそ自分に好意を持つてくれてる、愛してくれてる奴には答えたいのさ」

「では私の様な者や愛紗の様な焼餅焼きでもですか?」

「当然だ。お前はちょっと素直になれぬだけで、焼餅はいわば嫉妬、そしてそれは愛情の裏返しだからな……ちゃんと受け入れるさ」

「左様ですか……だそうだぞ、愛紗」

「…………まじとですか、龍鳳様……」

「ああ……しかし愛紗も星もかわいいな」

「「なつ……」」

「自分では素直に聞けないから他人を利用するとこりがな、愛紗は

星を、星は愛紗をな……」

「「…………（赤面中）」「

「そんな二人も個性的だから、俺は好きだな」

「主……」

「龍鳳様……」

「まあ俺は気が多くて桂花、桃香、朱里、雛里、明里、陽里、優優、姓、双花、彩燐、紫苑、凪にここにはいないが他にも五人ほどいる……それでも良いのか？」

ちなみにこんな事はさつき名を上げた者達にも、月、恋、梅芳、桜蓮、白連のことだが…前者四人に関しては知っているのはその場にいたもの達のみ…月と恋の事を言うのはまだ早いか…

「私は構いませんぞ、英雄色を好むといいますしな」

「私は…その…欲を言えば…自分だけを見て欲しいですが…」

「二人っきりの時はそのときのやつだけを見るわ」

「本当…ですか？」

「ああ」

「でしたら…その…結構です」

「ただ…まだ我慢してくれるか?とにかく袁家の馬鹿どもが変な事はじめて、それが終わるまでな」

「確か…『反董卓連合』でしたか?」

「しかしあの呂布が従つお方ですから…優しい方だと思いますが…」

「俺はあつたことがあるが、愛紗のこいつおつの人物だ…だが、いふところが悪い」

「洛陽…宦官ですな」

「それに先の大將軍、何進殿との権力争い」

「ああ…といつても董卓自身はそんなのに興味はないし、打てる手は打つたが張襄という筆頭だけは手を出せなかつた…それに」

「はい、靈帝の様態が良くないところのははや公然の秘密でした」

「だから崩御した、といつ情報と同時に動きがある…それまでに鍛えておけ」

「確かに、あの呂布と戦う事にもなりそうですからな」

「はい…またご指導お願ひします!…」

「分かつていい。ただこれから先はこの新拠点、長安を洛陽並みにする必要があるし、軍部も再編成をしなけりやならない…頼むぞ」

「「はい!」」

こうして俺達は拠点を長安にして、治安回復に区画整理に戸籍整頓、更に農耕方法に加えてここだと五胡（匈奴・鮮卑・羯・？・羌）の対策…とはいっても意外と簡単そうなのは気のせいいか？

それにここには今皇太子妃があられるから大変なんだよな…

ま、俺の仲間は誰も死なせないし、俺も死なない…絶対にな…！

## 第十二話 龍鳳、新たな地位を得るの」と（後書き）

作：なんか中途半端間がある

鳳：ならもうちょいかけよ！

龍：まあまあ、これからは？

作：拠点フェイズのようなのかいてから反董卓編

鳳：大筋は決まってるのか？

龍：呂布との対決は誰？

作：元々董卓軍勢の武将人は凶化済みだから多分龍鳳の軍以外は即蹴散らされる流れ、呂布は主人公が当てるか、劉三姉妹にするかちよつと迷つてる

鳳：愛紗と鈴々も魔改造か？

龍：現時点でのくらいの強さなのさ

作：龍鳳の手ほどきを受けたら一日でかなり強くなつたから、かなり好いてますし、兵も指令をしつかり聞いて手足のように動くから将三人はいたく感動してたね、それから強さは愛紗、鈴々も桃香には勝てるよつになつた

鳳：やっぱり自力の差？

龍・だらうな

作・そう・拠点フェイズ誰から行こうかな···

愛・誤字脱字報告に意見・感想などいろいろ待っています···面白くないとかつまらないとかはやめてくださいね!!

幕間三 董卓陣営の嘆息（前書き）

作…さよっと変化球でいつてみた

鳳…時期的にはどのくらい？

龍…まあお前が洛陽去つてからじゃないか？

作…董卓党を潰した時で洛陽発つて約半年だからね

鳳…これから暫く幕間が続くのか？

龍：董卓陣営が終わつたから、後は旗揚げ時から付いてきてるのと  
劉備軍、三羽鳥に紫苑か

作…形としては軍師で一つか二つ、武将で三つか四つ、それに涼州  
との話をやつてから反董卓に行こうかと考えてます

鳳・龍…あくまで予定だから期待しないでくれよ、黙作者だし

作…お前ら俺を慮めてそんなに楽しいのかよーーー！

鳳…それと今回は珍しく二人称だ

龍…楽しんでくれよーー！

## 幕間三 董卓陣のお詫

洛陽にある城の一画…そこをメガネをかけ、緑色の髪を二つに分けて三つ編みにしている女性。名を賈駆、真名を詠という。がなにがあつたのか、かなり取り乱した様子で走っていた

「用…！」

「詠ちゃん、どうしたの？」

「医者を、洛陽一の医者を呼んで…今すぐ…」

「どう、どうしたの…？さっき書物庫に行くなって

「そこには重病人がいたのよ…」

「ええ…！…だ、誰…？」

「恋と幸と靈とねねみ…」

「ええええ…！」

詠がやつてきたのは彼女の主にして現在洛陽の治安を一手に引き受けている少女、董卓。真名を用 がいの部屋、そして詠の口から出たことは流石の月も驚いたようだ

「い、一体どんな状態なの？もしかしたら私達で対処できるかも…」

「僕達じゃ無理だよ…！」

「と、とにかく現場を見ないと分からなことよ…」

「円がそういうなり…」

結果として詠は円を伴つて再び書物庫に向かつ…途中で聞こえてくる声に気づく

「詠ちゃん、声が聞こえたんだけど」

「内容聞いたら円だつて重病人だと絶対思つよ」

「内容?」

耳を濟ませて聞く円…聞こえてきた内容は…

「孫子?」

「やハ、しかもねねを筆頭に武官全員で読んでるんだよ…これ絶対物凄く高い熱があるに違いないよ…」

「詠ちゃん、知らないの?」

「え、円、どうして誰がいつ何が知つてるの?」

「うん、龍鳳さんに勝つためだつて」

「龍鳳に?あいつ、兵法も知つてゐるの?」

「兵を率いる以上基本は納めておくべきだ、って監に言つたんだ

よ。で、ねねちゃんもまだまだ未熟つて」とを昭里さんと陽里さん  
に思い知らされて、それで一から勉強し直してゐるんだよ」

「じ、じゅあ熱があるわけじゅ……」

「無いよ、詠ちゃん。そもそもあれは龍鳳さんが秘密を教えてくれ  
た半年前からずっとやつてゐるんだよ」

「嘘……」

「嘘じゃないよ、じゃないと皆が自分の分の書類を眞面目にするわ  
けないじゃない」

「そ、それもそうだけど……」

「それで私達も楽できたりしてゐるんだから良いじゃない」

「へ、うん」

「それでね、詠ちゃん」

「な、なに……兀……」

兀からの氣迫に詠が田に見えて脅えている……

「ちゃんと事情を知らないなんて……だめだよ、まずは本人達に聞か  
なくつけ」

「へ、うん」

「それをせずに城内を走り回って、そのつま上の弓を引張りまわすなんて……」

「「」、「めぐなさ」……」

「じゃあ、これから皆に軍略を教えてあげてね、でもそれで本来のお仕事が滞つたら減給だけね」

「わ、分かりました……」

「すいすい」と去つていいく詠の背を見て、月は書物庫で勉強をしている恋、霞、幸、ねねのほづを見て微笑んで

「皆、頑張つてね」

「うう言つて自分仕事を再開するためにその場を去つた…そしてその件の女性達は…」

「よし、これで今日の分は終わつたな

「せやな、ほならこつものこか」

「ねね、準備」

「出来てこますぞーー！」

そう言つてねねが出してきたのは色々と書かれた紙を取り出す

「では、今日の分がちゃんと覚えているのか確認しますぞーー！」

彼女達が今からするのはいわゆる試験だ。しかも

「わざわざした分では」これまでの八割は出来ていたな

「半年…頑張った」

「正確に言や龍つちがおった一年前からやけどな」

「龍鳳殿達が居なかつたらねね達はもつと弱かつたです…ですが龍鳳殿達のおかげで更に強くなりました…ですが」

「龍鳳の言い分では月様を殺そつと十常侍及び袁家の馬鹿が色々してきて結果『反董卓連合』が組まれるのだったな」

「そいつ…月が死ぬまで、攻撃していく」

「せやから、最初の一回で終わらせなあかん」

「一番良い方法はそれに参加した諸侯を全滅させる事なのですが…」

「それをすると、また賊が大騒ぎして、皆が困る」

「だから、上手く月様の身代わりを用意して、『本人には何処かに匿つてもらわないとな』

「せやつたら龍つちのところがええやろ。つちのところもじつかりしつとるしな」

「やう。それに、龍鳳は今、擁州を治めてる。だから、逃げても、問題ない」

「「「「それです（だ）（や）ー！」」」

۷

「恋殿！…よくぞ言つてくれたのですぞ…」

「ああ、最悪、連合を組むという檄文が出回つたら身分を隠して我々全員で逃げれば良い」

無論、その前に洛陽に住む恩達はちきんと逃かさんとな

でも、それを知られたら……龍鳳が追われる」

「袁家如き、龍鳳殿の軍と我らの力と函谷関があれば負ける可能性は無いのです」

「確かに」

一なら、それ用たちにも詮う

「それもそうだな、最悪の事態に備えて」とを月様達から龍鳳に伝えておかねばな

「そうですね、ですがまずは試験をしましょう」

「」「」「」

こうして本人達及び筆頭軍師を完全無視して決まっていく対反董卓連合対策…龍鳳の指導力の高さが垣間見える事態となつた事に他

の面子がぬづくのはしばらく後の事…

そしてこのことを聞いた月は「これを了承。詠はこの四人がここまで考へられる事になつた事で軍師として危機感を感じたため普段の仕事に彼女達への軍略講義に加えて勉強のやり直しだけでなく政や農耕だけでなく謀略などもやり始めた

このことで一つの歴史が変わるなど、誰にも予想は出来なかつた

：

幕間二 董卓陣営のお話（後書き）

作…はい、龍鳳は気づかないとひで歴史変えました

鳳…反董卓どうなんの…？前回行くかもって言つてたよね…？

龍…いきなり予定壊すなよ…！

作…なんか書いてたらこんなノリに…後悔はしてない…？…反省  
はしてるが

鳳…まあ反省しているならまだ良いが…てかこれノリ的に漫画版に  
近いんじゃない？

龍…そういえばそうだな

作…てか書き始めたらそれが頭に浮かんで…そうしたら面白いんじ  
やないかと…で、こうなりました

鳳…無計画なのはいつもの事だけじゃ…

龍…もつちよつと考えようぜ

作…次回は龍鳳の陣営です

鳳…なんか嫌な予感

龍…あきらめろ

#### 幕間四 琵武軍の軍艦達のお話（前書き）

作…多分これから暫く一作品とも更新が滞りそう

鳳・卒論か…もつ準備しないと遅いもんな

龍…でもまず就職だらう。

作…そうだ…が、半分あきらめオーラを漂わせてる俺は負け組…

鳳・龍・だめだ…！…一ートはだめだ…！…

作…バイトはするけど…まあ

鳳・龍・（だめだ…）

作…と言つわけでも2月か3月くらいまで更新は少なくなります。ご了承を

## 幕間四 珀武軍の軍師達のお話

「はわわ・・・」

「あわわ・・・」

「わわわ・・・」

「ふわわ・・・」

「「」、これは・・・」

長安の城の一画、ここには今珀武軍の軍師が全員集まっていた

なお他の武将陣の内、龍鳳、桃香、紫苑、彩燐、清、優優、双花は民からの陳情整理を筆頭とした書簡を片付け、愛紗、鈴々、星、沙和は兵の調練、凪は警邏、真桜と械那は新兵器の開発及び改良といつたところ。ちなみにこれに軍師達が書簡のほうに入るのが普通なのだが、多少おかしい所もあるがこの軍では突っ込む奴はない

そして軍師達が一同に会して読んでいるのは

「「」、これなら兄上も・・・（「クッ」

「す、素晴らしいでしゅ

「至極のものでしゅ

「べ、勉強になつましゅ

「少し出費が嵩みましたけど良いものでしゅ」

何の」とは無い、ただの房中術の本もといただの艶本だった

どうして彼女達がいつしたのを読んでいるのかと言つと・・・

『御館様、反董卓が終わる、ないし群雄割拠になつたら私達皆の本懐を遂げて下さるのですよね?』

『ああ、俺と一生を添い遂げたいと言つのだらう?』

『ええ、私を筆頭に古参の者達も、桃香さん達も、勿論桂花ちゃん達も』

『無論だ・・・だが、桂花達軍師陣と鈴々 僕を異性として好いてくれているのが良く分からんが はもう少なくとも一三年は我慢してもらひがな』

『なぜですか・・・』

『俺の前いたところでは・・・といつかこの世界でもか、幼くして子供作ると母子共に危険なんだ』

『そうなのですか・・・』

といつ龍鳳と紫苑の会話を偶然陽里が聞き、軍師達に収集をかけ、話しあつた結果本を買つことになり、全員でお金を出し合つて先ほどの本を買つてきたといつしだいだ

ちなみにその原因となつた龍鳳だがその後に

『俺の子を産みたいと思ってくれるのはありがたい、だがそれであいつらがいなくなるなんて、嫌なんだ・・・我慢だがな』

『そうですか・・・ですが、御館様が私達のことを探してくさつていると言つのは分かりました』

『ありがとうございます、紫苑』

と言つて会話をしていたのだが、まあ聞いていたらいたでまた別の騒動が起つていただろう・・・そして鈴々がいないのは話してみたが興味が無かつたから

そしてこの本を買つと決めたのは『房中術が出来ればきっと大丈夫!!』という電波みたいなのを朱里が受信したからとでも言つておひり

しかし・・・

「はわわ、男の人はいつされると喜ぶのですか」

「あわわ、世、世の中にはいつこのものもあるのですね」

「わわわ、お、お尻の穴であるのもあるのですか」

「ふわわ、い、このよつな風にも・・・」

「これ・・・勉強になるわね」

肝心の『龍鳳の子を無事に産む』という目的から大きく外れている

事に全くもつてきずいていいのは、御約束と言つものだ・・・そして間の悪をも

「お前達、いいでなにしてるんだ?」

一  
アサヒ  
一?.

「はわわわわわわ」

「あわわわわわわわ」

一  
わわわわわわわ

ふわわわわわわ

「あ、兄上、これは、あの、えと、その」

龍鳳の登場で全員慌てに慌て・・・観察眼の鋭い龍鳳が彼女達の中心にあつた本に気が付かないはずも無く

「なんだこれ？」

と手に持つた瞬間

「ダメです——！——！」

彼女達から腹に突撃を受けて前ががみになり、そこを狙つてその本を桂花が回収し、同時に全員その場を離れていき・・・

「い、一体なんだつたんだよ・・・」

一人愚痴り、解決できなくなつた案件に頭と腹を抱える龍鳳がいた  
数分後、様子を見に来た桃香が頭痛腹痛と勘違いしちょつとした  
騒ぎになつたのは完全なる余談である

幕間四 琵武軍の軍師達のお話（後書き）

作・三人称書きやす

鳳・龍・おい！

作・にしても短かったかな？

鳳・一人一人だと異常な長文

龍・一、三人にまとめると面子が他のところと一緒に面白くないしな

作・と言つわけでサブタイ、『軍師、子を得るために学ばんとする  
のこと』をお送りしました～

鳳・房中術つてのは実際は男を虜にするためのもので

龍・子をなしても平氣な体にするわけではない・・・そことこ  
は？

作・分かつてないよ、そういうの彼女達は聞いたこと無いから

鳳・どうやって教えよう・・・

龍・まあがんばれ

幕間五 球武軍の武将達のお話（前編）

作・更新滞るひて書ひて良いのかな?

鳳・昨日の今日だからなあ・・・

龍・本格的にやがくなつたり活動報告で良一くんじゃないか?

作・えりあらか

鳳・今回のせびりこの内容になるかな

龍・しつかり読んでくれよーーー。

## 幕間五 珀武軍の武将達のお話

「よし、全員集合したな」

現在、珀武軍の主要武将全員が城内のかなり広い庭に集まっている  
「ではこれより、我が軍恒例の全武将による武術大会を執り行うー！」

『わあああああつーーーー』

観客の数もかなり多いがその中でも一際目立っているのが・・・

「龍鳳ーー頑張るのじゃぞーーーー！」

「負けないでーーーー！」

どうから聞きつけたのか、なぜかいる皇太子妃の劉弁様（真名を  
梅芳）と劉協様（真名を桜蓮）だ・・・

現皇帝の靈帝様の容態がよろしくないのに・・・じんなどひんで  
なにをされているのか・・・

ちなみにこれは長安に住む民達も見物、もとい観戦している。ち  
またでは誰が優勝するのかという賭けが行われているらしいが・・・  
大事になつたりしない限り龍鳳達も本気で取り締まつとはしてい  
ないため、こうして行われている

そして対戦表は・・・

一回戦

関羽（愛紗）

黄忠（紫苑）

姜維（彩燐）

趙雲（星）

劉備（桃香）

なし

張？（優優）

徐晃（清）

凌統（双花）

于禁（沙和）

張飛（鈴々）

李典（真桜）

樂進（凪）

黄月英（械那）

と言つ具合だ。審判は龍鳳が務めるため、不正は不可能。

得物は刃

優勝

物を使うものは潰したものを用意されており、傷を負う可能性は低くされている・・・何度も骨にひびが入るなどはあったが・・・

そして優勝者には褒美として丸一日の休暇、もしくは自身のお願いを何か一つ（不可能なものを除き）上司である龍鳳にかなえてもらえる・・・もっともほぼ全員これを願っているが

ちなみにこれまでの優勝回数は

桃香：一回（一回ともお願い。内容は龍鳳との逢引

愛紗：なし

鈴々：なし

星：なし

紫苑：一回（お願い。内容は龍鳳と逢引

凪：なし

沙和：なし

真桜：なし

優優：一回（一回ともお願い。内容は龍鳳との逢引

清：一回（一回ともお願い。内容は龍鳳との逢引

双花：一回（一回ともお願い。内容は龍鳳との逢引

彩燐：三回（三回ともお願い。内容は龍鳳との逢引

械那：一回（お願い。内容はちょっと高価な部品購入

愛紗、鈴々、星、凪、沙和、真桜の六人は実力はあっても実戦経験が少ないのか、勝ち進めて古参である四人や最年長である紫苑につまくあしらわれて負けることが多い

その紫苑も結局今まで内政中心だったせいかいざと言つ時に体力切れ気味になつて負けることが多くなつてしまつた・・・実際にこの間桃香にそれで負けていた

桃香が優勝できたのはそういう運の要素も多い・・・実力が付いたといつても元々差があるため、決勝戦とかに双花、清といったどちらかと言えば力押しで来るのには弱く、負けてしまつ」ともあつた

他のは実力がとんとんといつても良いかもしない・・・全員が全員の特徴を把握しているといつても良いかもしないが・・・

械那ははじめての時に欲望が強く後押ししたのか優勝を搔つ攫つていった・・・次の大会では特徴を把握され一方的といつても良い展開になつたが

現在の実力は

龍鳳 > > 優優、清、双花、彩燐 > > 紫苑、械那 > > 桃香、愛紗、鈴々、星、凪、沙和、真桜  
といった具合だ

さて、そろそろ試合が始まるようだ

「では、試合を開始する!!第一試合の選手、前!!」

「手加減はせんぞ、紫苑」

「ええ、思いつきり行きますよ、愛紗さん」

「試合・・・開始!!」

開始の合図と共に紫苑は距離をとり、愛紗は詰めようとす  
る・・・弓対長物、遠距離武器と中距離武器では距離を製したもの  
が勝つといつても過言では無いだろう・・・ただ紫苑の矢に限りが

あるが、敗きたとしても戦場を前提としているため補充などは認められない

一方の愛紗も、『』が額や胸などに当たればその時点で敗北なので一瞬でも気を抜く事が出来ない・・・そのため、この一人の試合は膠着のよつな状態になる事が多かつたのだが・・・

「ふふつ、油断大敵よ、愛紗ちゃん」

「なにつー」

距離をとつていた紫苑が急に愛紗へ接近する・・・このことには流石の愛紗も驚き、対応が一瞬遅れる。その隙を紫苑が付かないはずは無く・・・

「これで決まりね」

「つーーー！」

愛紗の顔の前には『』に番えられた矢があり、

「そこまでーー勝者、黄忠ーー！」

『わあああーー』

「つ・・・また私の負けか」

「ええ、でも物凄い速度でおつてくるんだもの、かなりあせったわ」

「だが、勝てなかつた・・・私もまだまだだな」

「あいあい」

「次の試合を始める……両者、前へ……」

「負けません」

「それまほひらの単語だ」

「試合……開始……」

今日は互いに槍の名手なため、かなりの接線模様だ……片方が押せば引き、引いたら押すという形だが……攻撃の範囲では彩燐が、手数では星が勝つている為、多少は長引くかと思つたのだが……

「はこはこはこ——」

「えつ、はやつ……」

星の攻撃の速度が以前よりもかなり早くなっていたため彩燐では対応しきれず、得物を弾き飛ばされたので

「それまで……勝者、趙雲……」

『わあああつ……』

「まさかあそじまで早くなつてこるとせ思こませんでした」

「ふつ、私とて何時までも負けっぱなしとは性に会わんので

な

「次の試合を開始する……両者、前へ……」

「今日は私が勝つ……！」

「常勝将軍をなめないでよ」

「試合……開始……！」

大斧を武器としている清と、爪を武器としている優優、もぐりこめれば優優の勝利、もぐりこませなければ清の勝利となるこの勝負・・・互いにせめぎあう好勝負・・・しかし、次の瞬間模様は一変する

「つ……！」

優優が自身の得物を清に向かって投擲する。しかも飛ばした場所は彼女の顔を狙っていたため清は体制を崩してでも避けるか、得物ではじくか、大人しくもうしかないゆえ、大きな隙が生じる。よつて

「はつ……！」

優優の接近を許し、避けたものの不安定な体制なので清は武器を弾き飛ばされ、首筋に武器を突きつけられ

「そこまで……勝者、張?……！」

「やった!!」

「あ、――、負けたあ――！」

「次の試合を行つ――両者、前へ――。」

「負けねえよ」

「「」うちの台詞なの――！」

「試合・・・開始――。」

双花も沙和も接近戦が本領だが、大きな違いがある。双花はどちらかと言えば攻撃に傾倒しているが沙和は双剣なので攻防一体の比重がちょうど良い。防御に徹せられるとそう簡単に攻撃は入らず、いたずらに時間ばかりが過ぎていくような状態になる

しかし・・・

「今なの一――。」

「つ――。」

業を煮やした双花の攻撃にあわせて沙和の攻撃が双花の一の腕に当たり、双花は武器を取り落とす

「それまで――勝者、干禁――。」

「やつたなの一――。」

「ちえ、負けちやつたか」

「次の試合を開始する……両者、前へ……」

「ぶつ飛ばしてやるのだー……」

「負けへんべー……」

「試合……開始……」

『』の試合も第一試合同様長物対決となつたが鈴々の力に真桜が勝てるはずも無く、あっけなく敗北した

「つて短すぎやせえへんか！？」

「なに御空に向かつて言つてるのだー？」

「次の試合を始める……両者、前へ……」

『（無視した……）』

「あらあら、星ちゃん、やる気満々ね

「無論だ、紫苑殿も油断していると足元を掬われますぞ」

「試合……開始……」

愛紗より力は劣るが速度は速い星、そのため先ほどの策は使えない為紫苑はどんどん追い込まれていき……

「はつ……」

「へへ・・・・」

星の鋭い一撃で『』を弾かれてしまい、無防備になつた紫苑、よつて

「ヤ！」までーー勝者、趙雲ーー。」

『わあああつーー。』

「星ひやんみたいな昇業対策も考へないといけないわね~」

「ならば、私はそれを上回るべつに強くなつて見せますよ」

「次の試合を始めるーー両者、前へーー。」

「一番弟子の強さ、見せてあげますーー。」

「順番じやなこつてーーと、証明してみせぬーー。」

「試合・・・開始ーー。」

優優が両手武器なので桃香も靖王伝家せいおうでんかと龍帝剣の一ノ刀流で戦う。  
しかし、やはつ多少実戦経験は桃香のほうが上のよつで優勢を保つたままだ

「ええーー。」

焦りを出して大振りになつた優優、その隙を簡単に逃すよつた桃香では無く・・・

「はっーー。」

すばやく靖王伝家せきおうでんかで払つと龍帝剣で追撃し・・・

「そこまでーー勝者、劉備ーー。」

『わああああーー。』

「次の試合を行つーー両者、前へーー。」

「負けなーーのーー。」

「簡単に倒してやるのだーー。」

「試合・・・開始ーー。」

「ひつやつやつやーー。」

「え?・え?・え?」

鈴々の猛攻の前に双剣と言えど防ぎきる事は適わず、耐え切れなくなつて両方とも弾き飛ばれてしまふ。・・・

「そこまでーー勝者、張飛ーー。」

「やつたのだーー。」

「あつひ、まけちやつたのーー。」

「次の試合を始めるーー両者、前へーー。」

「負けません……」

「これで勝てば……うふふ

械那が棍で攻撃をするが皿はあっさりと見切り、棍を掴むと上空に放り投げ……

「はあっ……」

「ちょ、 気弾はズル……」

ドォン……

械那はアフロみたいな髪形になり、武器を取り落として地面に落ちる

「そこまで……勝者、 楽進……」

『（あれみて笑わないんだ……）』

「次の試合を行う……両者、 前へ……」

「桃香様と言えど、 加減はしません」

「負けないよ……！」

「試合……開始……！」

星の速い槍捌きを桃香も両手の剣を巧みに操つて防ぎつつ、徐々に徐々に近づいていく……

「はい……はい……はい……」

「ふつ……えい……やあ……」

最後の一刺しを右逆手に持ち替えた龍帝剣でいなしながら懷に潜りこみ、左手の靖王伝家を首下に突きつける

「そこまで……勝者、劉備……」

「やつたあああ……！」

「くつ……また負けてしまったか……」

「次の試合を行つ……両者、前へ……」

「もう一回勝てば桃香お姉ちゃんと……絶対勝つのだ……」

「残念だが勝つのは私だ……」

「試合……開始……！」

「うつやつやつや————！」

「はあああつ……！」

互いの得物 といつても蛇棒と拳だが を激しくぶつけ合わせる。

・・それも何度も何度も行う二人・・・それと同時に会場の興奮の度合いもどんどん上昇していく・・・しかし、いずれも限界は訪れるものであり・・・

「うつせ———」

「はああつ——」

同時にかち合ひ一人の攻撃……勝ち残ったのは……

「ぐつ……」

「か、かつたのだ……」

鈴々だつた……

「そこまで……勝者、張飛……」

「やつたのだ……」

「はあ、まだまだ修行不足だ」

「すまんが鈴々、」のまま決勝に行くわ

「良いのだ……」

「よし……それでは決勝戦を行つ……」

『わあああつ……』

「まずは中山靖王の末裔、劉備……玄徳……」

『わあああつ……』

「そしてその対戦相手は、その義妹！！張飛——！翼徳——！」

『わあああつ！！』

「それでは試合・・・開始！！」

「...」

「せめて一つ…」

令々の女ハ蛇矛と挑番の清正云家と一龍帝剣が音を立てて激突する。じょひながたまかせいおりでんか

「桃香お姉ちゃん・・・始めて戦うけど本当に強いのだ」

「鈴々ちゃんまで・・・愛紗ちゃんにも言われたけど・・・ね!」

桃香がはじき飛ばして距離をとると、また互いにぶつけ合っていく

「姉上・・・やはり強い」

「龍鳳様から直接教えてもらつたものを毎日欠かさずしてきたらし  
い・・・お前達と義姉妹の契りを結んでからも、欠かさなかつたそ  
うだ」

「本当に御館様の事が好きなのね、桃香ちゃん」

「今回こそ勝つて私も自分だけのを教えてもらいたかったのだが・・・

「沙和は張三姉妹の歌を聞かせて欲しかつたの～」

「つむは新しい機械<sup>からくい</sup>の部品が欲しかつたんやけど・・・」

「私もよ～」

「「「「もう一度逢引<sup>うぶひ</sup>がしたかつた・・・」」」

・・・新参達は眞面目だが古参の者達はもはや欲望駄々漏れである・・・そんなのも耳に入らず むしろ入つたら怖いが 鈴々と桃香は激突を繰り返している

鈴々の丈八蛇矛<sup>じょうはながたけいり</sup>は星の龍牙<sup>りゆうが</sup>と違つて少々形状的に捌き難いため、返し技を得意としている桃香は苦戦氣味だ・・・しかし

「ここもあーーー全然手応えがないのだーーー」つむったら・・・

「ふふつ、鈴々ちゃん、隙ありーーー」

「こやーーー」

力強い一撃を放とうとした張飛の足下に龍帝剣を投げつけ、体制を崩して首筋に靖王伝家を突きつける

「そこまでーー勝者、劉備ーーー」

『わあああつーーー』

「うにゃー、負けちやつたのだーーー」

「でもやつぱり鈴々ちゃんも強いよ～気の調整が大変だつたんだもん。あせるのがもつもつと遅かつたら負けちゃつてたかも」

「「いや、やばい、そつなのかな？」

「うふ、うひ

「「いや～ もうちょっと我慢すればよかつたのだ～」

「あはは、残念でした～」

「それにしても姉上、御見事でした」

「あ、愛紗ちゃん、ありがとう」

「本当に、お強こですね」

「やつですね、ちょっと羨ましい氣もしますが・・・」

「紫苑さん、凪ちゃん」

「「「「桃香さん、羨ましこですか」「」「」「」

「優優さん、清さん、双花さん、彩燐さん」

「お前達、今日はもう上がりで良ござれ。ただ軍師達で今日俺は仕事できないことだけ伝えておいてくれ」

『御意』

今回の大会は桃香の勝利で幕を閉じた・・・

なお、皇太子妃が来たおかげで龍鳳が仕事が出来ず、他の仕事が出来るものがいなくなってしまったため、軍師たちがひいひい言いながら仕事をこなし、その罪滅ぼし（？）もかねて今回優勝した桃香のお願いも含めて六日連続逢引をする事になつて龍鳳の財布が限りなく軽くなつたのは完全な余談と言えるだろう

## 幕間五 珀武軍の武将達のお話（後書き）

作・引越し中にやつた武道大会を書いてみました、ただし現時点版

鳳・しかし桃香強いな・・・

龍・張飛に勝つとは・・・

作・桃香はボクサーで言つとカウンター・パンチャーだから、後紫苑  
も、他は沙和が防御重視、他は攻撃重視つて感じかな、またその中  
でも力重視と速さ重視と別れるけど

鳳・確かに星と双花が後者だつたな

龍・力攻め多いな・・・

作・次回は桃香との逢引でも書こうかな

鳳・龍・ちゃんと書けよー！

星・誤字脱字報告に意見・感想など色々待つておるぜ。リクエスト  
などもあつたら受け付ける・・・ただし、R-18に引っかかるよ  
うなものはNGだそうだ

第十四話 龍鳳、仲間を得、師から真実を聞くの「こと」(前書き)

作：龍鳳強化

鳳：まてえ！！

龍：伏線回収か？

作：劉備強化

鳳：更にか！！

龍：他にはいないのか？

作：馬超達も出したい

鳳：この時期に五虎將軍そろえるのかー？

龍：布陣最強（笑）

## 第十四話 龍鳳、仲間を得、師から眞実を聞くの」と

「最近ではあまり大きな動きはなかつたな・・・

しいて言えば匈奴の連中が來たぐらいか・・・ちょっと叩いて食いもんちらつかせたらあっさりと仲良くしてくれたのには驚いたがな・・・

その際に涼州の馬一族とは仲良くなつたな・・・馬騰さんは頭がちょっとあれなのかと凄く不安になつたが、姪の馬岱曰く、「翠（馬超の真名）姉さまに合いそうな男の人見つけるといつもああなる」らしいので果てしなく『娘馬鹿』だといふことか・・・

好いている女性が多いといったのだが「英雄色を好む」一言で片付けられた・・・しかも「娘をもらってくれるのなら傘下に入る！」とまでいいきつた・・・

流石にそれには俺も、従軍してきた雛里、明里、紫苑、彩燐、星の五人もあきれていよいよ・・・いや、星と紫苑は新しい玩具を見つけたような顔をしていたが、俺は見ていない、見ていないつたら見ていない

まあ本人の気持ちしだいじゃないかと思つたら当の本人は絶賛混乱中でした

時々「まあ確かに格好良いし・・・でもあたしたがさつだし・・・デモでも・・・などと聞こえてきたのは絶賛無視したが、馬岱が「なら私が！・」と立候補（？）で馬超も正直になつたのか、「見極めたい」と言つ結論で落ち着いたようだ

そして結果として涼州も俺が管理と言つか支配と言つか面倒を見る事になりました。朝廷が許可を出すはずもない（現在靈帝は体調不良で政治を取り仕切っているのは宦官（宦官）ので勝手にやつちやつた状態だ・・・まあ長安には桜蓮様がおられるので全く持つて問題はないのだが・・・

そんなこんなで涼州のほうは一田の長がある馬騰に任せ、なおかつ俺達の政治体制に慣れてもらうために馬超、馬岱をこいつらに連れてくる変わりに朱里を派遣し、彩燐と紫苑を残した・・・当の三人には恨みがましい眼で見られる事になったが・・・

それからもう半月・・・朱里から万全との報告を受け、全員帰還させる事にしたのだが、馬騰が「こつちはあたしがいりや大丈夫だから」と言つてきたので馬超と馬岱はそのまま残り、それを機会としたのか皆で真名を交換したな・・・

なので現在は

太守：俺（珀武麒麟こと龍鳳）

副官：桃香（劉備）（太守不在時の指揮官的存在）

筆頭軍師：桂花（荀？）

副軍師：朱里（諸葛亮）

軍師：離里（鳳統）

明里（徐庶）

陽里（司馬懿）

五虎將軍：愛紗（関羽）（筆頭）

鈴々（張飛）

星（趙雲）

紫苑（黃忠）

翠（馬超）

四天將軍：清（徐晃）

双花

（凌統）

彩燐

（姜維）

優優

（張？）

三鳥將軍：凪（樂進）

沙和

（于禁）

馬將軍：蒲公英

（馬岱）

藍菜

（馬騰）

機械將軍：械那（黃月英）

諜報部隊：陰（周倉）（隊長）

影

（廖化）

翳

（裴元紹）

特殊任務：天和（張角）

地和（張寶）

（張梁）

現在の部隊はこのように分けられている。兵数は二州合わせて約六万・・・これは漢民族だけでなく異民族である五胡を受け入れる、というよりその違いがどこにあるのかを桃香に説かせたからだ。はつきり言ってこういう力は俺よりも桃香の方が上だ。だからその力を十二分に生かせる仕事が多く、張三姉妹もそれに付いていっていることが多い

なので擁州、涼州では最近異民族が襲つてきたと言う話はなくなりつつある・・・そのなかでもそれに快楽を見出している連中もその一族では煙たがられ始め、そのなかでどうにかしようとしているらしい

よつて今日下の問題は・・・

「」の書類の量本気でじりにかなんねえのかな・・・てか雑務は半分警邏隊の分隊長にも簡単なものはやらせりてこつたのに・・・

「本当に大変よね~」

「はわわ・・・」

「あわわ・・・」

「わわわ・・・」

「ふわわ・・・」

「ひゅ~」

俺と桃香、軍師五人で書類の中でも重要事項を処理しているのがその中に時々（六～七枚に一枚）そうでもないやつが入つてて、更に涼州も合わせているため必然的に量が多くなり、苦戦しているのだ。

「まあ民の陳情さえその日のうちに終わらせてしまえば大きく問題になる事は無い・・・そういえば將軍達に出すよつて言つた各隊の調練計画表、誰が出てない?」

「えっと、因天將軍と三島將軍の監査出してくくれてるよ」

「五虎將軍は鈴々ちやんと星さんと翠さんがまだですね」

「蒲公英と藍菜さんもまだです」

「械那さんのほうは大丈夫です」

「通達を出しますか?」

「やうね、明日の朝までに出すよつに伝えてくれる?もし遅れたら給金一割減ともね。それで良いですか?」

「それで良い。まあ藍菜は涼州だから遅れるのは田をつぶるわ・・・軍全体としてはどうだ?」

「兵達の練度もかなり挙がつてきました」

「五胡の方達と交流できるよつになつたのが大きいですね、軍馬が大量に手に入りました」

「更に彼らから教わつた馬術も合わせつて更に精強な騎馬隊になりました」

「それであまつたりしたものを他国に売つたりもしましたので軍資金なども今の状況下でしたら約一年ほど持りますね」

「兵糧のほうも同様です。更に困つてゐる村町邑に配つたりもしますから良い噂も立つています」

「他にも張三姉妹の噂を聞きつけた人達が軍に入つたりもします。実際に姿を見せたりもして、なおかつ軍規を守ればいいといつ条件ですから民達に被害が出ていると言つ報告も出でいません」

「そつか・・・では「失礼します!」  
「どうした

「はつ、太守様に会いたいと言つ方が来られています」

「何人だ？それと容姿も合わせて報告せよ」

「はつ、人数は五人で全員男性、内一人は筋骨隆々で一人は桃色の下着のみで、もう一人は禪に上着を着ているだけ、他三人はまともな格好をしています。また、そのうち四人は太守様の真名を知つております」

「わかつた、全武将に招集をかける、集合場所は玉座の間、それとその客人たちはとりあえず丁重にもてなしてくれ、身なりは伝えてくれた通りだが、心根が悪いやつと言つわけではない・・・一応、俺の武術の師範でもあるしな」

「はつ」

「と言うわけだ。非常に、ひじょーに余り会いたくないがこの時期に来たと言う事は何か意味があるのでどう。・・・行くぞ」

「「「「「御意」」」」」

それから暫くして、將軍全員が玉座の間に集合した。藍菜は来れないから後で手紙で教えようと考えていたのだが偶然用事があつてこちらに来ていたため参加している。また天和達も関係があるかもれないと思つたため同様に参加させている

「客人をここへ」

「はつ」

連れてこられたる客人・・・八年ぶりに見るが全員変わっていない。  
・・が、やはり見た目的は凄いのでほぼ全員が引きつった表情をしている

「久しいな、貂蝉、卑弥呼、于吉、左慈・・・それとそつちの奴は  
？」

「俺は華佗、字は元化。五斗米道ゴウトウイードウの医師だ」

「貴殿が・・・で、如何様かな？それとここにいる全員、俺の事を  
良く知ってるから大丈夫だ」

「・・・今日は全て悪いニュースだ」

「マジかよ・・・」

全員の頭から?<sup>マーカー</sup>が出てている・・・

「今のと、これから出てくる意味の分からない言葉は天の国の言葉  
とも思ってくれ。で、どんなのなんだ？・・・左慈、頼む」

左慈に頼んだ理由？察してくれ

「わかった。まず一つ目、俺達が追っている人物の事が分かつた」

「それって、龍鳳さんが私達の所に転生するきっかけと言つか原因  
になつた人ですよね？」

「そうだ、そいつは今・・・袁紹になつていてる

「へ～・・・ってなんだとおおおーー！」

「う、嘘でしょーーーあ、あいつが元神！？」

「ありえないありえないありえないありえないありえないありえないありえないありえない」

「落ち着け！ー！」

『ーー』

「それで、どういう状態なんだ？」

「元々女神だつたから悪影響はそれほどない・・・ただ霸気とかそういう類のものは聞かない」

「倒すには首刎ね飛ばすとかしかないのか・・・」

「だから黄巾党の時龍鳳様の霸気受けても平然としていたんですね」

「そういうことだ・・・まあそれに関しては大丈夫だらう」

「どうということですか？天の御遣いとか言う人が一緒にいるんですねよね？」

「ああ、だが奴の戦闘力ははつきり言ってからしきしだ。ここのところ連中なら労せず勝てる」

「氷輪丸の奥義を使われてもか？」

「ああ、来る前に見たが使つても数分しかもつてなかつた。そのうえ終わつたら倒れこんでたぞ」

「なら威力にさえ氣をつけていれば大丈夫だな……他には？」

「お前に関することが一つ、それと」

「そつちに關しては俺が言ひ

「分かつた……龍鳳、最近、田が見えにくくなつてきたんじゃないか？」

『！？』

「ああ、もしかしたらと思つていたんだが……」

「俺達の力でも完全に取り除く事は出来ない……が、正しい方法の裏技でならどうにかなる」

「そつか……この大陸一の名医の華佗を連れてきたのもか？」

「そうだ」

「分かつた。それで華佗殿、貴殿の様は如何様なものか？」

「ああ、あんたが張三姉妹を保護していると聞いて……もしかしたら此処に『太平要術の書』があるかもしれないと思つてな」

「いや……天和、地和、人和、お前達は知つているか？」

「あの・・・知つてます」

「実は・・・龍鳳さんに保護される前日・・・なくなっちゃった  
んです」

「「なに?」」「

「なにがあつたかといいますと・・・」

人和が言つには、俺達の攻撃の前日（つまり軍議があつた日）の夜に何者かが忍び込んで盗つて行つたらしい・・・そしてそのことに気が付いたのは俺達に攻められて回りの物を確認した時だそうだ

「確かに、盗まれたと判断したほうがよそをそつだな・・・俺達はお前達がいるところは分かつっていたからそのほうには攻撃していないしな」

「といつことは『太平要術』の力を良く知つているものが持ち出しだと見て間違いないな」

「誰なんでしょう?」

「それは多分『主人様ね~』

「ああ・・・あいつか・・・なんでそんなことが出来る・・・ああ、  
黄巾の連中の格好してりやバレねえか」

「だな」

「で、」の後、お前達はどうする予定だ？」

「暫く世話をになる予定だ……少々お前の事も気になつたしな」

「左慈ちゃんたら素直じゃないわねん。龍鳳ちゃんの噂聞いて悪いのだと流した人達を全員殺そうとしたりもしてたのに」

「貂蝉……」

「ははは……まあ俺も暫くの間……恐らく一週間ほど動けんだうから申し訳ないがその間政務とかを手伝ってもらつても良いか？」

「……こいわよん（ぞこ）（分かりました）……こいだらう」

「では華佗殿、お願ひにする

「分かつた……」

「あの……なにをするんですか？」

桃香が恐ろしく全體が疑問に思つてゐるであろうことを華佗に尋ねる……

「じゃ、華佗、俺から言ひ……分かつた」

「俺の旦がちよつとした特別性だとこいつとは全員知つてゐるな」

「万華鏡[与輪眼]……」の田せを使えば使いぞじ闇くと向かつ田……

「

「ま、まさか……」

「失明……と申つ事ですか」

「ああ」

場の雰囲気が暗くなる……

「それを何とかするために私達はここに来たのよん」

「せうじや、おぬしらを守るためでもある」

「失明しないようするには同じく万華鏡に開眼してくる『血縁者』の田が必要なのです」

「しかし、龍鳳のは龍鳳のしかなし……子供も親ももつ事はない」

「じ、じゃあ……もつ失明しかないじゃないですか……」

「せうじや……だから、裏技としてもう一対……『龍鳳の田』を用意してきたのだ」

『……?』

「一つ聞かたい、その田に宿つて居るのも『今のと同じ』なのか?」

「そこには分からぬいわん」

「宿のまうらは、アーランドームじゃからな……しかし今得ていのまは無くな  
らんじやね」

「分かつた……」

「つまり……その田をえと……龍鳳さんの今の田を取つて入れ  
れば龍鳳さんの田は失明しないんですね？」

「そうです……かなり危険な賭けでしたが無事に行つてよかつた  
ですよ」

「では龍鳳殿……」

「ああ、安全といふか離れたところがあるから……そこで頼む……  
・それと」

「何だ？」

「桃香に五斗米道ゴットガイドオを伝授してくれないか？」

「えつ……？」

「桃香は医療系の扱いが上手い……そうなればこびと町の時居な  
い者に頼らなくとも良くなる……」

「五斗米道は人を救う為のもの、俺は構わない」

ゴットガイドオ

「ついでですから私達の導術とかも教えましょう、天和さん達も一

緒にね

「・・・本人達が了承したのなら、頼む・・・」

「わかりました」

「では珀武ど「龍鳳だ」・・・そうか、俺の真名は『舞斗』だ・・・必ず成功させる、この名に賭けてな」

「頼む」

そうして俺達が退席する・・・

その後の事は卑弥呼から聞いたが、武官達は卑弥呼と左慈と貂蝉が、軍師や導術（正確には気を）使える面々は于吉に色々習つたらしい・・・ただとても良い時間でもあつたようだ（？）全員が凄く満ち足りた顔をしていたからそこから推測しただけだがな・・・

俺が復帰したのは大体一週間後、万華鏡の文様はいつも奴が二つ重なつてゐる状態（六枚刃の手裏剣）になつた。他に付いたものが何が分からぬが、『天照』と『月詠』はそのまま使えることはわかつた・・・

また強さのほうもかなり強くなつており、全員が気を併用した戦闘が出来るようになつていて。武官の方は凪以外は変換能力がなく、ただ身体強化などにしか使えなかつたが、それでもその効果は高く、全員自分の身長の倍はある岩を軽々粉碎していく

そう、粉碎だ・・・真つ一つとかは聞いた事があるが粉碎とは・・・凄まじい・・・ちなみに凪は『風』の変換資質を持っていた・・・

なんか將軍勢全員が別れる前の畠布以上の強さになつてゐる・・・

そして軍師達や桃香は治癒系の術を覚えてきたのだが・・・失つた臓器や腕とかを再生させるとか何だよ・・・しかも『寿命は縮まらない』？・・・どんだけえー

まあ不都合な部分としては一人分やるとその翌日はまともに動けなくなるようだが・・・

更に全員五斗米道ゴヂュウハウイドオを覚えてきた・・・そう、全員だ・・・軍師達は分かるがまさか武将達もとは・・・もはや笑うしかない・・・

無論、俺も復帰してから覚えた。その後医書『青囊書』を『』をさしてもらい、また靈帝様のことを直せないか聞いてみたがどうやらもはや末期で華佗でも無理らしい・・・他の皆は靈帝様に会えるほどでも無いので結論としてダメだとわかつた・・・

そしてそれから一月後・・・洛陽に居る月達から一報が届いた・・・

『靈帝崩御す』

の

これにあわせて何進が強行に梅芳様を皇帝に添えたが、それを快く思わなかつた宦官達によつて暗殺されたが・・・しかしそれにも私兵をかなり使い、なおかつ宮中での事だつため月達によつて一部というより張譲以外 殺されたのだが・・・それが原因で月を人質にされ、皆はやむなくその支配下になつてゐる状況ということが陰達からの報告で分かつた・・・

そしてその張譲は追い落とされたフリをして用を盾に悪政をしているようだ・・・それで民の間には怨嗟の声が広がっている・・・これは確定だな

「華佗、今『太平要術』は洛陽にある・・・そうでなければあいいうことはしないだろ?」

「俺もそつ思つていたところだ・・・頼みがある」

「・・・俺が知つてゐる事は全部教えただろ?・・・従軍以外は認めないし、単身で行つても入れる可能性は無い」

「・・・俺も一緒に連れて行つてくれ!-!」

「ああ、恐らく袁紹当たりが檄文を飛ばすだろ?・・・俺達は助け出すために行く予定だ・・・そのためには常に前線、先陣に立つ・・・それでも構わないか」

「構わない!-!」

「なら良こそ・・・」

その後このことを全員に通達し、いつでも出陣できるように準備するよう指示し、なおかつ全員で行くわけにも行かないため待機組みと出陣組みともそこで分けた

出陣・・・俺、桃香、五虎將軍、三鳥將軍、桂花、朱里、雛里、天和、地和、人和

待機・・・陽里、明里、四天將軍、馬將軍、  
機械將軍 からくじ

からくり

なお出陣には華佗が、待機のほうには師範達が他に加わっている。待機組みは藍菜を主軸とするよう指示している。・・・なにせこの中で唯一州牧暦が一番長いのだ。・・・判断力では軍師達が上だが支配力とかでは負けている。・・・なので彼女に任せたわけだ

そして二月もたたないうちに袁紹から檄文が飛んできた・・・悪政をしている董卓をぶつ瀆そうと言う内容のが・・・裏側とかもしつかりと知っている俺にはあほらしことも思えないのだが・・・

裏側はアニメ・『乙女大乱』と変わりませんby作者

とにかく、出陣も決まつたため、俺は出陣組みを率いて進発した。  
待機組みには劉表のあほと劉璋の小坊主に気をつけるよう注意も  
しておいたから、まあ大丈夫だろう・・・

さて張譲・・・俺の友と・・・愛してくれる女を利用したり監禁した罪・・・その身で払つてもらうからな！！

## 第十四話 龍鳳、仲間を得、師から眞実を聞くの」と（後書き）

作・気が付いたら涼州も併呑していた件

鳳・俺達のところって完全に全員チート部隊じゃないか

龍・ちなみに兵の強さは？

作・指導に熱が入つて更に強くなりました。その後町で元盗賊五人が騒ぎを起こしたんだけど偶然居た非番の警邏隊の一人があっさり制圧してました

鳳・龍・って並みの武将と同等！？

作・いや、劣つてます・・・訓練された兵相手でも一対一なら油断しなければ負けないでしようが

鳳・・・強いつてのがなんのかわからなくなってきた

龍・ノリとはいえこれは・・・

作・反省はしている、でも後悔はしていない！――

鳳・龍・いや、ちょっとまじめよ

鈴・誤字脱字報告に意見や感想とか色々待ってるのだ～！！

## 第十五話 諸侯、集結するの！」（前書き）

作・まずは？水関！！

鳳・激しく嵐の予感・・・

龍・なんか原作ブレイクが普通になつてゐ

作・一次創作だからね

## 第十五話 諸侯、集結するの」と

長安を出、俺達は連合軍の集合箇所に到着したんだが……

「まだ総大将が決まつていない！？」

「はい……」

確認に来た兵（金ぴかの鎧を着ていたから袁紹軍と推測）からそう言われた……ちなみに率いてきた兵は総兵力六万五千のうち三万五千……しかし兵糧はその倍は持つてきた……理由？ 分かるだろう……

「しかしではなぜ貴富らが確認をしておられるのだ？ いつここのは総大将の軍の任だと思うのだが……」

「そりゃあいつがやりたがつているからぞ」

「「「白蓮（わらんちゃん）」」」

「よ、龍鳳も桃香も桂花も久しぶりだな、元気にしてたか、星

「はい、白蓮殿もお元気そうで」

「「「ちはお前の抜けた穴を埋めるのが大変だつたけどな」

「おやおや、皮肉を言われるとま……白蓮殿も成長されましたな」

「言つてみ

「やりたがつてゐたならそのままおきや良いのに……立候補しないのか？」

「せうなんだよ……全く、昔からあいつの相手は骨が折れる

「ははは……大変だね」

「……お前ら軍議に参加しないのか？」

『あんなのが居るといひに行へ価値があるとでも？』

「……仲良いな、お前達」

「まあ冗談だ……一応顔だけ出すか……俺と桂花、翠、それと桃香、朱里、この五人で行く。他の者は天幕の用意を」

『御意』

「しかしそ前のことの軍、強そつだな～」

「鍛えてるからな」

「騎馬隊のほうは涼州と五胡の人達仕込みだから白蓮ちゃんの白馬隊にも負けないよ～」

「へえ～、言ひついぢやないか

「……ナウこえぱぞびつして白蓮さんむ」といひ立つ。

「到着してほほぞ～～と回じ」とを延々と聞かされてまともで居られると思うか？」

「嫌・・・」

「しかも御遣いって奴が無責任に煽るもんだから止まるどじろか増徴していく一方でさ・・・」

「・・・・・・・・・・・・」

「だから氣分転換に来たらお前達と会つたといふことや」

「やっぱ参加しないと言つか用事が会つていけないとこ事だ」「だめだ！」「ですよね」

「行きたくないといつお氣持ちは非常～～に良く分かりますが」

「」の連合の盟主ですから・・・

「呂布と死合こするほうが遙かにましなんだが・・・はあ・・・」

「ほりほり、観念して行こう行こう」

そうして俺は桃香達に連れられ諸侯が軍議をしている天幕に着いたのだが・・・

「新しい万華鏡写輪眼の能力確認、いつてみよ～～

「・・・・落ち着いて（ぐだれ）（しゃこ））――」「

「冗談だ……新技の実験をするだけだ」

「…………それもだめ（です）（でしゅ）…………」

「でもこれ聞いて耐えれるのか？」

「…………」

「なにやうに騒がしいと思つたらあなた達だつたのね」

「曹操か……一つ聞きたいんだが」

「何かしり」

「どれだけの諸侯が集まつてゐるんだ？」

「あなた達が最後よ」

「来なけりや良かつた」

「それには大いに同意するナゾ……だめよ

「今日の食事は贅に優しきものが良い……」

「…………」

「…………早速かなさいな

「へこへこ」

そうして天幕に入ると曹操の近くには護衛の夏侯淵と眼鏡をかけた女（恐らく軍師だ）に周瑜・・・恐らく孫策が代わりに来させたのだろう、同情する・・・に袁術と確か張勲だつたか？、それと袁は紹に白い学生服みたいなのを着た奴がいる・・・恐らくあいつが『天の御遣い』とやらだらう・・・

「全員揃つたみたいだから本格的に始めましょうか」

「公孫讚が戻つてきてないが・・・」

「そうですね、では始めましょうか」

「　　（白蓮ちやん）・・・（泣）」

「まずは私から血口紹介させていただきますわ。かつて三公を出した名門・袁家の頭首、袁本初ですわ。お～ほつほつほつほ

「俺は北郷一刀。天の御遣いだ。麗しい将の皆さん、よろしくね（スマイル）」

「曹孟徳よ、こつちは護衛の夏侯淵、それと軍師の郭嘉よ」

『（無視した・・・）』

「周公瑾だ。我が主、孫伯符の名代として今回は参加している」

「妾は袁公路なのじや」

「張勲といいます」

「珀麒麟だ。雷將軍といつ一つ名のほうが分かりやすいだろう。後に控えているのは護衛の劉玄徳、軍師の荀文若と諸葛孔明だ」

「馬孟起だ。母の代わりとして参加している」

その後も諸侯が自己紹介をしていく、最後の一人のときに白蓮も戻ってきたのでそのまま自己紹介し、本題に入りつつこう空気になつたのに・・・

「さて臨さん、K」

「これから先はちょっと割愛させてもらつ・・・なんで? あんな阿呆な演説まがいのものを延々と聞く時間が惜しいからだ・・・俺は右から左に聞き流しながらこいつそり刃禪を行う・・・精神世界つてちゃんとあつたんだよ・・・俺の体は一つだから斬月も捩花のほうと一緒に居る・・・うん、こいつらとの死合いも楽しいな」

「(田線)いい加減推薦しないか?」

「(田線)あんな人を推薦するのなんてよっぽどの馬鹿だよ」

「(田線)ですが誰かがしなければ永遠に続きますよ」

「(田線)それで先陣を押し付けられましゅ・・・つてそういうならいと助けられないんじやないでしゅか?」

「(田線)田線なのにかみかみだよ、朱里ちゃん・・・でもそれは此処だけ、虎牢関とか洛陽の先陣を取られちゃつたら全く意味が無いもん」

「（田線）だな、あたしらの田的は董卓の名を騙つた宦官を討つ事、董卓の配下と戦う事じやない」

「（田線）ええ、ですから兄上もずっと黙つてゐるんでしょ。」  
条件を飲ませれねば良いのですが……」

「（田線）私達がずっと先陣になるという形のですか？・・・袁紹さんは名門に拘つている・・・大丈夫でしゅ！—策がありましゅ！」

卷之三

「（小声）龍鳳さん、推薦してください、私に策があります」

「（小声）分かつた・・・もう貴様で良いんじやないか」

「あら、私がこの連合軍の総大将でよろしいですか？」

「ああ」

「では推薦がありましたので、私がこの連合軍の総大将になつて差し上げますわ。お~ほつほつほつほつほ

『（ずっとなりたがっていたくせに・・・）』

「では私達はこれで失礼するわ。決まった事は後で伝令を出して頂戴。行くわよ、秋蘭、凜」

「はつ（御意）」

「私も失礼をせても、もうひとつ、曹操と周瑜が退席する……一人ともひら見たときの  
田は同情と呆れがあつた……俺だって好きで推薦したんじゃねえよ  
伝令を出してくれ」

やつして曹操と周瑜が退席する……一人ともひら見たときの  
「ではなりたくも無いのに総大将にさせられたのですから責任は取  
つていただきます……先鋒を務めていただきますわ」

「良いだろ？！」

「あら、よひしーのですか？」

「ただし、条件がある」

「何ですか？」

「それは俺のところの軍師からだ……孔明」

「わ、わかりました……！」

『（しつかりかんだ……）』

「えと、？水関だけでなく、洛陽のほうの先鋒も勤めをせてもううえ  
るのなら、ちやんと責任を取りましゅ……！」

『（またかんだ）』

「あら、まさか一番乗りの手柄まで持つていいくつもつですか？」

「ちがう、ここにいる連中で洛陽内のことを見から見まで知つて、なおかつ警備体制とかを知つてゐる奴は居るのか？居ないだろう……だから俺達は偵察として先に行くといふ事だ」

「それでしたらよろしいですわ」

「……では我々も失礼する……攻める準備をしなければいけないのではな」

そうして俺達も退席し、自分達の天幕に戻つて明日の作戦を考えているところに伝令が来た

「どんな内容だったのですか？」

「これだよ……ある意味すばらしきものだ」

そこに書いてあったのは「雄雄しく、華麗に、勇ましく前進」だ  
つた……

「ビームが素晴らしいのですか？」

「これさえ守れば何しようと勝手とこいつよ……いわば何も指示してきていないのとおんなじ」

「ならびつするのだ～」

「華雄も張遼も強い……乗り込む方法は俺と桂花の術で地面から階段を作り出すから、それで……そうだな……夙、愛紗、お前達が先陣で隊を率いて乗り込んでくれ」

「「御意」」

「その後ろから鈴々、星、沙和の三人が同じく隊を率いて乗り込み終わつたらその階段は元に戻す、そして三人は残りを入れるために門を開けてくれ」

「「「御意（分かったの）（だ）」」」

「そして残りのうち右翼は翠と朱里、中央は俺と真桜、左翼は桃香と離里、紫苑と桂花は後方からの援護だ」

「「「「「御意」」」」」

「これは勝つための戦ではなく、救うための戦、誰一人死ぬ事はまかりならん！！」

『御意！』

「うして始まつた『反董卓連合・?水闘戦』・・・華雄、霞・・・すまん・・・俺はお前達と戦う事になつちました・・・怨んでくれて構わない・・・だが・・・

「お前達全員を救うには・・・これしかないとんだもんな・・・」

例えどんなに怨まれようとも、俺はお前達を死なせない・・・友として!!

## 第十五話 諸侯、集結するの！」（後書き）

作・袁紹を殺したくなつた人拳手

鳳・むしろ劇中で殺そつとしてた俺

龍・あれに怒りを感じない人つているの？

作・種馬ボーア

鳳・龍・あいつは鈍感なだけだろ？

作・さて、次回は華雄と張遼との戦い・・・

鳳・愛紗、夙、負けるなよ・・・

龍・何とかしてくれよ、作者

星・誤字脱字報告に意見・感想など待つておるぞーーー！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5111x/>

真・恋姫†無双～伝説を継ぐ物と愚者～

2011年11月20日16時39分発行